

新東京国際空港 埋蔵文化財発掘調査報告書 XVIII

香山新田新山遺跡（空港No.10遺跡）

十余三稻荷峰西遺跡（空港No.68遺跡）

平成15年3月

新東京国際空港公団

財団法人 千葉県文化財センター

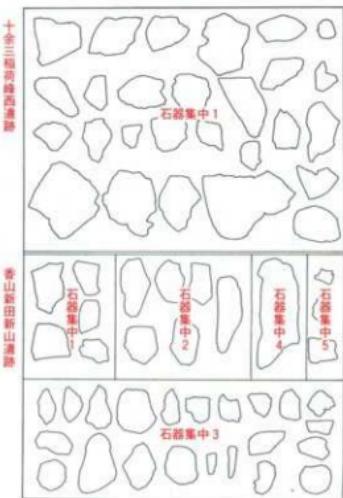
新東京国際空港

埋蔵文化財発掘調査報告書 XVIII

かやましんでんにいやま
香山新田新山遺跡（空港No.10遺跡）

とよみいなりみねにし
十余三稻荷峰西遺跡（空港No.68遺跡）







香山新田新山遺跡・十余三稲荷峰西遺跡 旧石器時代出土石器

序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第447集として、新東京国際空港公団の新東京国際空港建設事業に伴って実施した山武郡芝山町香山新田新山遺跡（空港No10遺跡）及び成田市十余三稻荷峰西遺跡（空港No68遺跡）の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代の石器集中地点や、縄文時代早期の土器包含層、陥穴、炉穴等が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また文化財の保護・普及のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成15年3月25日

財団法人千葉県文化財センター

理 事 長 清 水 新 次

凡　例

1. 本書は、新東京国際空港予定地内の山武郡芝山町香山新田字下堀尻台117-2他に所在した香山新田新山遺跡（空港No10遺跡）及び成田市十余三字福荷峰151-69他に所在した十余三福荷峰西遺跡（空港No68遺跡）の発掘調査報告書で、新東京国際空港関連の発掘調査報告書の第X種集にあたるものである。
2. 発掘調査から報告書作成に至る業務は、新東京国際空港公団の委託を受け、千葉県教育委員会の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 調査で使用した遺跡のコード番号は香山新田新山遺跡が409-007、十余三福荷峰西遺跡が211-022である。
4. 発掘調査は香山新田新山遺跡を平成元年度に、また十余三福荷峰西遺跡を平成12年度に実施し、整理作業は香山新田新山遺跡を平成13年度から14年度にかけて、また十余三福荷峰西遺跡を平成14年度に実施した。
5. 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
6. 本書は東部調査事務所長折原繁の指導と助言のもとに、研究員永塚俊司が編集した。本文の執筆分担は以下のとおりである。

石倉亮治 第2章第3節2

鳴田浩司 第1章、第2章第1節1・第3節1・第4節、第3章第1節1・第3節1・第4節、第4章第1節2・3

永塚俊司 第2章第1節2・第2節、第3章第1節2・第2節・第3節2、第4章第1節1・第2節

7. 周辺地形航空写真は、香山新田新山遺跡が京葉測量株式会社による昭和42年・平成13年撮影のものを、十余三福荷峰西遺跡は昭和55年同社撮影のものを使用した。

8. 本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第1・4・5図 新東京国際空港公団発行 1/2,500 新東京国際空港平面図14・15（昭和42年測量）

第2図 新東京国際空港公団発行 1/2,500 新東京国際空港平面図5・8（昭和42年測量）

第3図 国土地理院発行 1/25,000地形図「新東京国際空港」(NI-54-19-10-1),「成田」(NI-54-19-10-3)
「多古」(NI-54-19-10-2),「酒々井」(NI-54-19-10-4)

9. 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

10. 本書で用いた公共座標、抄録の緯度・経度は日本（旧）測地系によるものである。

11. 本書に収録した遺物及び記録類は、当文化財センターで保管している。

12. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏から多くの御協力・御指導をいただいた。それぞれ記して謝意を表する。（順不同）

千葉県教育庁生涯学習部文化財課、成田市教育委員会、芝山町教育委員会、新東京国際空港公団の関係者各位

本文目次

第1章はじめ	1
第1節 調査の概要	1
第2節 遺跡の位置と周辺遺跡	5
第2章香山新田新山遺跡（空港No10遺跡）	9
第1節 調査の概要	9
1 調査の方法と成果	9
2 基本層序	9
第2節 旧石器時代	13
1 炉跡	14
2 石器集中1	15
3 石器集中2	15
4 石器集中3	15
5 石器集中4・5	24
第3節 縄文時代	28
1 遺構	28
2 出土遺物	30
第4節 中・近世	36
第3章十余三稲荷峰西遺跡（空港No68遺跡）	37
第1節 調査の概要	37
1 調査の方法と成果	37
2 基本層序	37
第2節 旧石器時代	42
1 石器集中1	42
第3節 縄文時代	57
1 遺構	57
2 出土遺物	64
第4節 中・近世	70
1 遺構	70
第4章まとめ	74
第1節 香山新田新山遺跡（空港No10遺跡）	74
第2節 十余三稲荷峰西遺跡（空港No68遺跡）	89
抄録	

挿図目次

第1章		第28図	石器集中1 器種別出土状況	44	
第1図	香山新田新山遺跡調査範囲図	3	第29図	石器集中1 石材別出土状況	45
第2図	十余三稻荷峰西遺跡調査範囲図	4	第30図	石器集中1 出土石器(1)	46
第3図	周辺遺跡	6	第31図	石器集中1 出土石器(2)	47
			第32図	石器集中1 出土石器(3)	48
第2章		第33図	石器集中1 出土石器(4)	49	
第4図	確認調査グリッドと本調査範囲	10	第34図	石器集中1 出土石器(5)	50
第5図	遺構配置図	11	第35図	石器集中1 出土石器(6)	51
第6図	基本層序	12	第36図	石器集中1 出土石器(7)	52
第7図	炉跡	14	第37図	陥穴	59
第8図	石器集中1 出土状況と出土石器	16	第38図	陥穴・炉穴	60
第9図	石器集中2 出土状況と出土石器	17	第39図	縄文土器包含層 遺物集中区	61
第10図	石器集中3 器種別出土状況	18	第40図	0A集中区 出土状況	62
第11図	石器集中3 剥片石器 石材別出土状況		第41図	0D集中区 出土状況	63
		19	第42図	縄文土器(1)	65
第12図	石器集中3 磨・砾片 石材別出土状況		第43図	縄文土器(2)	66
		20	第44図	縄文土器(3)	67
第13図	石器集中3 出土石器(1)	22	第45図	縄文土器(4)	68
第14図	石器集中3 出土石器(2)	23	第46図	縄文土器	69
第15図	石器集中3 完形礫の大きさ	23	第47図	2号溝	71
第16図	石器集中4 出土状況と出土石器	25	第48図	4号溝	72
第17図	石器集中5 出土状況と出土石器	25	第49図	13号土坑	73
第18図	陥穴・土坑	29			
第19図	10F集中区 出土状況	32	第4章		
第20図	縄文土器(1)	33	第50図	第1次調査 旧石器ブロック配置図	75
第21図	縄文土器(2)	34	第51図	第1次調査 Ⅲ上層・中層石器群	77
第22図	縄文石器(1)	34	第52図	第1次調査 Ⅲ下層石器群(1)	78
第23図	縄文石器(2)	35	第53図	第1次調査 Ⅲ下層石器群(2)	79
第24図	8号溝	36	第54図	第1次調査 Ⅲ下層石器群(3)	80
			第55図	第1次調査 Ⅲ下層石器群(4)	81
第3章			第56図	第1次調査 Ⅲ下層石器群(5)	82
第25図	下層確認調査グリッドと本調査範囲	38	第57図	第1次調査 Ⅲ下層石器群(6)	83
第26図	上層確認調査トレンチと遺構配置図	39	第58図	第1次調査 Ⅲ下層石器群(7)	84
第27図	基本層序	40	第59図	香山新田新山遺跡 第1次調査出土 多縄	

文・燃糸文系土器	86	第63図 十余三稻荷峰西遺跡の石器集中1
第60図 香山新田新山遺跡の縄文時代 遺構配置		出土状況（器種別） 91
	87	第64図 十余三稻荷峰西遺跡の石器集中1
第61図 香山新田新山遺跡の溝状造構	88	出土状況（石材別） 93
第62図 十余三稻荷峰西遺跡の石器集中1		第65図 十余三稻荷峰西遺跡の
出土石器集成	90	縄文時代 遺構配置 95

表 目 次

第1章	第3章
第1表 空港用地内及び空港関連の遺跡一覧	第6表 土壤学的観察 41
	7 第7表 石器集中1 石器組成表 43
	第8表 S.56・H.12年度 石器集中1
第2章	石器組成表 53
第2表 石器集中1～5 石器組成表 13	第9表 旧石器観察表(1) 54
第3表 旧石器観察表(1) 26	第10表 旧石器観察表(2) 55
第4表 旧石器観察表(2) 27	第11表 旧石器観察表(3) 56
第5表 縄文石器観察表 31	第12表 縄文石器観察表 69

図 版 目 次

卷頭図版 香山新田新山遺跡・十余三稻荷峰西遺跡	図版7	67号陥穴
旧石器時代出土石器		68号陥穴
		69号陥穴
香山新田新山遺跡（空港No.10遺跡）		4号土坑
図版1 航空写真（昭和42年・平成13年）		5号土坑
図版2 調査前風景		10F集中区
図版3 炉跡	図版8	8号溝
図版4 石器集中1	図版9	石器集中1
図版5 石器集中2		石器集中2
石器集中2・3		石器集中4
図版6 石器集中3		石器集中5
石器集中4	図版10	石器集中3

図版11 繩文土器

図版12 繩文石器（1）（2）

十余三稻荷峰西遺跡（空港No.68遺跡）

図版13 航空写真（昭和55年・56年）

図版14 石器集中1

図版15 21号陥穴

22号陥穴

23号陥穴

24号陥穴

25号陥穴

26号陥穴

27号陥穴

28号陥穴

図版16 繩文包含層 0C・0D

図版17 繩文包含層 0C・0A

図版18 11号炉穴

12号炉穴

13号炉穴

13号土坑

2号溝 0A

図版19 2号溝 0C

4号溝 0C・0D

図版20 石器集中1（1）

図版21 石器集中1（2）

図版22 石器集中1（3）

図版23 繩文土器（1）

繩文土器（2）

図版24 繩文土器（3）

図版25 繩文土器（4）

図版26 繩文土器（5）

繩文石器

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

財団法人千葉県文化財センターでは、新東京国際空港予定地内及び関連事業地内に所在する遺跡について千葉県教育委員会の指導のもとに、新東京国際空港公団の委託により、昭和51年度から計画的・継続的に発掘調査・整理作業を実施し、これらの発掘調査成果の一部はすでに報告書として刊行されている¹⁾。

今回報告する山武郡芝山町香山新田新山遺跡（空港No10遺跡）、成田市十余三稻荷峰西遺跡（空港No68遺跡）についても、千葉県教育委員会が新東京国際空港公団と遺跡の取扱いについて慎重に協議した結果、記録保存の措置がとられることとなった。そこで、当センターは新東京国際空港公団と発掘調査の実施について調整を行い、新東京国際空港建設事業地内埋蔵文化財調査業務として香山新田新山遺跡を平成元年度に、十余三稻荷峰西遺跡を平成12年度に発掘調査することになった（第1・2図）。そのうち十余三稻荷峰西遺跡は「空港予定地内の埋蔵文化財調査（発掘）」及び「防音林予定地埋蔵文化財調査（発掘）」として別契約でそれぞれ発掘調査を実施した。その後、年度計画に基づき、香山新田新山遺跡を平成13年度から14年度にかけて、十余三稻荷峰西遺跡を平成14年度に整理作業を実施した。各遺跡・各年度毎の作業内容及び担当職員は下記の通りである。

なお、香山新田新山遺跡（空港No10遺跡）の一部については、昭和54年度に発掘調査を実施し、すでに『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書V』として昭和60年に報告書が刊行されており²⁾、また十余三稻荷峰西遺跡（空港No68遺跡）の一部についても、昭和56年度及び平成3年度に発掘調査を実施し、すでに『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XII』として平成12年に報告書が刊行されている³⁾。

香山新田新山遺跡（空港No10遺跡）

〔発掘〕

期 間 平成元年4月1日～平成元年6月30日
調査対象面積 15,000m²、上層確認調査面積970m²、下層確認調査面積780m²
上層本調査面積380m²、下層本調査面積550m²
担 当 者 班 長 藤崎芳樹
技 師 矢本節朗、尾野善裕

〔整理〕

期 間 平成13年10月1日～平成14年3月31日
内 容 分類～原稿の一部
担 当 者 東部調査事務所長 折原繁
主 席 研究員 宮重行
空港調査室長 鳴田浩司
研 究 員 永塚俊司

期 間 平成14年9月1日～平成15年3月31日

内 容 原稿の一部～報告書刊行

担 当 者 東部調査事務所長 折原 繁

同 副 所 長 石倉亮治

研 究 員 永塚俊司

十余三種荷峰西遺跡（空港No.68遺跡）

〔発掘〕

空港予定地内

期 間 平成12年5月8日～平成12年8月31日

調査対象面積 20,700m², 上層確認調査面積1,656m², 下層確認調査面積1,656m²

上層本調査面積3,300m², 下層本調査面積450m²

担 当 者 東部調査事務所長 折原 繁

空港調査室長 鳴田浩司

上席研究員 田島 新, 大槻一実

研究員 小笠原永隆

防音林予定地内

期 間 平成12年10月10日～平成12年10月31日

調査対象面積 2,000m², 上層確認調査面積160m², 下層確認調査面積160m²

上層本調査面積0m², 下層本調査面積0m²

担 当 者 東部調査事務所長 折原 繁

空港調査室長 鳴田浩司

〔整理〕

期 間 平成14年4月1日～平成15年3月31日

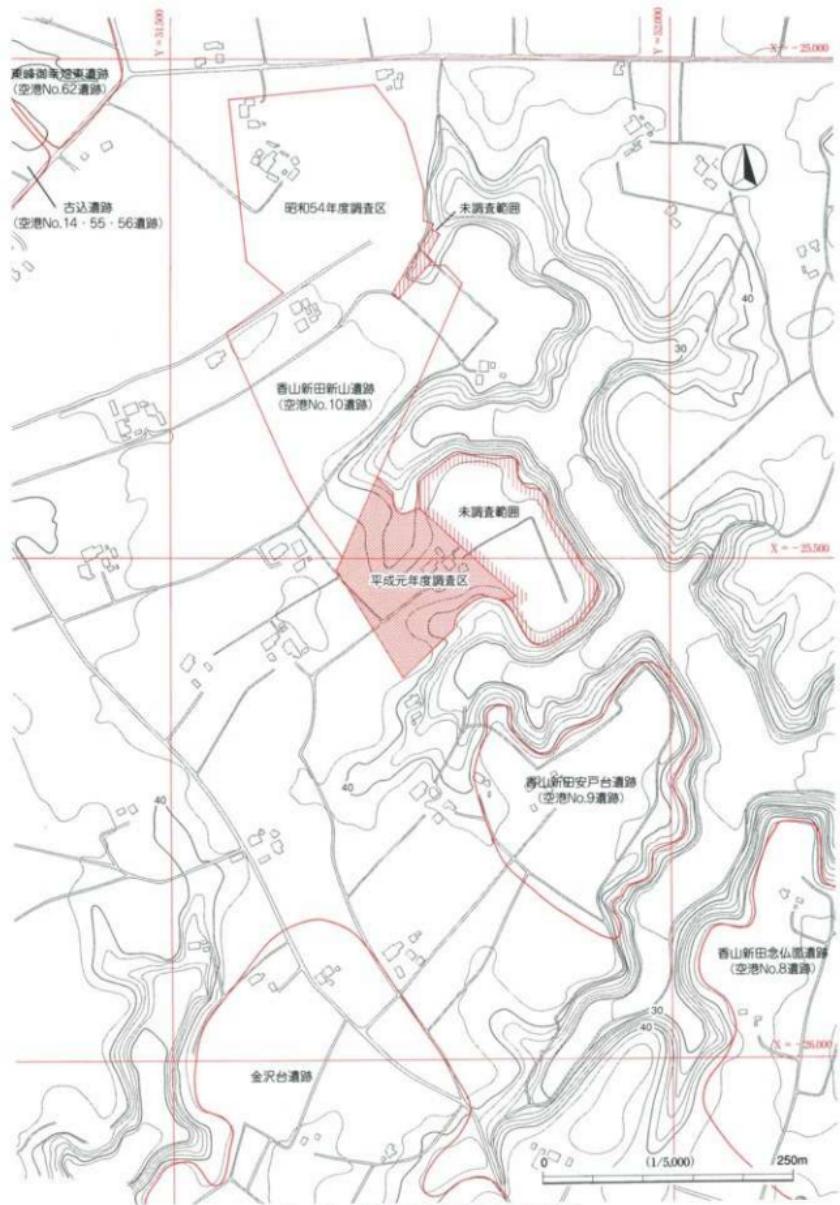
内 容 水洗・注記～報告書刊行

担 当 者 東部調査事務所長 折原 繁

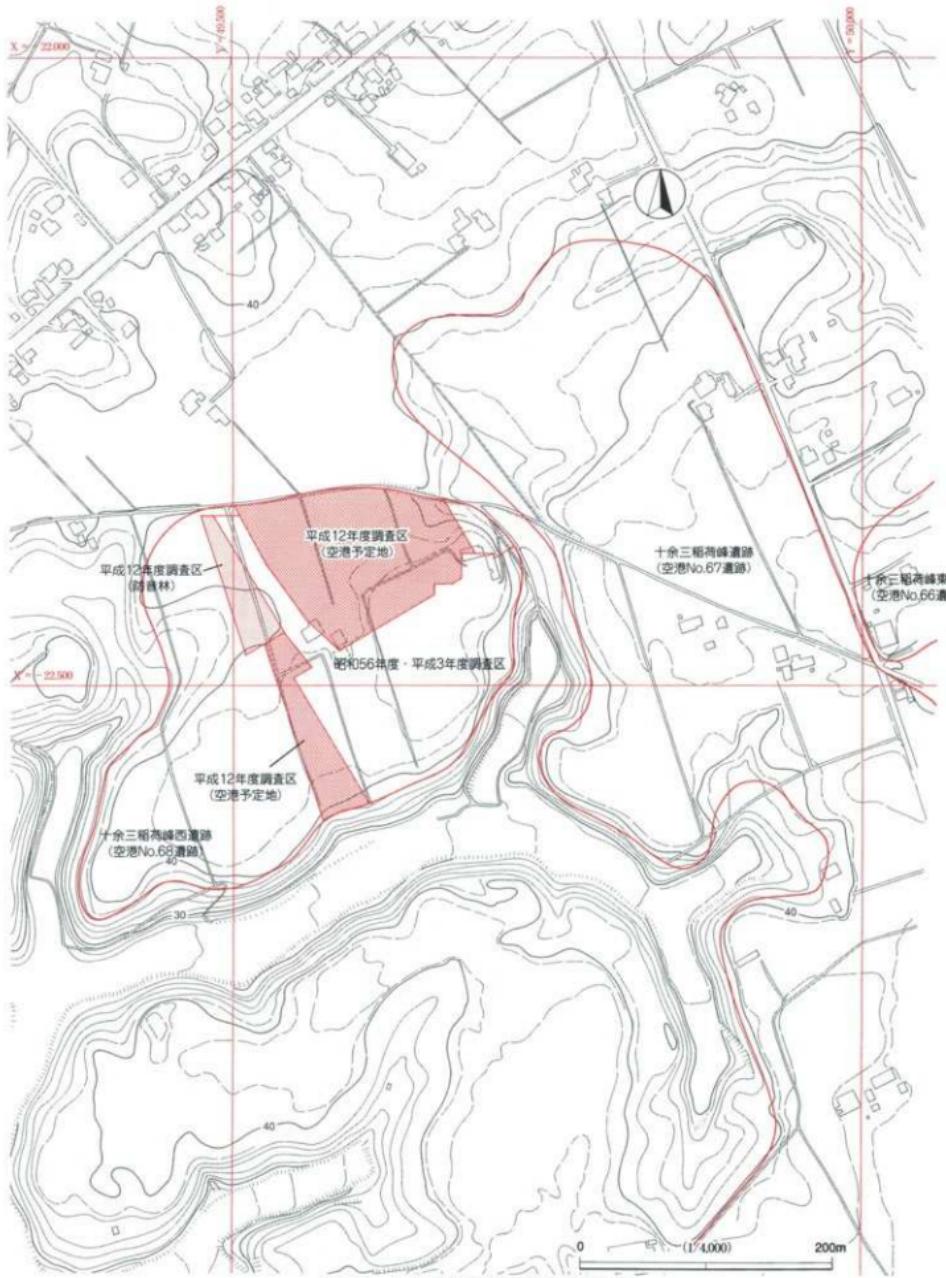
同 副 所 長 石倉亮治

空港調査室長 横山 仁

研 究 員 永塚俊司



第1図 香山新田新山遺跡調査範囲図



第2図 十余三稲荷峰西遺跡調査範囲図

第2節 遺跡の位置と周辺遺跡

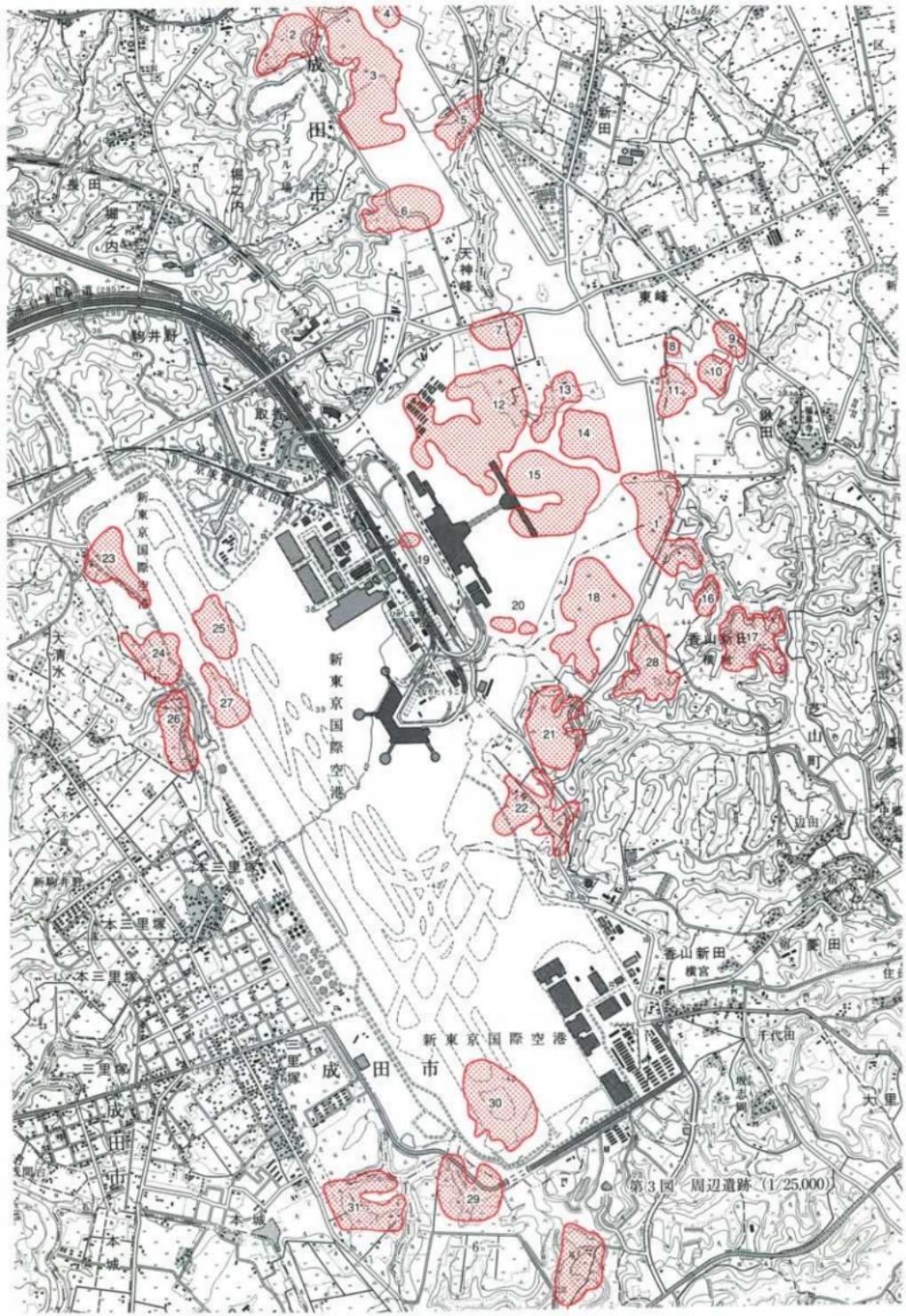
遺跡の位置 空港周辺地域には、利根川へ北流する河川と九十九里方面へ南流する河川の分水界が走り、全体としては比較的広い平坦な台地の広がりを見ることができ、源流域では特に八つ手状に開析を受けた台地が密集する。遺跡はそのような開析を受けた舌状台地上に立地するのが一般的で、両遺跡も例外ではない（第3図）。

香山新田新山遺跡（空港No10遺跡）は、山武郡芝山町香山新田字下堀尻台117-2他に所在する。空港事業地内ではちょうど平行滑走路南東端にあたる。遺跡は、九十九里方面へ南流し光町、多古町、横芝町の三町の境界で栗山川本流へ合流する高谷川の源流域に突出する、標高約41mの舌状台地上に立地する。

一方、十余三稻荷峰西遺跡（空港No68遺跡）は、平行滑走路の北西端にあたる成田市十余三字稻荷峰151-69他に所在し、香山新田新山遺跡とは直線距離で約3.7km隔てて対面する。利根川水系の根古名川支流の取香川に開析された谷津の最奥部に位置する。標高は約40mで、周辺の水田面との比高は約13mである。

周辺の遺跡 香山新田新山遺跡周辺には、高谷川本流から西へ延びる支流に挟まれて複雑に開析された台地上に遺跡が密集し、香山新田安戸台遺跡（空港No9遺跡）⁴⁾、香山新田念佛面遺跡（空港No8遺跡）、香山新田中横堀遺跡（空港No7遺跡）⁵⁾、金沢台遺跡が隣接する。旧石器時代は、香山新田安戸台遺跡では第2黒色帯を中心とする文化層と立川ロームV層～IV層を中心とする文化層にわかれ、7地点の石器集中地点及び1か所の炭化物集中地点を検出した。特に接合によって原石状態にまで復元できた珪質頁岩の接合資料は、素材剥片生産から調整剥離に至るナイフ形石器生産の工程全てを含むもので注目される（石器集中4）。香山新田中横堀遺跡では有植尖頭器を伴う石器群と、立川ロームVI層～V層中の有植石刃を伴う石器群が注目される。また、平成12年度から13年度にわたり、建設センター・保全事務所建設に伴う調査が金沢台遺跡で実施され、旧石器時代立川ロームIX層～III層にかけて数枚の文化層を検出している。縄文時代の遺構・遺物では、香山新田中横堀遺跡で多くの陥穴・炉穴等の遺構、早期を中心とした土器包含層が検出されている。金沢台遺跡では、それほど濃密な分布状況を示さないことから、各支流の最上流域にこの時期の人類活動の痕跡が集中することが現状で把握される。

一方、十余三稻荷峰西遺跡周辺には、十余三稻荷峰遺跡（空港No67遺跡）、十余三稻荷峰東遺跡（空港No66遺跡）⁶⁾、十余三稻荷峰東遺跡からさらに南方に天神峰奥之台遺跡（空港No65遺跡）⁷⁾がある。昭和56年度の十余三稻荷峰西遺跡の調査では、旧石器時代の石器集中地点13か所と3つの文化層が検出され、立川ロームX層上部からIXc層を主体とする2つの環状ブロックを検出した。両ブロックの石器は共に台形様石器を主体とし、ナイフ形石器、楔形石器、スクレイバー等が伴う比較的単純な器種構成を示している。縄文時代では三戸式土器を中心とした沈籠文系土器と繩ヶ島式土器を中心とした条痕文系土器を主体とした遺物包含層を検出した。また、竪穴状遺構、土坑、炉穴、陥穴等の遺構を検出している。十余三稻荷峰遺跡では立川ロームIX層～III層中から複数の文化層が検出された。とりわけ黒曜石を主体とした稜柱形細石刃石核による細石刃石器群が特筆される。十余三稻荷峰東遺跡では立川ロームIII層中から珪質頁岩を主体とした周縁加工により整形された尖頭器を伴う良好な石器群と、稜柱形の細石刃石核が単独で検出されている。天神峰奥之台遺跡では、石器群は3つの文化層に分離され、台形様石器を主体とする第I文化層（IX層下部）、珪質頁岩製の大形石刃を素材とする有植石刃石器群が主体の第II文化層（IX層～VII層）



第1表 空港用地内及び空港関連の遺跡一覧

	遺跡名称	所在地			報告書	
		市町村	大字	小字		
1	香山新田新山道跡（空港No10道路）	山武郡芝山町	香山新田	下原尻台	117・2地	1985 新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書V
2	十余三福寺西道跡（空港No68道路）	成田市	十余三	福寺跡	151・69地	2000 新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XII (整理中)
3	十余三福寺東道跡（空港No67道路）	成田市	十余三	福寺跡	151・262地	2001 新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XIII
4	十余三福寺東北道跡（空港No66道路）	成田市	十余三	福寺跡	151・29地	2001 新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XIV
5	天神森島之台道路（空港No55道路）	成田市	天神跡	森之台	17地	1997 新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書X
6	天神跡最上道路（空港No54道路）	成田市	天神跡	最上	14・1地	2001 新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XV
7	東峰西豊跡道跡（空港No53道路）	成田市	東峰	西豊跡	25・2地	1997 新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XI
8	-多古田兵衛山道跡	香取郡多古町	-多古田	兵衛山	454・1地	1997 多古田-多古田兵衛山道跡-刈り草場埋蔵文化財発掘調査報告書-
9	-多古田兵衛山北道跡（空港No51道路）	香取郡多古町	-多古田	兵衛山	472・2地	1998 新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書IX
10	-多古田兵衛山南道跡（空港No52道路）	香取郡多古町	-多古田	兵衛山	454・22地	1966 「研究記要10」一部掲載。 (整理中)
11	-飯田若兵衛山西道跡（空港No16道路）	香取郡多古町	-飯田	若兵衛山	454・14地	2001 新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XV
12	取香和田豆跡（空港No50道路）	成田市	取香	和田豆	711地	1994 新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書VI
13	東峰御幸塚西道跡（空港No61道路）	成田市	東峰	御幸塚	89・1地	2002 新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XII
14	東峰御幸塚北道跡（空港No62道路）	成田市	東峰	御幸塚	89地	2000 新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XIII (整理中)
15	古込道跡（空港No14・55・56道路）	成田市	古込	古込		1971 「三星塚」 1983 新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書III
16	香山新田安戸台道跡（空港No9道路）	山武郡芝山町	香山新田	安戸台	128・1地	2002 新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XIV
17	香山新田志仏面道跡（空港No8道路）	山武郡芝山町	香山新田	志仏面		(未調査)
18	香山新田中横堀道跡（空港No7道路）	山武郡芝山町	香山新田	中横堀	101・2地	1984 新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書IV
		山武郡芝山町	更田	上金沢	156地	1993 新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書VII
19	古込込前道跡（空港No22道路）	成田市	古込	込前		1971 「三星塚」
20	古込朝日台道跡（空港No13道路）	成田市	古込	朝日台		1971 「三星塚」
21	木の根拓美道跡（空港No6道路）	成田市	木の根	拓美	192地	1981 「木の根」 1993 新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書VIII
22	木の根東台道跡（空港 No 5 道路）	成田市	木の根	東台	217地	1981 「木の根」
23	駒井野新橋道跡（空港No21道路）	成田市	駒井野	新橋		1981 「木の根」
24	駒井野新田道跡（空港No20道路）	成田市	駒井野	新田		1971 「三星塚」
25	火除塚丘道跡（空港No17道路）	成田市	火除	浪丘		1971 「三星塚」
26	駒井野横谷津道跡（空港No17道路）	成田市	駒井野	横谷津		1971 「三星塚」
27	天保大里道跡（空港No18道路）	成田市	天保	大里		1971 「三星塚」
28	金沢台道跡	山武郡芝山町	香山新田	金沢台	89地	(平成12年度～13年度調査実施)
29	岩山中袋道跡（空港No2道跡）	山武郡芝山町	岩山	中袋	2016地	1980 新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書V
		山武郡芝山町	人袋台		2015・1地	1997 「土本保守管理センター等埋蔵文化財発掘調査報告書」
30	東三里塚古台道跡（空港No3・51・53道路）	成田市	東三里塚	古台		1971 「三星塚」
31	南三里塚宮園道跡（空港No4道路）	成田市	南三里塚	宮園	6地	1993 新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書IX

層)、疊群を伴い切出形ナイフ形石器を主体とする第Ⅲ文化層(Ⅴ層～Ⅳ層下部)がある。縄文時代では、十余三稈荷峰遺跡で三戸式を中心とした沈線文系土器と条痕文系土器を伴う住居跡をはじめ、多数の炉穴、陥穴等を検出した。

その他、空港用地内には数多くの遺跡が所在し、すでに刊行された空港予定地内の報告書もある。各遺跡と報告書を対照できるよう第1表にまとめた。

- 注1 西野 元他 1971『三里塚 新東京国際空港用地内の考古学的調査』(財)千葉県北越公社
官 重行・池田大助・野口行雄他 1981『木の根』
〔以下すべて編集・発行は〕(財)千葉県文化財センター・新東京国際空港公団
野口行雄他 1983『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ No14遺跡』
西川博孝他 1984『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ -No 7 遺跡-』
川島利道・雨宮龍太郎 1985『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書V -No 2 遺跡- No10遺跡』
金丸 誠・矢本節朗 1990
『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書VI -成田市木戸下遺跡・富里町七栄古込遺跡-』
新田浩三他 1993
『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書VII 南三里塚宮闕遺跡 木の根折美遺跡 香山新田中横堀遺跡』
宮 重行・新田浩三他 1994『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書VIII 取香和田戸遺跡(空港No60遺跡)』
新田浩三他 1995『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書IX -一銀田甚兵衛山西遺跡(空港No11遺跡)-』
横山 仁・矢本節朗 1997
『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書X -天神峰奥之台遺跡(空港No65遺跡)-』
平野雅一・永塚俊司 1999『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書XI -東峰西笠峰遺跡(空港No63遺跡)-』
宮 重行・麻生正信・永塚俊司 2000
『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XII -十余三稈荷峰西遺跡(空港No68遺跡)-』
宮 重行・麻生正信・永塚俊司 2000
『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XIII -東峰御幸畠西遺跡(空港No61遺跡)-』
永塚俊司他 2001『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XIV -一銀田甚兵衛山西遺跡(空港No16遺跡)-』
永塚俊司他 2001『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XV -天神峰最上遺跡(空港No64遺跡)-』
永塚俊司他 2001『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XVI -十余三稈荷峰東遺跡(空港No66遺跡)-』
鳴田浩司・永塚俊司他 2002『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XVII -香山新田安戸台遺跡(空港No9遺跡)・取香和田戸遺跡(空港No60遺跡)-』

2 注1 川島・雨宮文献 1985

3 注1 宮・麻生・永塚文献 2000

4 注1 鳴田・永塚他文献 2002

5 注1 新田他文献 1993・西川他文献 1984

6 注1 永塚他文献 2001

7 注1 横山・矢本文献 1997

第2章 香山新田新山遺跡（空港No.10遺跡）

第1節 調査の概要

1 調査の方法と成果（第4・5図）

発掘調査を始めるにあたり、調査対象区域に公共座標にあわせて、 $50m \times 50m$ の大グリッドを設定した。その大グリッド内をさらに $5m \times 5m$ に分割し、100個の小グリッドを設定した。大グリッドの基点は昭和54年度の一次調査で設定・使用したものを踏襲し¹⁾、0 Aの北西隅をX=-25.000・Y=51.500とし、北から南へ0, 1, 2, ……、西から東へA, B, C, ……と記号をつけた。小グリッドは北から南へ00, 10, ……90、西から東へ00, 01, ……09と番号を振り、大グリッドと組み合わせて呼称することとした。今回の調査地点は8D・8E, 9D～9F, 10D～10G, 11E・11F, 12E区にあたる。

調査対象面積15,000m²に対して、上・下層とも $2m \times 2m$ の確認グリッドを全面積の4%を基準に調査区全体に設定し、確認調査を実施した。幾つかのグリッドでは遺構・包含層の広がりを確認するために、グリッドを拡張した。その結果、確認調査面積は上層970m²、下層780m²となった。上層遺構は縄文時代陥穴3基、炉穴1基、近世溝状遺構2条を検出し、380m²の本調査を確認調査後継続して実施した。最終的に全体として縄文時代早期土器包含層1か所、陥穴3基、土坑2基、近世溝状遺構1条を調査するに至った。一方、下層確認の深度は武藏野ローム上面で、立川ロームに包含される石器群・遺構の有無について調査を行った。その結果に基づいて、550m²の本調査を行い、立川ロームVII層～X層にかけて2か所のブロックと炉跡1基、Ⅲ層上面で疊群を主体とした2か所のブロックを検出した。

上層の遺構番号は、第1次調査で付した遺構番号と連続するように、調査時の番号を振り替えた。すなわち以下のようになる。（調査時遺構番号：整理番号）

102：67号陥穴、103：68号陥穴、104：69号陥穴、105：4号土坑、106：5号土坑、101：8号溝

2 基本層序（第6図）

11E64グリッド西壁土層断面を第6図に示した。平成2年にセンター内で共通理解を得た標準土層²⁾を踏襲したものである。IV層はソフト化しているため分層が不可能である。V層以下がハードロームとなるが、ハードローム最上部のソフトロームとの境界は著しい波状部を形成し、V層も最下部のみが観察される状況である。なおV層は第1黒色帯に相当する。AT（姶良丹沢）火山灰は上下に拡散した状態ではあるが、最も集中する部分をVI層とした。VII層は第2黒色帯の上半部でATの拡散が目立つ。IX層は第2黒色帯下半部であるが、分層は困難であった。X層は立川ローム最下層であるが、それより下位はいわゆる水つきロームとして変質しているため、武藏野ローム層との境界ははっきりしない。

昭和54年度の調査では、遺跡の中央を走る道路を挟んで対岸の6D07グリッドの土層断面を標準層序としている。11E64グリッドのものと比較すると、立川ローム全体の層厚はほとんど変わらないが、各層の捉え方がかなり異なっていることに気づく。ソフトロームとハードロームの境界を基準とすると、S54.Secでは上下に拡散したATをすべて一括し、IV～VI層としているためH元.Secよりも大幅に厚目にとらえている。VI層の捉え方と同様に異なるのが第2黒色帯の認識である。S54.Secは第2黒色帯を約30cmの幅で



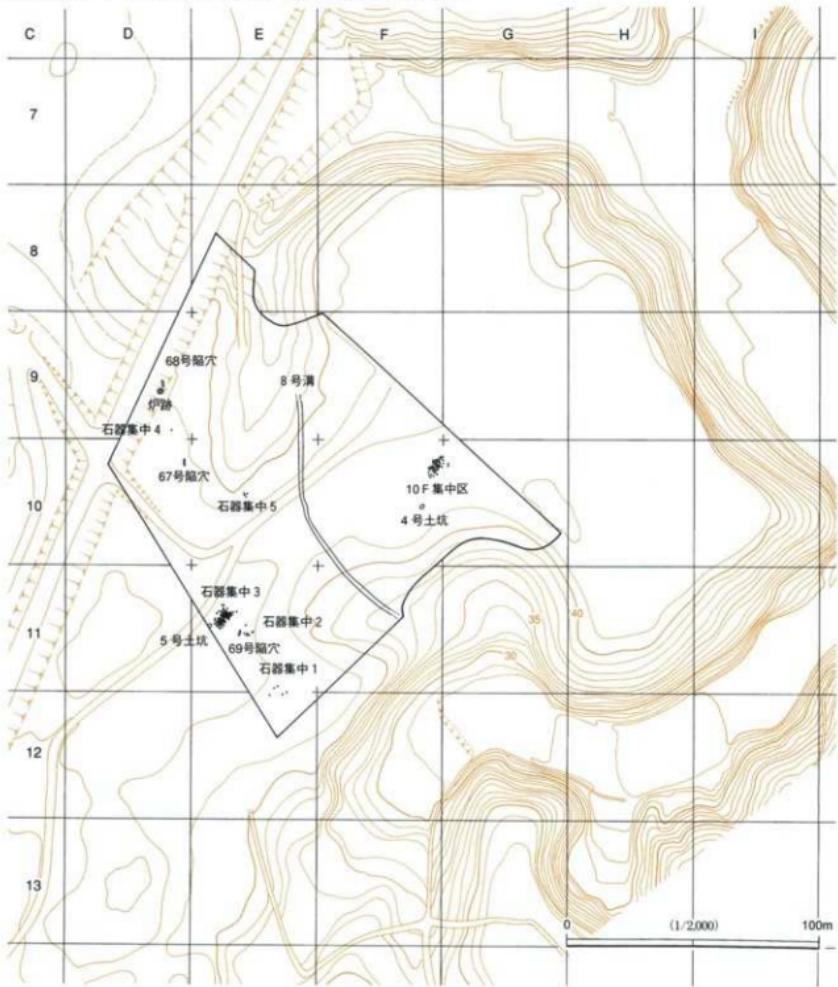
第4図 確認調査グリッドと本調査範囲

とらえている一方で、H元.Secは約60cmとほぼ2倍の層厚を示している。そこで、S.54.Secのカラー写真を見てみるとやはり、黒味帯びた第2黒色帶の下部が現在の認識よりもより上位にあるため、厚くとらえられたVI層と合わせて、第2黒色帶の厚みが、現在の認識と大きく異なっているのである。

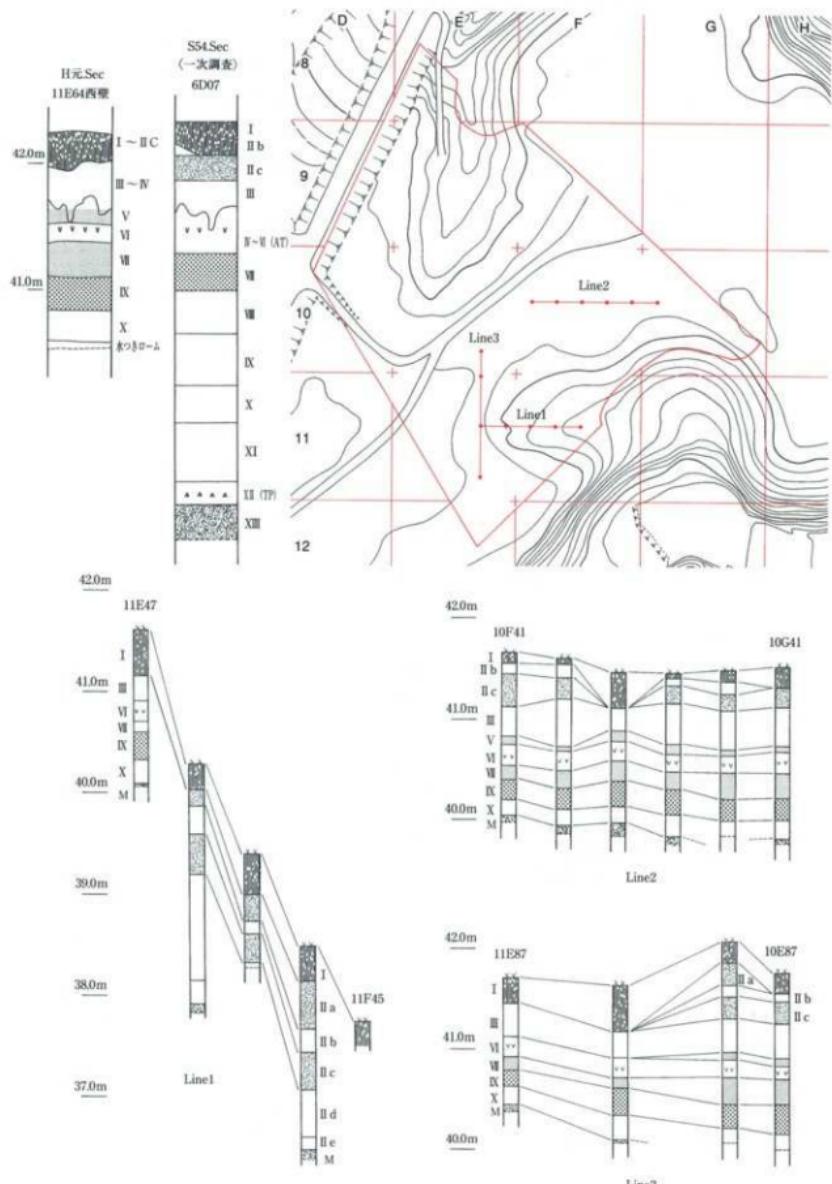
注1 川島利道・雨宮龍太郎 1985『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書V No2遺跡 No10遺跡』

(財)千葉県文化財センター

2 烏立 桂・新田浩三・渡邉修一 1992「下総台地における立川ローム層の層序区分－平成2・3年度職員研修会から－」『研究連絡誌』第35号(財)千葉県文化財センター



第5図 遺構配置図



第6図 基本層序

第2節 旧石器時代

立川ローム層から検出された遺構は、炉跡1基、石器集中地点5か所である。石器集中地点の出土層位は、下位からⅩ層下部～X層〔石器集中1〕、Ⅷ層下部～Ⅸ層〔石器集中2〕、Ⅲ層〔石器集中3〕、Ⅱc層下部〔石器集中4・5〕である。炉跡はⅦ層下部～X層上部で炭化材・焼土粒の集中部が検出された。

第2表 石器集中1～5 石器組成表

石器集中1	剣片	疎片	合計	組成比
安山岩A	2 11.08	2 11.08	33.33	56.18
ホルンフェルス	1 6.35	1 6.35	16.67	28.76
磁灰岩	1 2.12	1 2.12	16.67	9.60
珪質頁岩	1 2.41	1 2.41	16.67	10.91
黒曜石	1 0.12	1 0.12	16.67	0.54
合計	5 21.65	6 22.00	100.00	100.00
組成比	33.33 99.45	16.67 0.54	100.00	100.00

石器集中2	使用痕のある剣片	調整痕のある剣片	剣片	疎片	合計	組成比
安山岩B		4 16.18		4 16.18	4 16.18	44.44 55.56
珪質頁岩	2 9.65				2 9.65	22.22 27.60
ホルンフェルス		1 4.76		1 4.76	1 4.76	11.11 13.62
メノウ		3.84			3.84	11.11 10.98
チャート				1 0.53	1 0.53	11.11 1.52
合計	2 9.65	1 3.84	5 20.93	5 0.53	9 34.09	100.00 100.00
組成比	22.22 27.60	11.11 10.98	55.56 59.90	1.11 1.52	100.00	100.00

石器集中3	ナイフ形石器	彫刻刀形石器	楔形石器	揚器	使用痕のある剣片	調整痕のある剣片	剣片	疎片	石核	疎	縫片	合計	組成比	
チャート							4 23.33	28 306.99	426 1099.55	456 1430.17	456 4592	62.06		
波紋岩							1 27.28	99 318.86	120 390.23	120 362.09	120 1239	16.28		
磁灰岩							3 31.86	61 85.1	64 137.37	64 151.31	64 51.8	8.67		
砂岩	1 5.43						1 8.51	34 137.37	36 151.31	36 2.27	36 0.16	4.88		
珪質頁岩A		1 3.79			1 0.84					2 4.63		2 0.16		
珪質頁岩B	4 12.52	1 3.95		1 3.61	1 1.64	4 4.78	8 4.71	2 0.11	1 10.52	21 26.65	21 15.31	21 0.52	2.85	
珪質頁岩							2 3.33			5 14.55	7 17.88	5 0.61	0.95	
ホルンフェルス							1 0.86			1 0.86	1 0.03	1 0.03	0.14	
安山岩A							1 0.86			7 12.87	7 12.87	7 0.44	0.95	
泥岩							2 2.90			7 14.66	7 57.62	7 72.28	0.95	
頁岩	2 3.12	1 4.12	2 6.06				2 2.90			7 14.66	7 57.62	7 72.28	0.95	
片岩										1 3.98	1 3.98	1 0.14	0.14	
その他										1 1.16	10 14.66	11 57.62	11 72.28	2.47
合計	2 3.12	6 22.07	1 3.05	3 9.85	1 3.61	1 1.64	5 5.64	2 1.11	5 13.92	5 33.85	54 635.30	644 2191.35	738 2923.51	100.00 100.00
組成比	0.27 0.11	0.81 0.75	0.14 0.10	0.41 0.34	0.14 0.12	0.14 0.06	0.68 0.19	0.27 0.48	0.68 0.00	7.32 1.16	87.36 21.73	738 74.95	100.00 100.00	

石器集中5	使用痕のある剣片	剣片	疎片	合計	組成比
ホルンフェルス		1 2.00	1 2.00	25.00 58.45	
安山岩A		1 1.01	1 1.01	25.00 29.53	
黒曜石	1 0.34	1 0.07	2 0.41	50.00 11.99	
合計	1 0.34	2 3.01	1 0.07	100.00 34.42	
組成比	0.27 0.11	0.81 0.75	0.14 0.10	0.41 0.34	100.00 100.00

石器集中4	使用痕のある剣片	合計	組成比
珪質頁岩A	2 13.88	2 13.88	100.00 100.00
合計	13.88 13.88	13.88 100.00	100.00 100.00
組成比	100.00 100.00	100.00 100.00	100.00 100.00

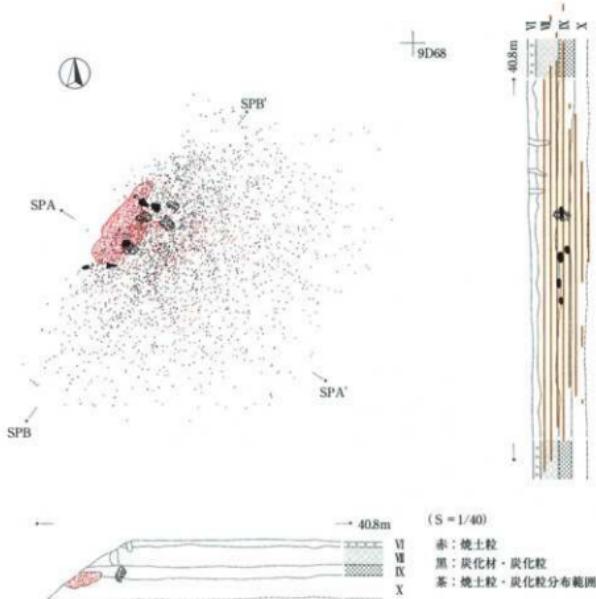
1 炉跡（第7図、図版3）

炉跡は調査区の北西端、9D67グリッドから検出された（第5図）。直下には道路が走り、のり面の際に位置するため、遺構の北西部部分はすでに削平され消滅している。掘り込み等の遺構は検出されず、炭化粒・焼土粒が、長軸約3m・短軸約2mの範囲で分布している。石器は検出されておらず、石器集中地点とは重ならない。

調査は検出面から水平に5cmずつ掘り下げていき、各面で分布状況を記録した。その結果、Ⅶ層下部から検出されはじめた炭化粒・焼土粒は、最終的に40cm掘り下げたところ（X層上部）で見られなくなった。その分布状況は下位へいくほど分布範囲が狭くなり、分布密度も低くなることが指摘できる。分布の中心は、削平部分の際中央付近にあり、焼土粒が密集し、比較的大きな炭化材（5～10cm）が集中している。全体的には、焼土塊を中心に比較的大きな炭化材が点在し、周辺に炭化粒・焼土粒が広く分布した状況となっている。

2 石器集中1（第8図、第2・3表、図版4・9）

11E96、12E06-07グリッドを中心として径9mの範囲に6点の石器が散漫に分布している。出土層位はⅨ層下部～X層に集中する。剥片5点、碎片1点の合計6点が出土した。石材は安山岩（2点）、ホルンフェルス（1点）、黒曜石（1点）、凝灰岩（1点）、珪質頁岩（1点）で構成される。剥片5点を図示した。1は凝灰岩製の剥片で、背面の光沢痕は自然面としたが、研磨面であるとすれば局部磨製石斧の調整



第7図 炉跡

剥片である可能性が高い。2・4は安山岩を用いた剥片で、2は上端が欠損しているので分からぬが、4の背面には打面からの頭部調整が顕著に残されている。

※なお、各石器集中地點の出土状況平面図には遺物の出土レベルを5cm刻みで区切ったヒストグラムをそれぞれに付けたが、その横には土層断面図を用いて作成した各層の分布範囲を示している。これは、土層断面図で同一層序の最高地点と最低地点を結んでその範囲を示したものであるため、上下の層はそれぞれ重なった状況となっている。そして各層が2本示してあるものについては、土層断面図が東西・南北で記録されている場合に限って、両者を示したものである。

3 石器集中2(第9図、第2・3表、図版5・9)

11E54グリッドを中心として径5mの範囲に9点の石器が散漫に分布している。出土層位はⅢ層下部～X層に集中し、石器集中1よりは若干上位に分布するようである。調整痕のある剥片1点、使用痕のある剥片2点、剥片5点、礫片1点を含む合計9点の石器が出土した。石材は安山岩B(4点)、チャート(1点)、メノウ(1点)、ホルンフェルス(1点)、珪質頁岩(2点)で構成される。1は縦長剥片と4の打面部が折断された剥片の縁辺には不規則な微細剥離痕が観察される。3はメノウ製の調整痕のある剥片で、縁辺に連続した急角度調整が施されている。安山岩B(いわゆるトロトロ石)は4点が出土しているが(2・6)、6の背面には稜調整が見られ、打面調整剥片である可能性が高い。

4 石器集中3(第10図～15図、第2表～4表、図版5・6・10)

概要 11E32・42グリッドを中心として、径12mの範囲に集中域を2か所形成している。北側の集中域は、11E32グリッドに位置し、径4mのブロックを形成する。南側の集中域は11E42グリッドに位置し、北側の集中域に比べ分布密度が低いものの径4mの範囲に円形に分布する。出土層位はⅢ層上部～下部に集中する。

出土石器は圧倒的に礫・礫片が主体を占め、出土石器738点中698点が礫・礫片で占められる。

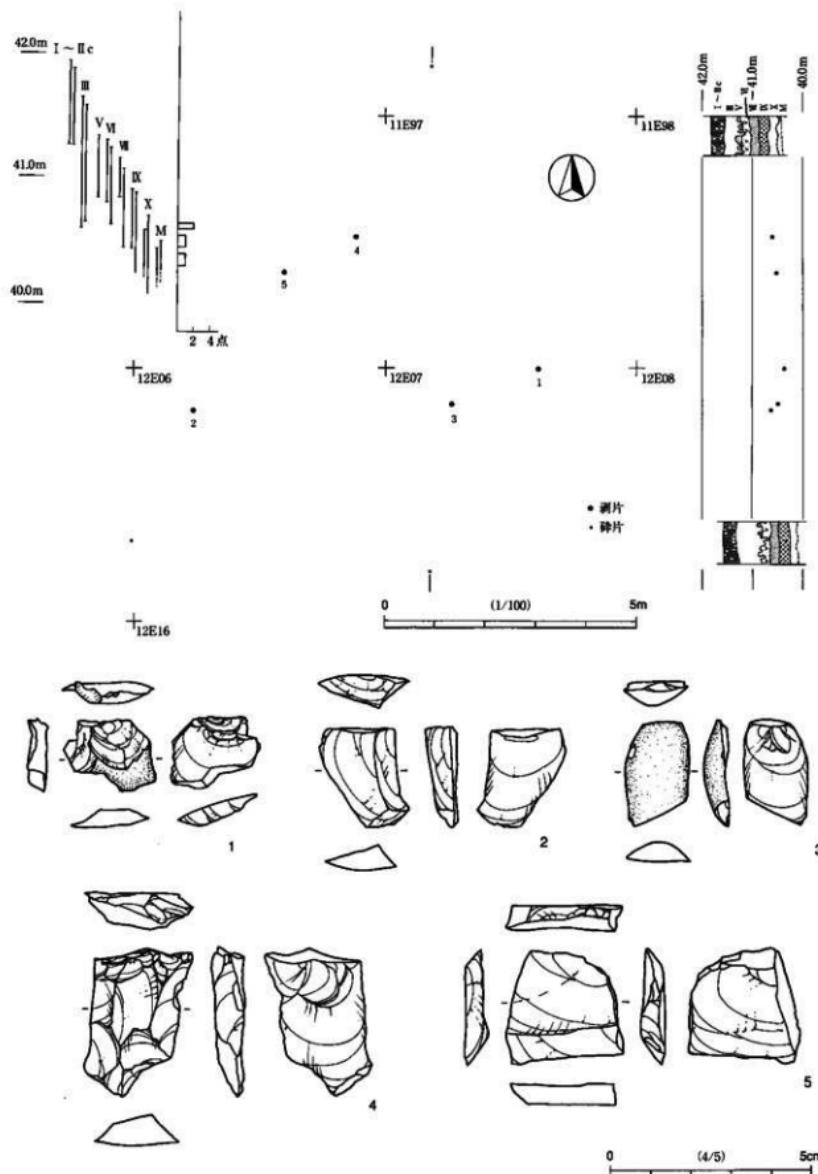
剥片石器 ナイフ形石器2点、彫刻刀形石器6点、削片5点、搔器3点、楔形石器1点、微細剥離痕のある剥片2点、剥片・碎片16点、石核5点を含む、合計40点の剥片を素材とした石器や石核が出土した。

1・2は小型のナイフ形石器である。1は右側面に急角度調整を施したものであるが、磨滅により稜が潰れた状態となっている。2は素材剥片の打面から背面に向かって調整が施され、左側面には基部に僅かながら急角度調整が施されている。両者とも頁岩が用いられ、同一母岩と思われる。

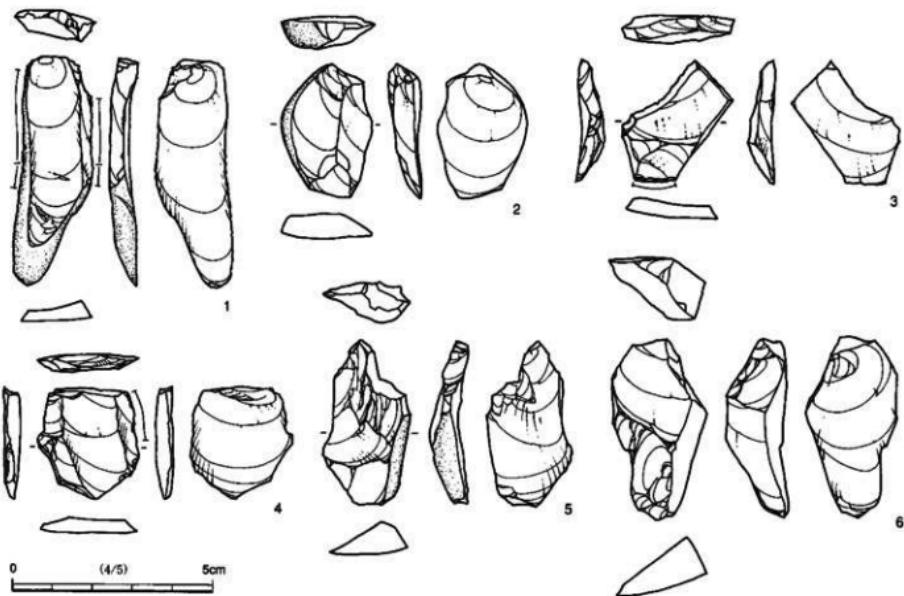
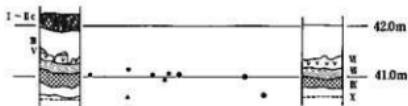
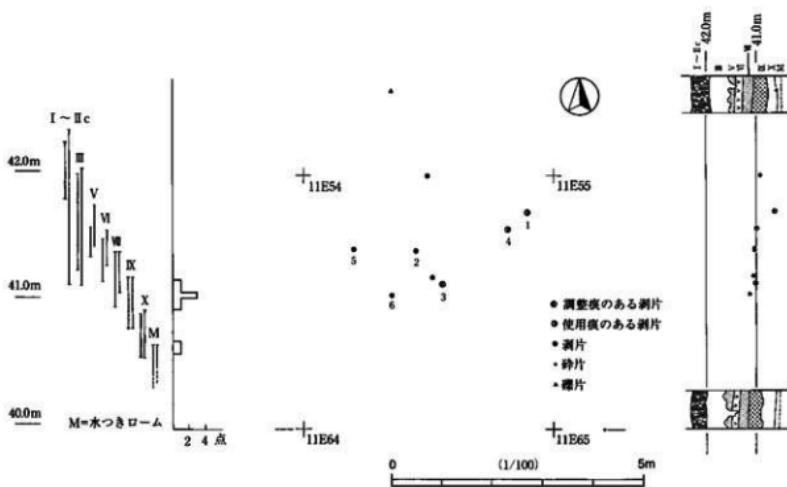
3は剥片縁辺の全周に調整が施され菱形に整形されたものを素材とした彫刻刀形石器で、彫刃面は先端部左側にみじかく観察される。基部はやや丸み帯びた形態を呈している。調整は各側面に背面・腹面交互に施されており、特徴的である。砂岩製。

4～7は彫刻刀形石器である。いずれも、嶺岡産の珪質頁岩を用いている。4は棒状の形態を呈し、左側面に彫刃面が形成される。右側面には主要剥離面側からの急角度調整が施されている。5は折断面を打面として両側面に彫刃面が意図されるが、右側面の方は抜け切れておらず途中でヒンジとなっている。6は、厚みのあるブロック状を呈したもので、折断面を打面として彫刃面を形成している。実測図下面には急角度調整が施されている。7は、明確な彫刃面として認識できる2面は直交するもので、他に彫刃面を意図したのかもしれない微細な剥離痕が數カ所観察される。

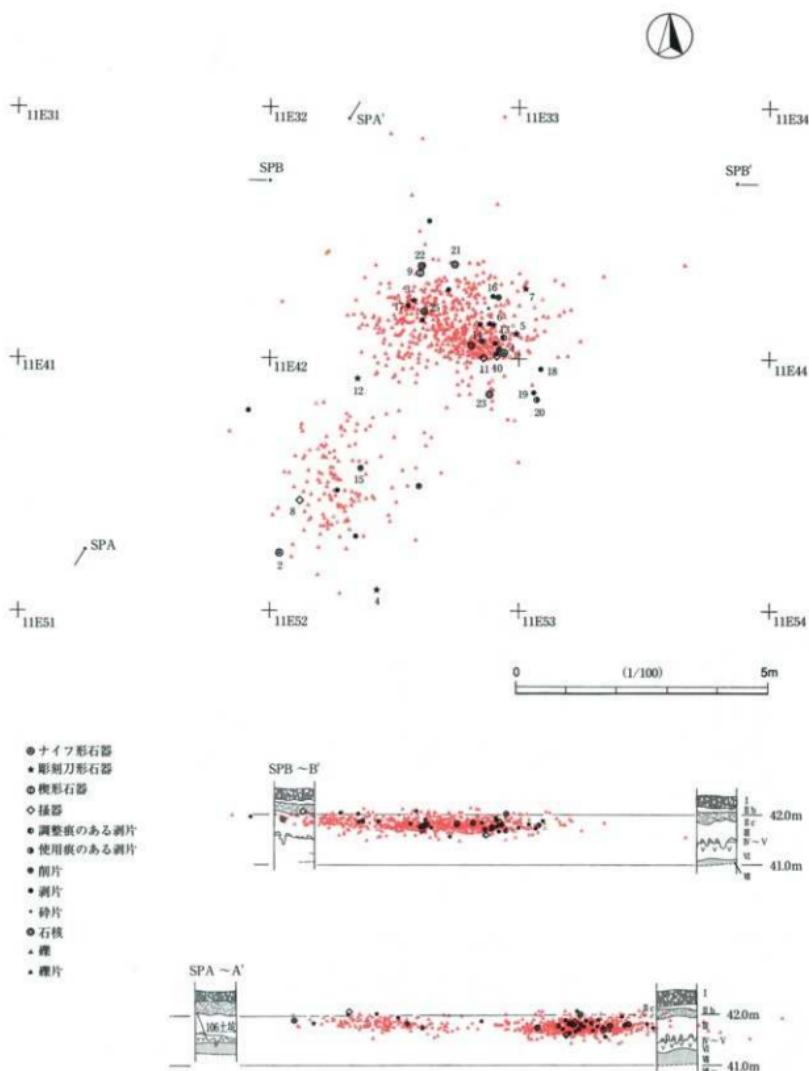
8はチョコレート色を呈した良質な頁岩(珪質頁岩A)を用いたもので、右側縁を中心に調整が施され



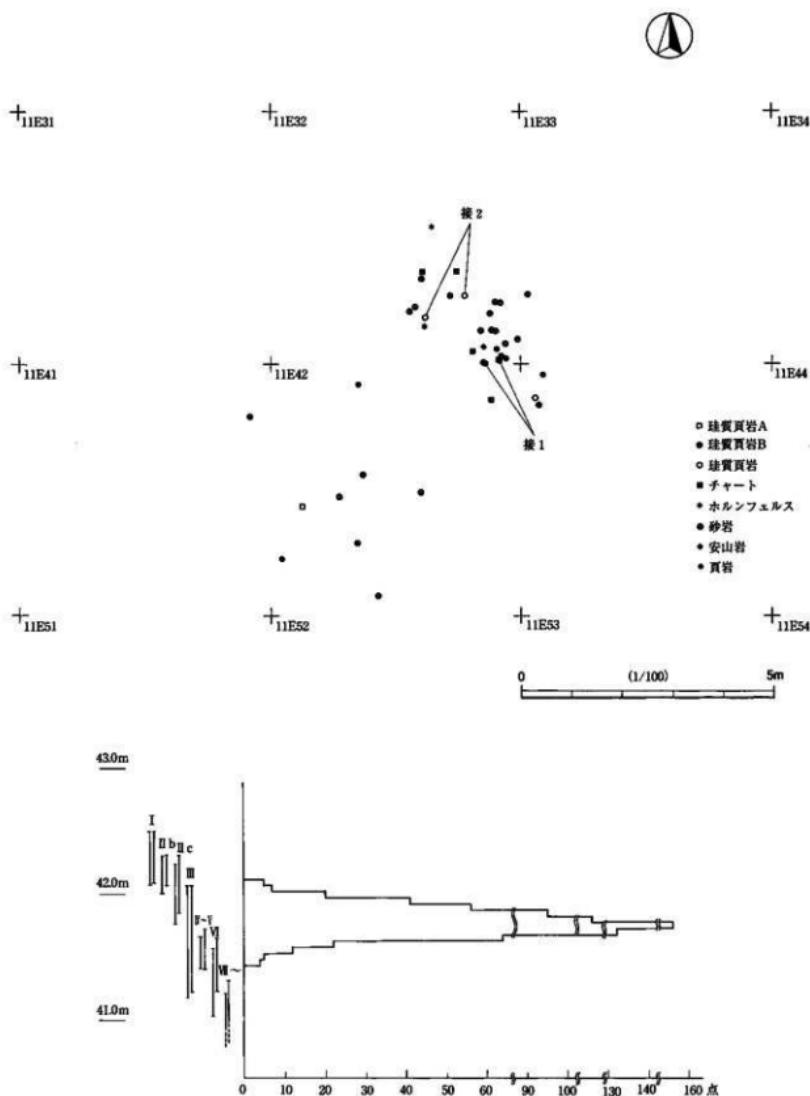
第8図 石器集中1 出土状況と出土石器



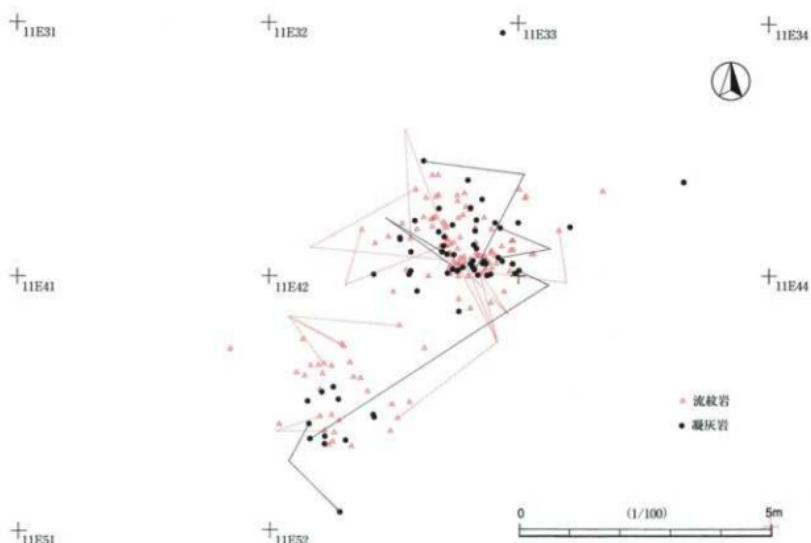
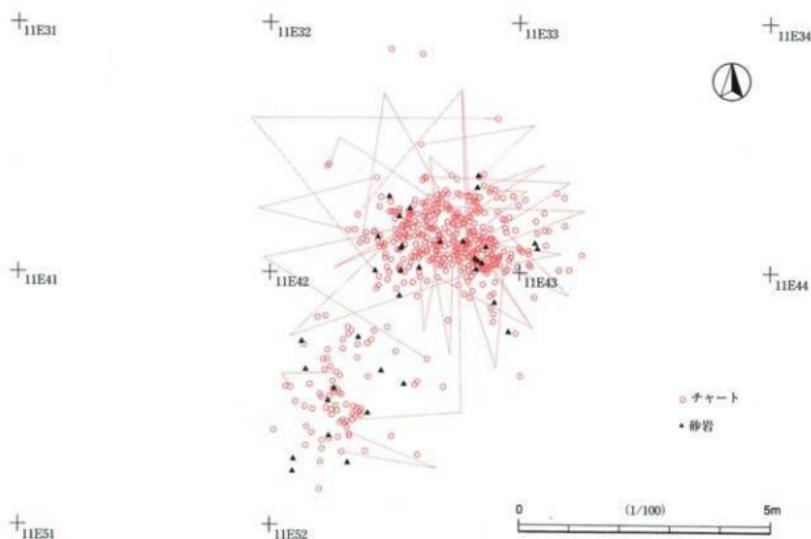
第9図 石器集中2 出土状況と出土石器



第10図 石器集中3 器種別出土状況



第11図 石器集中3 剥片石器 石材別出土状況



第12図 石器集中3 磚・磧片 石材別出土状況

ている。円形を呈した小型の搔器と考えられる。調整は浅い角度で、やや粗雑に施されている。9は下端に後をもつ楔形石器で、背腹両面に剥離痕が観察される。嶺岡産の珪質頁岩を用いている。接合資料1は右側面に、やや浅い調整によって丁寧に仕上げられた刃部をもつ搔器である。1・2と同一母岩が用いられている。下端には裏面への調整が施され、直線的な稜を形成している。この抉るような調整を打面として削片剥離がなされる可能性も考えられ、そうであれば彫刻刀形石器の未製品という位置づけも可能となる。12は断面三角形の剥片を用いて、先端右側縁に急角度調整を施した資料である。素材剥片の打面部から主要剥離面にかけて、微細な剥離痕が見られるが、彫刀面の形成を意図したものと考えられ、彫刻刀形石器の未製品と捉えることもできよう。とすれば、端部右側面の調整は左側面への彫刀面形成のための準備であったと考えることもでき、4のような棒状の彫刻刀形石器と類似するものと理解される。13は上半部が欠損しているため全体の形状はよく分からぬが、やや粗雑な調整が施された資料である。調整痕のある剥片とした。嶺岡産の珪質頁岩を用いている。

14・15は断面三角形の継長剥片で、その形態から4～7のような彫刻刀形石器から剥離された削片である可能性が高い。同様の特徴をもつ剥片は図示したもの以外に、少なくとも3点を確認した。またこれらは楔形石器の削片である可能性も指摘できる。

剥片類は少なく、遺跡内での剥片剥離が極端に消極的であったことが推測される。

石核は、小円錐を素材としたものがほとんどである。礫面を打面としたもの(22)、作業面と打面を交互に入れ替えて剥離が進行するもの(21)、扁平礫の端部を折断し、折断面から剥離を開始させるもの(接合資料2)などがある。なお、接合資料2は扁平礫を素材として、その木口面に剥離が集中するが、これを彫刀面とすれば彫刻刀形石器と位置づけることができる石器である。また、23は礫面が残っていない石核であるが、その形態は不整形なブロック状を呈している。

石材 剥片石器に用いられる主な石材は、珪質頁岩B21点、頁岩7点、珪質頁岩2点、ホルンフェルス2点で、他にチャート、安山岩A、珪質頁岩A、凝灰岩、砂岩など少數ながら多様な石材で構成される。

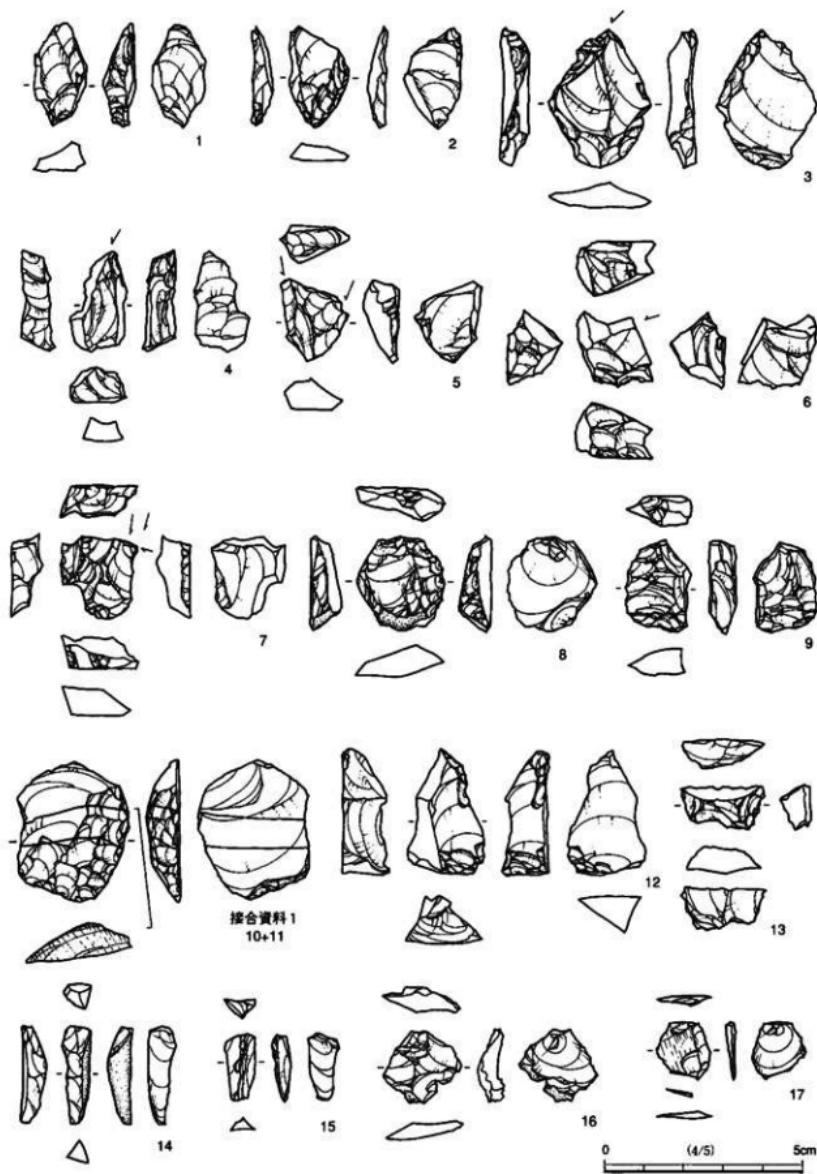
嶺岡産の珪質頁岩である珪質頁岩Bが40点中21点を占める。珪質頁岩Bはそれぞれよく似た特徴をもつため正確な母岩分類は困難であるが、風化剥離面がややガサガサする乾いた質感をもつものと緻密な感じで表面がなめらかなものに大きく分かれる。彫刻刀形石器・削片に主に用いられている。頁岩とした7点はすべて同一母岩と考えられ、白色に風化した風化剥離面に覆われ、ロームの影響であろうか表面は明るいクリーム色を呈している。同母岩にはナイフ形石器・搔器・彫刻刀形石器が含まれ、珪質頁岩B同様重要な器種に用いられている。

各石材とも遺跡内での剥片剥離は消極的で、彫刻刀形石器から削片を剥離するなど石器のメンテナンスに関する剥片剥離に限定されるようである。

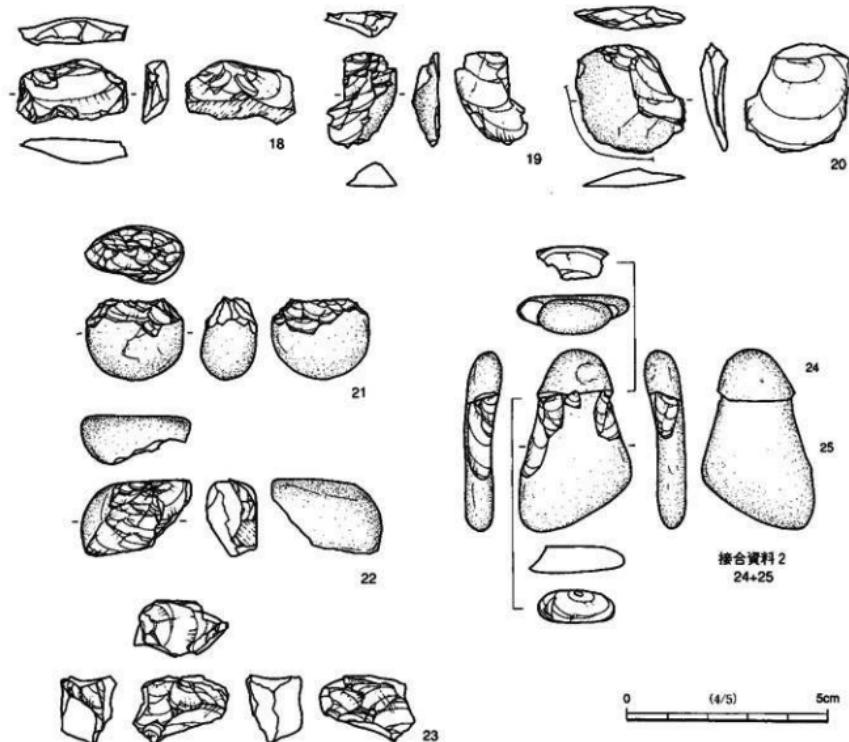
礫群 分布は北集中域と南集中域に分かれ、北集中域の方が点数的に後者を圧倒し、分布密度が高く、規模も大きい。両集中域とも礫群の中に剥片石器が混在するような分布状況である。構成礫種はチャート454点、流紋岩120点、凝灰岩64点、砂岩35点を主体として、泥岩・ホルンフェルスなどが伴う。

完形礫は長軸5.4mm～59.8mm、短軸5.0mm～30.9mm、重量0.4g～33.5gのもので、平均値は長軸31.5mm、短軸20.6mm、重量11.8gと、非常に小振りな礫が用いられている(第15図)。

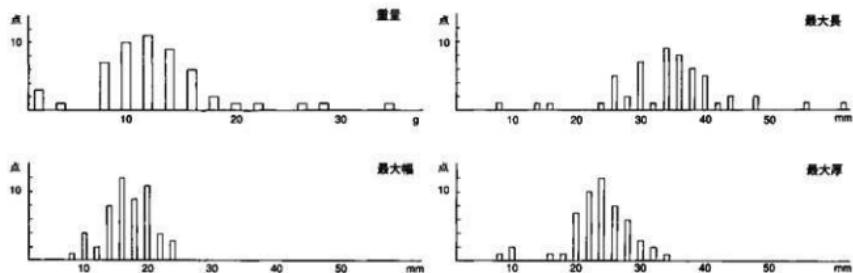
ほとんどの礫・礫片は被熱によって赤化しており、礫片は熱により破碎したものだろう。接合関係は43個体に認められるが、そのほとんどが南北各集中域内に収まり、集中域間をまたがるものは数例に過ぎない。



第13図 石器集中3 出土石器(1)



第14図 石器集中3 出土石器（2）



第15図 完形砾の大きさ

い(第12図)。

5 石器集中4・5(第16・17図、第2・4表、図版6・9)

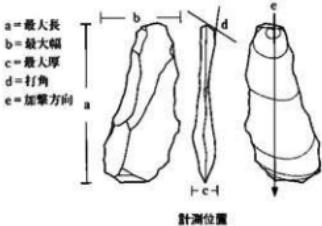
石器集中4は、9D98グリッドから石器2点が検出された。出土層位はIIc層下部となっているが、後世の擾乱により、実際の包含層より浮き上がった状況で検出されたと考えられる。

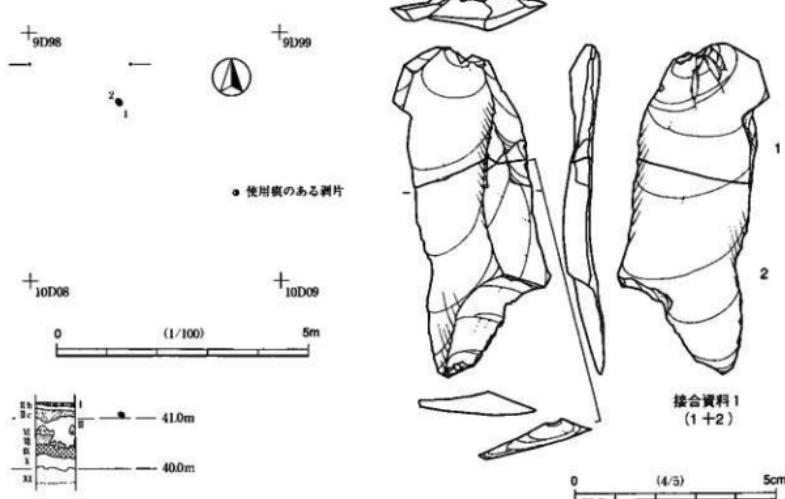
2点は接合により石刃1点に復元された。各一点ずつに遺物Noが付けられているが、折断面の風化度合いから、調査時に中央から折れた資料と推測される。石刃はやや幅広のもので、左側縁の一部は欠損している。打面は点状で、石刃の縁辺には断続的に微細な剥離痕が観察される。石材はチョコレート色を呈した良質な珪質頁岩が用いられている。

石器集中5は、10E44グリッドから石器4点が検出された。出土層位はIIc層下部となっている。使用痕のある剥片1点、剥片2点、碎片1点があり、黒曜石2点、ホルンフェルス1点、安山岩1点が用いられている。調査区周辺の土層断面図がないため詳細には述べられないが、旧石器時代の資料であれば後世の擾乱により実際の包含層より上位から検出されたものと解釈されるが、縄文時代の所産である可能性も捨てきれない。

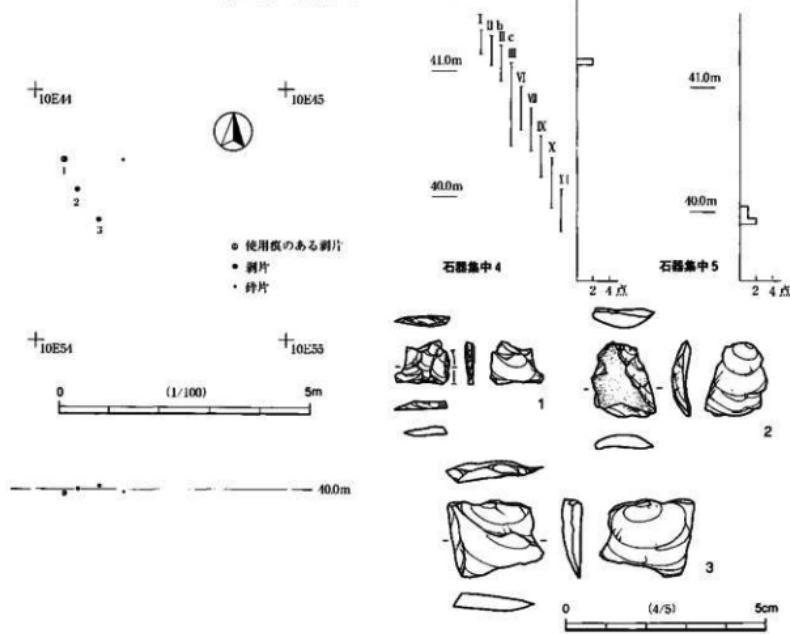
観察表について

- ・ 指定No. 実測図を掲載した遺物の通し番号。平面分布図に付した番号、写真図版の番号と一致する。実測図を掲載しなかったものについてはグリッド、遺物No順に続けて並べた。
- ・ 器種 碎片については、最大長・最大幅の両者が10mm以下のものとした。
- ・ 最大長・最大幅・最大厚・打角 計測方法については下図に示した。
- ・ 打面形状 Cは自然面、Pは点状打面、Lは線状打面。1は平坦打面、2以上は複数剥離面を示し、括弧内はそのうちネガティブバブルの残る剥離面の数を示している。空欄は欠損等による打面なし、計測不可を示す。
- ・ 打面調整・頭部調整 観察されるものについて「○」で示した。
- ・ 背面構成 主要剥離面の剥離方向を基準とし、背面を構成する剥離面の加筆方向と剥離面の数を記した。ただし、変形度の高いもの(楔形石器等)は記さなかった。碎片はわかる範囲で記した。H=頭部側、T=尾部側、R=背面を正面にして右側、L=左側、D=背面側、V=腹面側からの加筆方向を示す。自然面(C)、第理面(S)を有する資料については「○」で示した。
- ・ 折面部 主要剥離面の剥離方向を基準とした折れ面の部位。H=頭部側、T=尾部側、R=背面を正面にして右側、L=左側が折れていることを示す。
- ・ 末端 F=フェザーエンド、H=ヒンジフラクチャー、O=ウーラバッセを示す。
- ・ 石材 石材名とその母岩番号を記した。母岩の大別をアルファベットで、細別を数字で記した。細別は基本的に複数の石器が属する母岩のみを分類したものである。したがって、単独個体のものや細別困難なものについては石材名のみ、もしくは大別のみを行っている。石材の大別については本文中に記載した。
- ・ 層位 調査時の層名を記した。
- ・ X座標・Y座標 測量原点からの位置関係を示す公共座標を示す。ただし、この値は日本(JU)測地系によるものである。





第16図 石器集中4 出土状況と出土石器



第17図 石器集中5 出土状況と出土石器

第3表 旧石器觀察表 (1)

第4表 旧石器觀察表(2)

石名	地點	母岩	岩種	石H	結晶度	最大粒 徑(mm)	最大粒 徑(mm)	形狀 (粒)	打 擊	壓 縮	抗 壓 (kg)	C	S	H	T	R	L	D	V	實驗結果		測定 部位	測定 高度(m)	
長	寬																							
3	3	11E22 0031	砂岩	石H	中	192	270	259	2.07	113	3	3	L	F	圓錐上部						51713.207	41.722		
3	3	11E22 0065	砂岩	石H	中+	109	193	163	2.01												51714.045	41.820		
3	3	11E22 0069	砂岩	石H	中+	206	125	36	1.06	2	122	3	L	F	圓錐上部						51714.811	41.877		
3	3	11E22 0142	砂岩	石H	中	267	98	86	1.48				1	4	H	O	圓錐中部						51715.054	41.861
3	3	11E22 0230	砂岩	石H	中	111	62	37	0.13	L			2		F	圓錐中部						51714.988	41.772	
3	3	11E22 0259	砂岩	石H	中	97	119	18	0.11				2		H-T	R	圓錐中部						51714.933	41.783
3	3	11E22 0361	砂岩	石H	中	165	76	27	0.25												51714.909	41.759		
3	3	11E22 0368	砂岩	石H	中	170	138	94	1	128	1	1	L	F	圓錐下部						51714.942	41.818		
3	3	11E22 0318	砂岩	石H	中	89	56	18	0.07	○											51714.937	41.650		
3	3	11E22 0400	砂岩	石H	中	112	110	15	0.18	110	3	3	H	H	圓錐頂部						51714.900	41.671		
3	3	11E22 0459	砂岩	石H	中	67	10	0.04					2		H	F	圓錐頂部						51713.065	41.545
3	3	11E22 0564	砂岩	石H	中	87	137	23	0.40				2		H-T	L	圓錐中下部						51714.849	41.559
3	3	11E22 2666	砂岩	石H	中	110	94	21	0.39				○									51714.921	41.275	
3	3	11E23 0011	中	石H	中	110	94	21	0.39	115	○	4										51716.705	41.186	
3	3	11E41 0002	中	石H	中	110	224	11	275	L			4									51716.303	41.548	
3	3	11E42 0041	中	石H	中	175	174	68	1.61	111	○	2										51712.004	41.272	
3	3	11E42 0042	中	石H	中	135	121	91	0.98	1	111		C	○								51711.227	41.082	
3	3	11E42 0073	中	石H	中	387	306	59	0.58	P		4										51711.326	41.099	
3	3	11E42 0096	中	石H	中	541	322	65	0.30			2	T									51711.303	41.097	
4	4	1	00758 0002	中	石H	中	168	151	49	101	P	○	1		H-T						51706.479	39.990		
4	4	1	00298 0003	中	石H	中	192	72	49	269	1	111										51701.790	39.992	
5	5	1	10544 0004	中	石H	中	74	22	12	269	○		3									51700.277	39.994	
5	5	2	10544 0003	中	石H	中	192	22	12	269	1	111										51700.247	39.995	
5	5	3	10544 0002	中	石H	中	74	19	12	269	1	111										51701.265	39.995	

第3節 繩文時代

1 遺構

縩文時代の遺構は陥穴3基、土坑2基、縩文土器包含層1地点を検出した。土器包含層は10F区に広がることから「10F集中区」と呼称する。

67号陥穴（102）（第18図、図版7）

10D19・29グリッドに位置する。下層調査時にソフトローム面で検出した。平面形は細長い楕円形を呈する。長軸方向の北端壁が袋状にオーバーハングしており、その結果、上端の大きさは長軸3.00m×短軸1.05mで、底面で3.15m×0.17mの葉巻形の平面形態を呈する。横断面では底面が、2段に成形されているように観察される。深さは最大2.02mと非常に深い。長軸方向はN-2°-Wである。短軸方向の土層断面観察によると、底面直上に薄く有機質の黒色土が堆積し、間層を挟んでその上に約40cmの厚さで非常に硬く締まったロームブロックを主体とする層が存在する。おそらくこの層はその硬さから見て、人為的に固められたものであろう。更に上には有機質の黒色土が存在することから、この陥穴はその深さを徐々に浅くしながら、2時期以上機能していたことが考えられる。覆土中から遺物は検出されていない。

68号陥穴（103）（第18図、図版7）

9D57グリッドに位置する。平面形は非常に細長い楕円形を呈する。長軸方向の南端壁が袋状にオーバーハングしており、その結果、上端の大きさは長軸2.45m×短軸0.80mで、底面で2.92m×0.18mの葉巻形の平面形態を呈する。深さは最大1.74mである。長軸方向はN-4°-Wである。短軸方向の土層断面観察によると、底面から約30cmのところで締まりのない有機質の黒色土の堆積が見られる。更にその上の厚さ30cm弱のロームと黒色土が混ざった黄褐色土層は、移植ゴテが入らないくらい非常に締まりが強い。おそらくこの層は人為的に敷かれ、固められたものであろう。67号陥穴同様、2時期以上機能していた可能性がある。覆土中から遺物は検出されていない。

69号陥穴（104）（第18図、図版7）

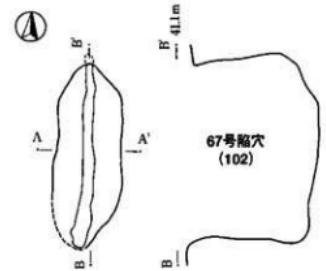
11E53グリッドに位置する。下層調査時にⅢ層上面から20cm～25cmの深さで検出した。確認面での平面形は非常に細長い楕円形を呈する。長軸方向の壁両端が袋状にオーバーハングしており、その結果、上端の大きさは長軸2.07m×短軸0.55mで、底面で2.28m×0.21mの葉巻形の平面形態を呈する。深さは最大0.98mである。長軸方向はN-12°-Eである。短軸方向の土層断面から見て、全体に自然堆積であろう。覆土中から遺物は検出されていない。

4号土坑（105）（第18図、図版7）

10F58グリッドに位置する。ソフトローム面で検出した。平面形は楕円形を呈する。大きさは長軸1.84m×短軸1.48mで、底面は平坦でなく立ち上がりも不明瞭で丸底を呈する。確認面からの深さは最大0.59mである。長軸方向はN-35°-Eである。土層断面観察によると、調査時点では2層に分層しているが、その境界は明瞭ではなく漸移的で、総じて自然堆積と捉えることができる。覆土中から遺物は検出されていない。

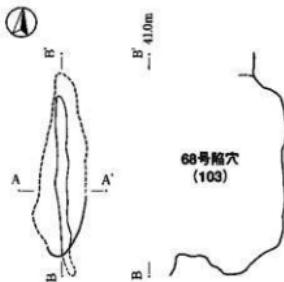
5号土坑（106）（第18図、図版7）

11E41グリッドに位置する。下層確認調査時にⅢ層上面で検出した。不整円形を呈する土坑である。一部が調査区域外にかかるが、上端の大きさは長軸2.00m×短軸推定1.85mで、底面はほぼ上端面と相似し



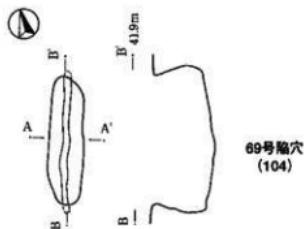
67号窟穴
(102)

1. 細褐色土。比較的締まりがあるが弱い。
2. 黒色土。1層に化成するが締まり弱い。
3. 黒褐色土。ロームを含む。締まりない。
4. 黄褐色土。2層に化成ロームブロック多く含む。
5. 黄褐色土。右側面の黄色土。締まりなく、細土含む。
6. 黄褐色土。ロームブロック含み。黒色かったシテあり。
7. ロームブロック。
8. 黄褐色土。右側面の茶色土。締まりなし。
9. ロームブロック。締まり弱く、粗い。
10. ソフトローム地盤部。やや締めかってて軟弱。
11. 細褐色土。左側面の茶色土。締まりなし。
12. ロームブロック。締まりあり。堅硬。
13. 黄褐色土。ロームブロックなし。
14. 黄褐色土。右側面の茶色土。締まりなくボソボソ。
15. 黑色土。ロームブロックを多く含む。
16. 黄褐色土。右側面の茶色土。



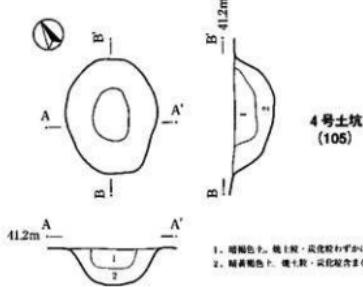
68号窟穴
(103)

1. 細褐色土。ローム小ブロック・ローム混含。締まりあり。
2. 黃褐色土。ローム小ブロック多量に含む。締まりあり。
3. 黃褐色土。ローム多量に含む。締まりあり。
4. 黃褐色土。ローム多量に含む。締まり弱い。
5. 黃褐色土。ロームブロック・ローム较少含む。
6. 黃褐色土。締まり非常に強く。
7. 黑色土。ロームをやや多く含む。締まり強い。
8. 黄褐色土。堅性泥岩に多い。



69号窟穴
(104)

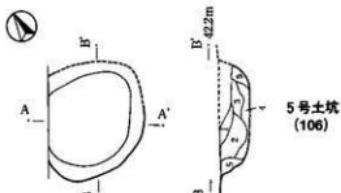
1. 黄褐色土。比較的締まりあり。
2. 黄褐色土。2層に化成した黒褐色土含む。
3. 黄褐色土。ソフトロームに似る。泥っぽいシテあり。
4. 黄褐色土。ローム小ブロック含む。締まり弱い。
5. 黑色土。ローム小ブロック含む。締まりなし。
6. 黄褐色土。粘性あり。締まりあり。



4号土坑
(105)

1. 黄褐色土。植生層・炭化物わずかに含む。
2. 黄褐色土。幾十枚・炭化物含まない。

0 (1/80) 4m



5号土坑
(106)

1. 黄褐色土。ローム微少含む。
2. 黄褐色土。ローム層や多く含む。締まりあり。
3. 黄褐色土。ソフトローム多量に含む。
4. 黄褐色土。ローム層や多く含む。
5. 黄褐色土。ローム層を多量に含む。

第18図 窟穴・土坑

た形態となり、長軸1.65m×短軸1.40mを測る不整円形である。確認面からの深さは0.49mで、底面は平坦、立ち上がりは比較的明瞭である。長軸方向はN-65°-Eである。土層断面の観察によるとローム粒やソフトロームを主体とした堆積層で、総じて自然堆積と考えられる。覆土中から遺物は検出されていない。

10F集中区（第19図、図版7）

遺物集中地点は、10F19・29グリッドを中心として南北約8m、東西約6mの範囲に縄文時代早期条痕文土器、前期浮島・興津式土器を主体とする土器が分布する。北側はすでに農道により削平されているため、本来の分布がどこまで広がるかは不明である。出土層位はII b～II c層を中心とし、掘り込み等の痕跡は確認できなかった。

本集中区からは、主に縄文土器3個体が集中して検出されている。個体1は早期条痕文系土器で茅山式に相当し、集中域の北東側に偏在する。個体2・3は前期浮島・興津式土器に相当し、集中域の南西側に偏在する。

2 出土遺物

（1）土 器

以下の遺物は、10F集中区から出土したものを中心とするが、同地点からのものに限らず調査区全体を対象としている。出土グリッドについては遺物Noとともに掲載した。

1) 第I群土器（第20図、図版11）

縄文時代早期のものを一括した。

1～5は撫糸文系土器である。

1は横位の細かく繊細な押圧縄文に統き、縦位の縄文が胴下半部に向かってみられる。2は口縁部が肥厚し外反する。口唇部には斜行縄文がみられ、口縁部は擦り消され、直下には繊細な横位の縄文が認められる。ともに井草式前半の土器である。3は間隔の疎らな縦位の縄文がみられ、稻荷台式の特徴を備えている。4・5はともに条間の密着した縄文が縱走している。

6～15は沈線文系土器である。

6・7・8は竹管の背面による太い沈線が斜め方向に走る田戸下層式の特徴を持つ。10は幅広の縦方向の削り痕のある無文の底部付近、11・12は縦方向に粗い削り痕のある尖った底部片である。いずれも田戸下層式と考えられる。9・13～15は田戸上層式土器である。9は細いへら状工具による押し引き沈線を隆帯に沿って平行して施し、沈線上に円形刺突文が施されている。13は貝殻腹縁による刺突文で区画を作り、区画内にはやはり貝殻腹縁による充填文がみられる。14は細い竹管による沈線区画と円形刺突文がみられる。15は細いへら状工具の先端部分による押し引き平行沈線が施されている。

16（個体1）は条痕文系土器である。

表裏両面に横位の貝殻による条痕文を有し、胎土には多量の纖維を含む。口縁は4単位の波状となり、これらの特徴から茅山式と考えられる。

2) 第II群土器（第21図、図版11）

1（個体3）は口縁から胴部上半に貝殻腹縁による爪形文が縦方向に連続施文されており、胴部下半は無文となる。いわゆる「変形爪形文」のようにジグザグに連続するものではなく、腹縁文が独立して平行多段に施文されている。胎土には多量の砂粒を含み、土器裏面の調整は輪積み痕を粗い撫でで均したもの

となっている。これらの特徴から浮島式と考えられる。

2 (個体2) は口縁部に半截竹管による刻文があり、竹管の半截面による部分と竹管の円周部による部分が半周づつを占めている。また、口縁部から胴部にかけては継位の条線文となっている。これらの特徴から浮島式または興津式と考えられる。

(2) 石 器 (第22・23図、図版12)

10F集中区から出土した石器は黒曜石碎片1点、礫・礫片2点、敲石1点がある。敲石1点を図示した(第22図1)。石英の河原石を用いたもので、端部と平坦面に明瞭な敲打痕が観察される。大きさは70.0×91.5×42.7mm、382.73gである。

遺物集中地点を形成しないグリッド一括資料のなかで、石鎚をはじめとする主な石器を第23図に図示した。礫・礫片を含めた石器類は全体的に少なく、図示したもの以外に数点の礫・礫片が伴うのみである。

2～4は石鎚である。2・3はチャート製で、浅い抉りがはいるものである。4は黒曜石製のもので片方の脚部が折れている。基部には深い抉りが見られ、器体は厚みがある。

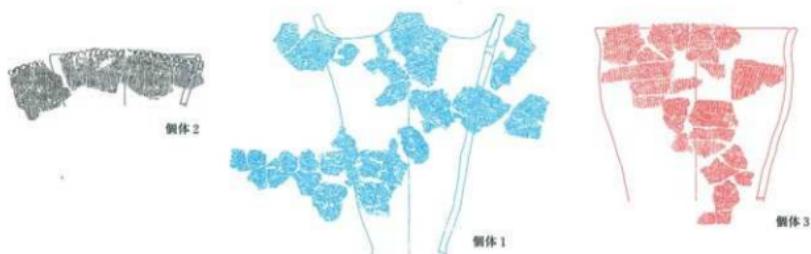
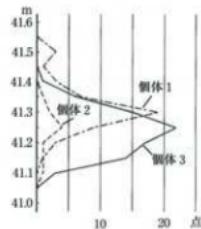
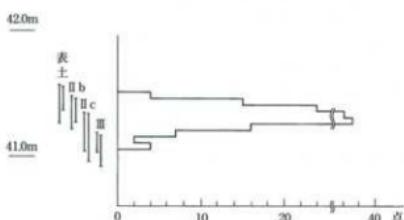
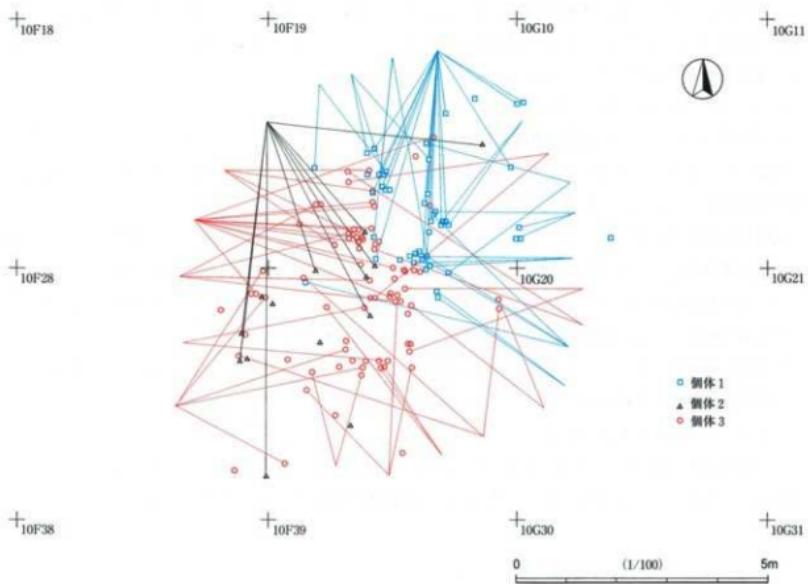
5は珪質頁岩製の剥片で、背面は自然面で覆われている。分厚い資料で、石材の特徴から旧石器時代のものである可能性も指摘される。

6はチャート製の楔形石器である。

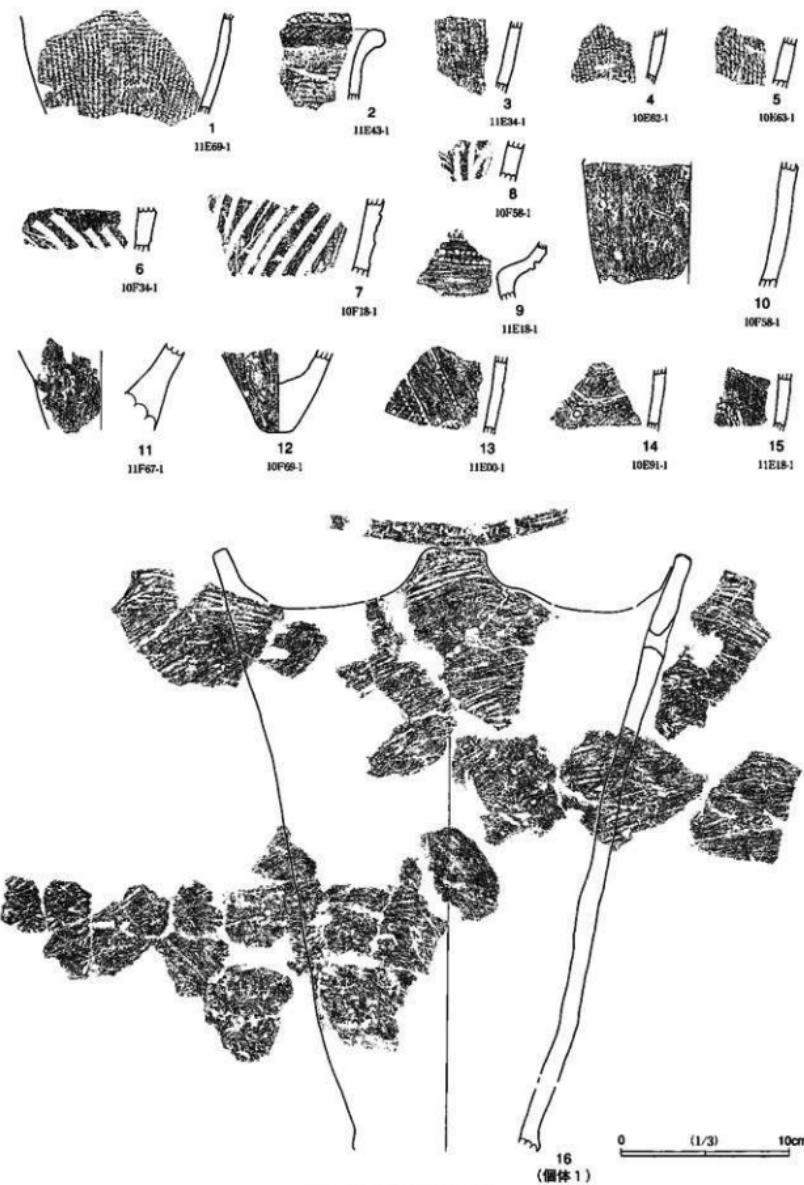
7は凝灰岩製の礫器で、半削された円盤の周縁から剥離が施されているが、剥離面の後は潰れており、使用により敲打された様子が窺える。周縁からの剥離痕も使用によるものであろうか。

第5表 繩文石器観察表

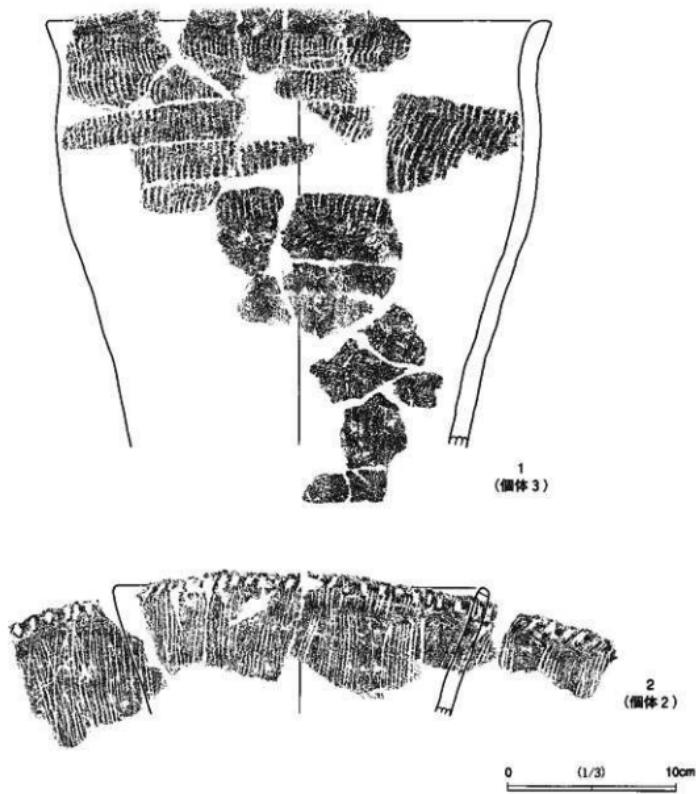
序号	グリッド	遺物No.	基種	石材	最大長 [mm]	最大幅 [mm]	最大厚 [mm]	重量 [g]	備考
1	10G20	2	磨石	石英	70.0	91.5	42.7	382.73	
2	11E42	36	石鎚	チャート	17.0	11.6	2.9	0.49	
3	11F01	1	石鎚	チャート	20.9	16.8	4.2	0.94	
4	11E32	1	石鎚	黒曜石	33.9	29.7	5.8	2.58	
5	09E43	1	剥片	珪質頁岩	47.5	43.5	16.6	42.25	
6	09E43	1	楔形石器	チャート	17.3	14.3	4.8	1.31	
7	11E43	1	礫器	凝灰岩	58.0	50.6	34.4	123.83	



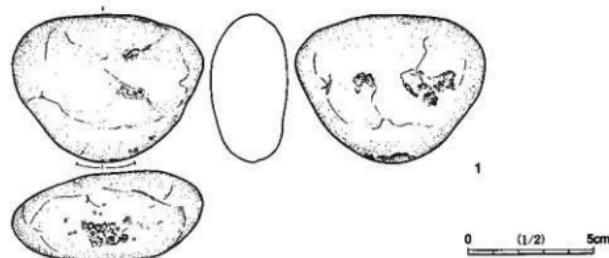
第19図 10F集中区 出土状況



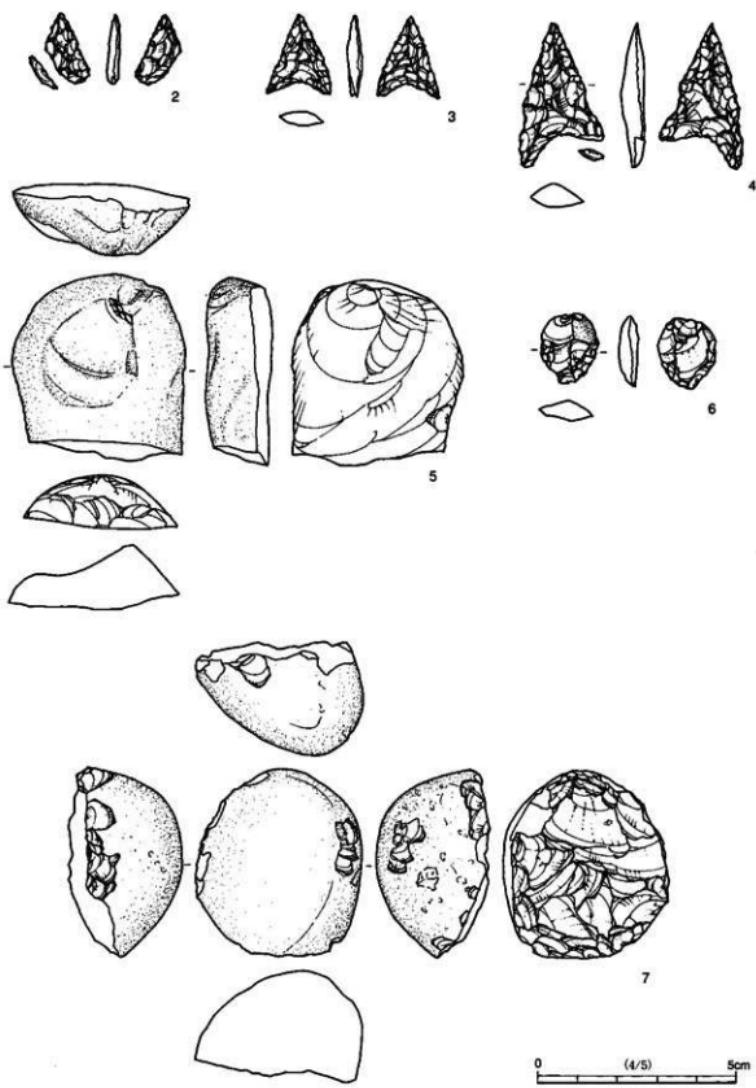
第20図 繩文土器（1）



第21図 繩文土器（2）



第22図 繩文石器（1）



第23図 縄文石器 (2)

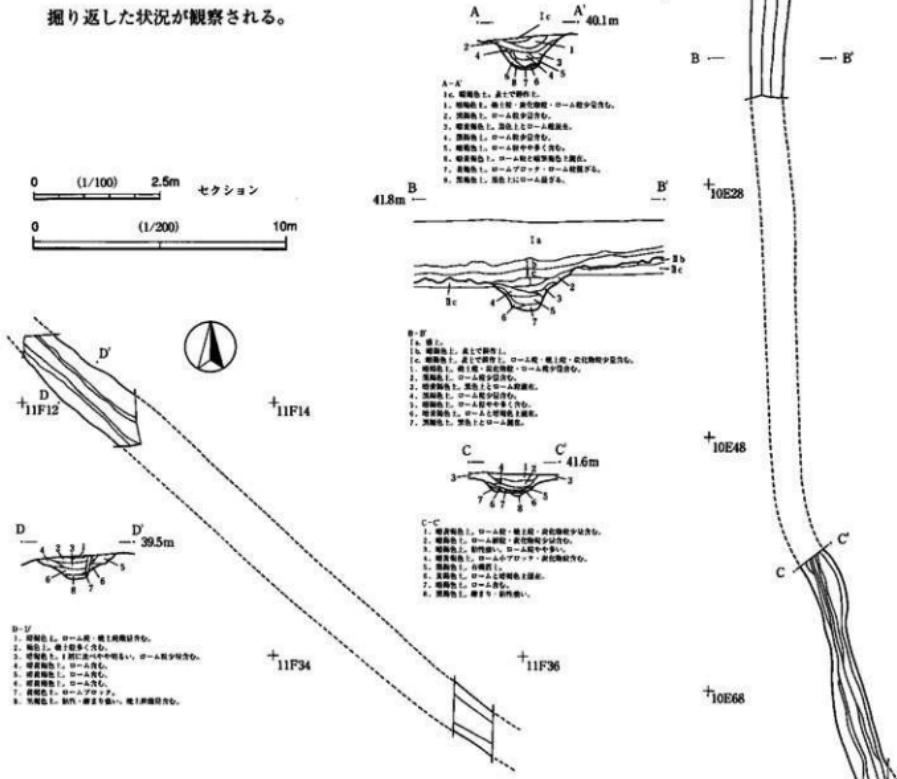
第4節 中・近世

中・近世の遺構は溝1条である。

8号溝（101）（第24図、図版8）

調査地区の中央を縦断するように、北から南方向に直線的に南下し、浅い谷津を過ぎたあたりで徐々に東方向に弧を描くように方向を変えていく。部分的に拡張した調査であり、全体は類推するしかないが、幅は1.26m～1.40mとどの地点でもほぼ一定である。一方で、残存状況のみから見た掘り込みの深さは、南に行くほど浅くなる傾向にあるようである。断面形態にもその違いが現れ、北端のA-A'では深さが0.62mで非常に整った逆台形であるが、南端近くのD-D'では深さ0.43mで、2段の掘り込みをもつ浅い逆台形状の形態となる。覆土堆積状況から判断すると、一旦埋められた（埋まつた）溝を、浅くかつやや幅広く

掘り返した状況が観察される。



第24図 8号溝

第3章 十余三稻荷峰西遺跡（空港No68遺跡）

第1節 調査の概要

1 調査の方法と成果（第24・25図）

発掘調査を始めるにあたり、調査対象区域に公共座標にあわせて、50m×50mの大グリッドを設定し、その大グリッド内をさらに5m×5mに分割し、100個の小グリッドを設定した。大グリッドの基点は昭和56年度の第1次調査で設定・使用したものを踏襲し、0 Aの北西隅をX = -22.350, Y = 49.500とし、北から南へ0, 1, 2, , 西から東へA, B, C, と記号をつけた。さらに小グリッドは北から南へ00, 10, 90, 西から東へ00, 01, 09と記号を振り、大グリッドと組み合わせて呼称することとした。今回の調査地点は0Z～0D, 1Z～1D, 2A～2C, 3A・3B, 4B区にあたる（第25図）。

道路によって分断された平行滑走路用地内に相当する東側の地点は、厚く碎石が敷かれ、緊急時の駐車スペースとして整地・填圧されていた。この整地の際に、旧表土から漸移的にⅢ層まで削平を受けたようである。特に南側に行くほどこの傾向が顕著で、縄文時代の包含層があったかすら確認できない。また、これとは別に中央部は大きく削平され、立川ロームが全く残っていない状況であった。

調査対象面積22,700m²に対して、上層確認調査では幅2m、長さ2m～60mのトレンチを遺構の残存状況を想定しながら、全面積の8%を基準に調査区内に設定した（第26図）。下層確認調査では幅2m、長さ2m～5mのグリッドを全面積の8%を基準に調査区内に設定した（第25図）。確認調査面積は上・下層ともそれぞれ1,816m²である。上層確認調査では、縄文時代早期土器包含層2か所、縄文時代陥穴2基、同炉穴1基、近世溝状遺構2条、土坑1基を検出した。その結果、全体として3,300m²の本調査を実施し、縄文時代早期土器包含層2地点、陥穴8基、炉穴3基、近世溝状遺構2条、土坑1基を調査するに至った。一方、下層確認調査の深度は武藏野ローム上面で、立川ロームに含まれる石器群・遺構の有無について調査を行った。その結果、450m²の本調査を実施し、立川ロームⅦ層～Ⅸb層にかけて1か所のブロックを検出した。これは、第1次調査で検出した石器集中1の北側に連続する部分にあたる。

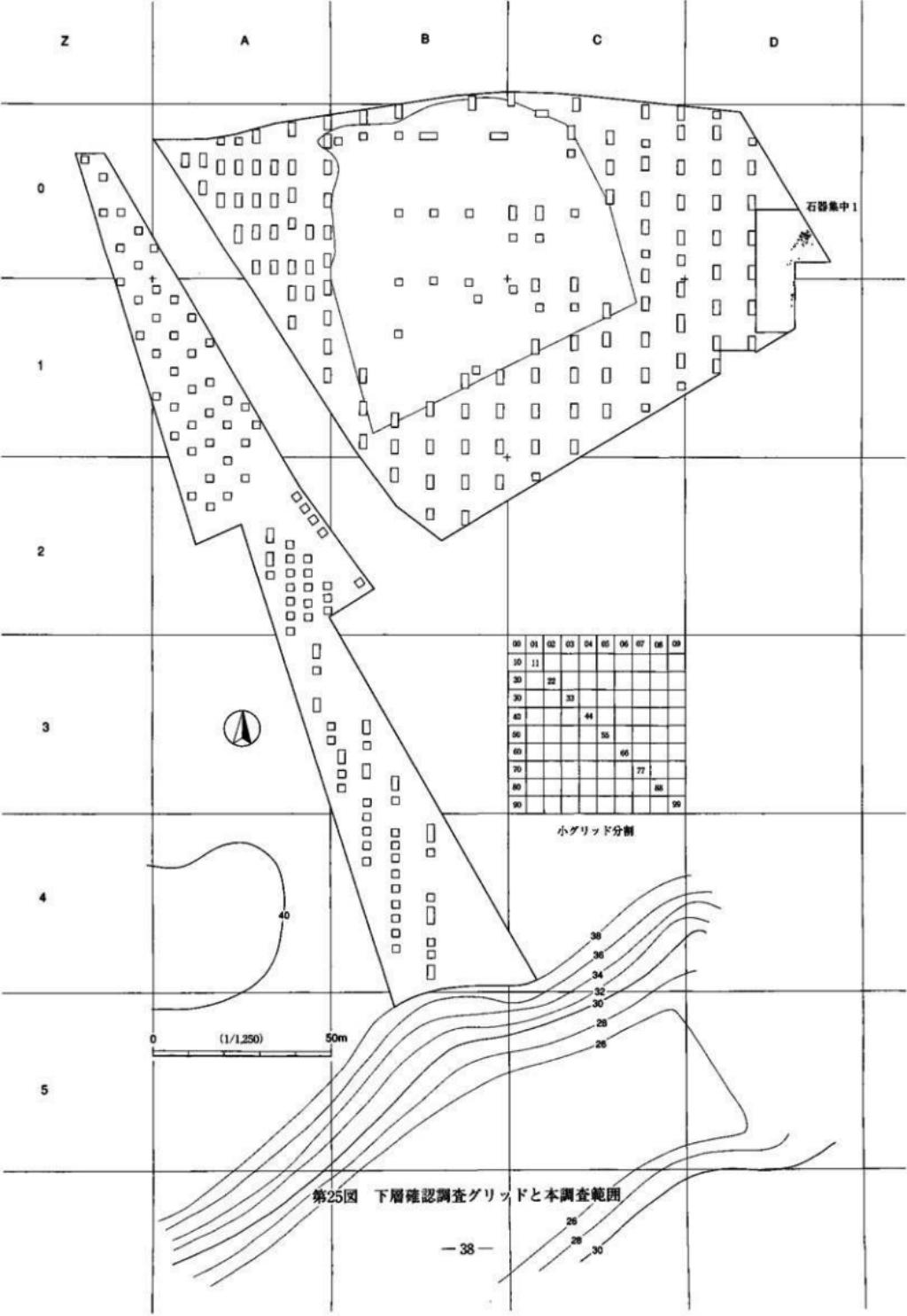
以上概説したように、今回検出した遺構には第1次調査で検出した遺構の一部もしくは連続するものも含まれる、そのため遺構番号は、第1次調査で付した遺構番号と連続するように調査時の番号を振り替えた。すなわち以下のようになる。（調査時遺構番号：整理番号）

001：21号陥穴, 002：4号溝, 003：2号溝, 004：11号炉穴, 005：22号陥穴, 006：23号陥穴,
007：24号陥穴, 008：25号陥穴, 009：26号陥穴, 010：27号陥穴, 011：12号炉穴, 012：28号陥穴,
013：13号炉穴, 014：13号土坑

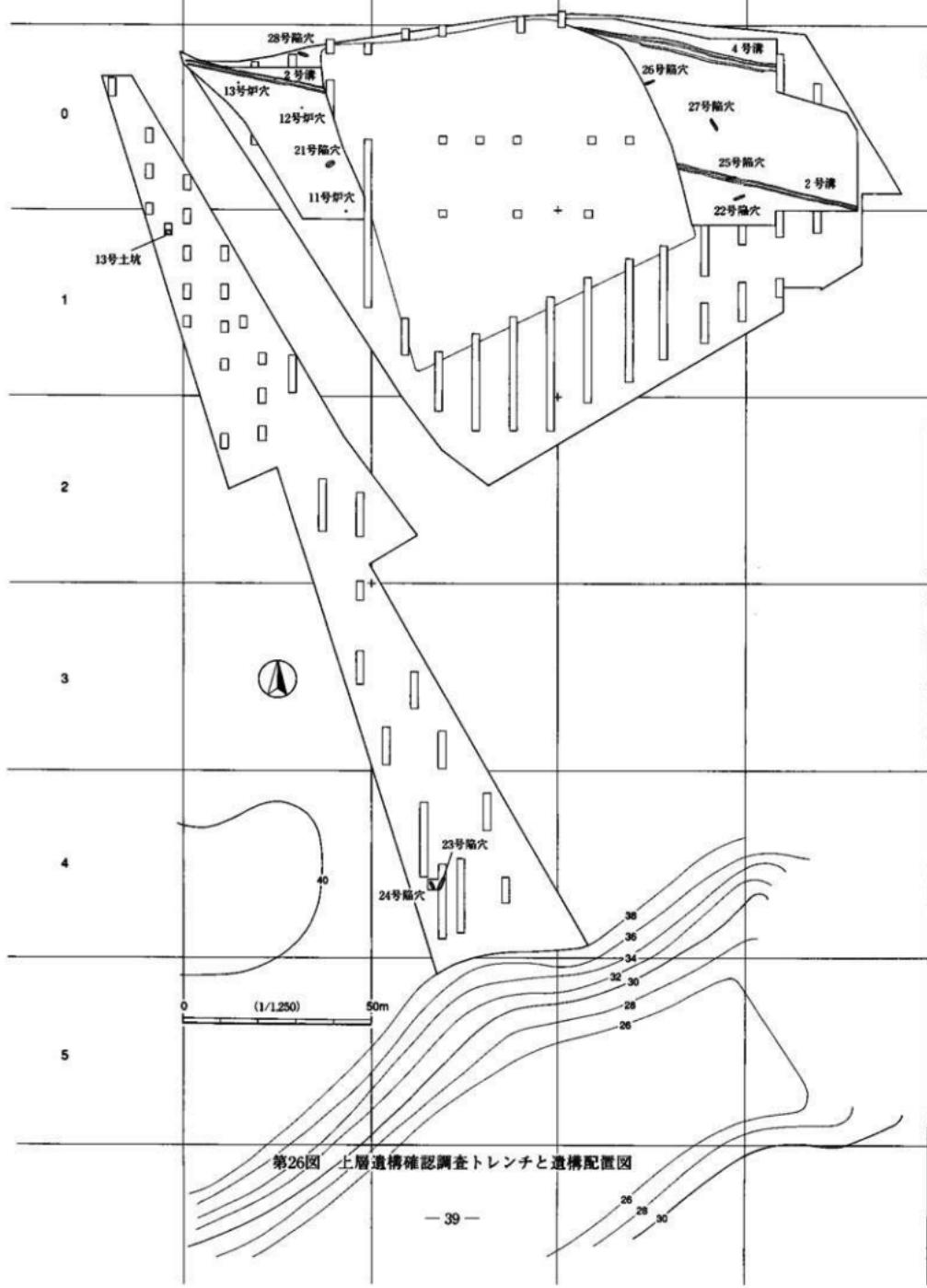
2 基本層序（第27図）

第27図に1B97グリッドの土層断面を本遺跡の基本層序として示した。

1B97グリッド以外に立川ローム層の土層断面図がいくつか記録されているが、それらと比較してみよう。Ⅵ層以下第2黒色帯の層厚について、石器集中1の調査区にあたる1D34グリッドの土層断面図（未



Z A B C D



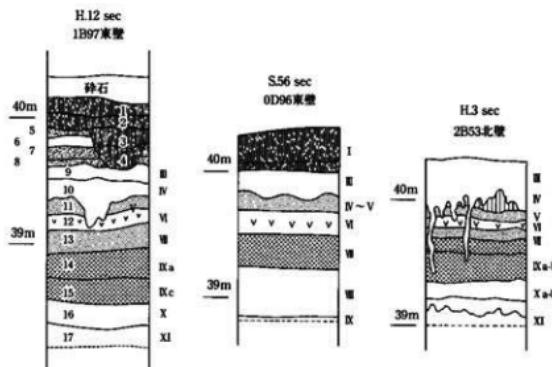
掲載)と比較すると、台地の中央部に位置する1B97グリッドとの違いはほとんど見られない。これに対して、平成3年度の工事用道路建設に伴う調査で記録された2B53グリッドと、昭和56年度の空港本体建設に伴う調査で記録された0D96グリッドを同図に掲載した。細分の方法・層名については両者に相違が見られるものの、VI層～第2黒色帯までの層厚についてはほぼ同様であるため、層名を調整することによって対比できると理解された。ところが、これらと今回の平成12年度に記録された1D34・1B97グリッドの同一台地上で近接する地域の土層断面とは明らかに異なる。VI層～第2黒色帯の下面までの層厚を比較すると、0D96・2B53グリッドが約50～55cmであるのに対し、1D34・1B97が70～75cmもの厚みをもって認識され、厚みにして約20～30cmの違いが見られる。

つまり、S56.Secの第2黒色帯(「Ⅷ層」と立川ローム層最下層(「Ⅸ層」)の境界が、H12.Secの第2黒色帯下半部中位(「Ⅸb層」)あたりに対応してしまっているのである。

この原因の一つとしては、AT包含層であるVI層を厚くとらえてしまいⅨ層の一部を含んでしまっていることと、第2黒色帯の捉え方に問題があると思われる。第2黒色帯は色調を基準として、黒味帯びたロームを認識するわけであるが、当時の土層断面の写真を見ると、石器群の検出が終了した後、乾燥しきった土層断面に対してロームの細分を行っているようである。そのために断面の色がかなり変化してしまっているため、現在のように、乾燥する前の土層断面で細分を行うことが多い最近のものとは大きく異なってしまうことがあるのかもしれない。

以下に、1B97グリッド東壁土層断面立川ローム層を中心とした土層説明を記載し、第6表には「土壤調査ハンドブック」に基づいた観察表を掲載した。

9・10層はいわゆる「ソフトローム」に相当し、上半部をⅢ層、下半部をⅣ層とする。11層以下がいわゆる「ハードローム」となり、11層が第1黒色帯(Ⅴ層)、13・14・15層が第2黒色帯(Ⅶ・Ⅸa・Ⅸc層)に相当する。第2黒色帯の間層(Ⅸb層)は認識できなかった。12層はATの集中部で最も明るい色調を呈しているが、ATが上下に拡散しているため、色調による分層はやや恣意的にならざるを得ない。16層は立川ローム最下層(Ⅹ層)で、赤色スコリア・青色スコリアがほとんど見られなくなる。17層は武藏野ローム最上層である。



第27図 基本層序

第6表 土壤学的觀察 [1 B97東壁]

No.	対応する層名	土色名	色相 明度／彩度	土性	土壤構造の形状	可塑性	ち密度	堅さ	腐しづく	孔隙の大きさ
1	砂石を載せる前に敷かれた 堆積土									
2	畑の耕作土								+++	
3	トレンチャードによる耕作痕(①)	黒褐色土	7.5YR2/2	SIL	粒状	弱	Hard	SH	+++	
4	トレンチャードによる耕作痕(②)	褐色土	7.5YR4/3	CL	粒状～亜角塊状	弱	Hard	SH	+++	
5	Ⅱ a	黒色土	7.5YR2/1	SiCL	粒状～亜角塊状	弱	Hard	SH	+++	
6	Ⅱ b	黒褐色土	7.5YR3/2	L-CL	粒状～亜角塊状	弱	Hard	SH	+++	
7	Ⅱ c	黒褐色土	7.5YR3/2	SiCL	粒状～亜角塊状	中	Hard	SH	+++	
8	Ⅱ c	暗褐色土	7.5YR3/4	CL	粒状～亜角塊状	中	Hard	SH	++	
9	Ⅲ	褐色土	7.5YR4/3	LIC	亜角塊状	中	Hard	SH	+	
10	IV	褐色土	7.5YR4/4	LIC	亜角塊状	中	Hard	SH	± (0.1mm)	
11	V	褐色土	7.5YR4/3	LIC	角塊状	中	EH	H	± (0.1mm)	
12	VI	褐色土	7.5YR4/4	LIC	角塊状	中	EH	H	± (0.5mm)	
13	VII	褐色土	7.5YR4/3	LIC	角塊状	中	EH	H	± (0.5mm)	
14	Ⅷ a	暗褐色土	7.5YR3/4	LIC	角塊状	中	EH	SH	± (0.1mm)	
15	Ⅷ c	暗褐色土	7.5YR3/4	LIC	角塊状	中	EH	SH	± (0.1mm)	
16	X	暗褐色土	7.5YR3/4	LIC	角塊状	中	VH	SH		
17	X I	褐色土	7.5YR4/3	CL	亜角塊状	中	H	SH		

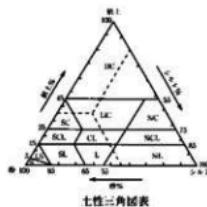
素土色の表示はマンセル表色系に準じた新版標準土色帖を用いて行った。

その他の、判定基準については、「土壤調査ハンドブック」改訂版（日本ペトロジー学会、博文社、1997）に基づく。以下に、判定基準を示す。

可塑性 土壌に十分な湿りを与え、親指と人指し指の間でこねて粒团を壊し、こねている間に水分が蒸発して土が指に付着しなくなったときに終状にこねれば、その状態により区分する。

ち密度 土壌断面を標高で埋したときのへこみ深度により区分する。

能動性障害の臨床及び鑑別特性は、能動性障害における大脳を想定した手と指との関連性は右手で強い。その時の機械見習いによる区分である。



野外土性判定の日記

角定義	意味
ほんじ得難き事で、相手が気を全く取れない。	難(EN)
身の内が見え、相手に取り外されがちでしかない。	見透(TRAN)
ふる御前から来たで、相手が気がある、静と静止が同じくらいに感じられる。	感(EL)
静はあるが、やや寂しい、やや空虚な小春物語のような感覚である。	シルト感覚(SIL)
わざわざおもむりでいる事、かうなりおばな	難解(NUD)
ほんじ得難き事でないで、よくねむる。	難解(NUD)

四三

H·V	AHD	解説
Very Low	S	難易度をさうない。
Low	S	はるかでて難易度がさうないときをさす。 つまり、難易度が一握りや半握りである。
Medium	M	はるかでて必ずしも難易度がさうない。
High	H	はるかでて必ずしも難易度がさうない。
Very high	VH	はるかでて必ずしも難易度がさうない。
Extremely high	EH	はるかでて必ずしも難易度がさうない。
Very difficult	VD	はるかでて必ずしも難易度がさうない。
Extremely difficult	ED	はるかでて必ずしも難易度がさうない。
Very hard	VH	はるかでて必ずしも難易度がさうない。
Extremely hard	EH	はるかでて必ずしも難易度がさうない。

Self Survey Staff 1951

土壤構造の形態

可塑性

区分	出目	基準
なし	NP	全く標準に達しない。
No plastic		
保	SP	やうじに標準に達しないが、すでに発達してしまった。
Mildly plastic		
中	P	直徑2 mm程度の標準に達しない。これ以下のときにあらわす。
Plastic		
富	PF	直徑1 mm程度の標準に達しない。これ以下のときにあらわす。
Very plastic	VP	直径1 mm以下の標準に達しない。これ以下のときにあらわす。
過度	EP	直径1 mm以下の標準に達しない。これ以下のときにあらわす。

七

困 分	英語	解 釋
やせこじょう	VL	ほんと筋肉が弱く筋力が弱い人。
Voice Name		
しらう	L	筋肉が弱いのにやさしくげる人。
Lower		
かず	S	は〜りと重い筋肉があとが弱い筋肉にあたる。
Sold		
や	M	筋肉が弱い筋肉があとが強めを残らへん。
Hard		
こぶる等	VM	筋肉が弱くて筋肉のあとが弱らへい。
Very hard		
困難	EH	筋肉コロによってへっと筋肉を折れる。

— 1 —

第2節 旧石器時代

旧石器時代の石器集中地点は調査区東端の0D・1D区から1か所検出され、遺物分布は南北に帯状に広がっている。昭和56年度（第1次調査）に実施された旧石器調査の際に検出された石器集中1に連続するものである（第63・64図）。その分布状況から、石器集中1は環状ブロックの一部と報告されたが、その環状ブロックの北西側の資料が追加されたということになる。2次にわたる調査によって全体の約3分の2が検出されたが、残り3分の1は隣接する工事用道路によってすでに削平され、消滅していると考えられる。

ここでは、平成12年度の調査で検出された資料を中心に報告し、第4章で昭和56年度調査時の資料と合わせて考察する。

1 石器集中1（第28～36図、第7表～11表、図版14・20～22）

分布 0D76グリッドを中心として、南側へ帯状に約22mの範囲に広がる。昭和56年度調査時の遺物分布と重ねると、集中域eの西側の残りの部分が僅かに検出され、その北側に径6mの集中域「f」が分布していることが確認された。各集中域の分布はきれいな環状を呈するが、南～東部部分は削平により消滅してしまっている。環状ブロックの大きさは径約25mクラスで、小～中型の部類に入る。

遺物の垂直分布を見ると南～北側へ緩やかに傾斜していることが分かるが、遺物分布の西側はその傾斜がさらに急であったことが土層セクションから判明する。よって、なるべく誤差の少ない集中域eの垂直分布と土層セクションを比較すると、出土層位の中心はIX層上部（IXa層）～IX層中部（IXb層）と考えることができる。

器種 台形様石器4点、彫刻刀形石器1点、削器1点、調整痕のある剥片1点、使用痕のある剥片7点、石核4点、剥片・碎片36点、礫片1点を含む、合計55点が出土した。

1～4は台形様石器である。1は扇形を呈したもので、主要剥離面側に背面から急角度調整を施して基部を整形している。2は基部を絞り込むように調整が加えられたもので、いわゆるベン先形を呈している。1・2とも珪質頁岩B製である。3は黒曜石製で、小型剥片の周縁を折断し微細な調整を加えることで基部と両側縁を整形している。4は黄土色を呈した珪質頁岩を用いたもので、小型剥片を用いて、縦位に折断することで右側面を形成している。

5は小型の彫刻刀形石器である。節理面に沿った剥片剥離によって得られた剥片を素材として、先端部右側面に急角度調整を施して打面とし、裏面側に彫刃面が形成される。

6～9は剥片縁辺に微細剥離痕あるいは調整痕が観察される資料である。6は剥片の上端と右側縁を折断された資料で、縁辺や折断面の稜線上に微細な剥離痕が見られる。

10・11は石核である。10はブロック状を呈し、打面調整が施されずに、打面転位を頻繁に行っている。11は剥片素材の石核で主要剥離面側に作業面がある。

剥片は幅広のもの、矩形のものが主体を占め、打面は調整の施されない平坦打面で占められる。珪質頁岩B（12）、珪質頁岩（13）、メノウ（14・15）、安山岩A（18）、安山岩B（16）、チャート（17）、凝灰岩（19・20）の一部を図示したが、青色帶びた凝灰岩は石斧の調整剥片である可能性が高い。

接合資料 接合資料1は集中域e内に収束し、第1次調査時のものと接合した。メノウの剥片同士の接

合資料で、21・22ともに背面には自然面をもつ。打面調整はなく、打面は平坦剥離面である。

接合資料2は集中域e内に収束し、第1次調査時のものと接合した。珪質頁岩4に分類されたが、珪質な凝灰岩とした方がよいかもしれない。ナイフ形石器(23)と削器の接合資料である。ナイフ形石器は第1次調査出土のもので、既報告の資料である。24は剥片の上部を背面側に調整が施された資料で、削器とした。

接合資料3は集中域eと集中域fの接合資料で、25+26は第1次調査で出土したものである。27の縁片の一部には調整痕が観察される。珪質頁岩B4である。

接合資料4は集中域f内に収束する。背面に自然面を残す剥片同士の接合資料である。29を剥離後、打面転位して、石核の打面部が剥離された後、再び同方向に打撃を加え、28が剥離されている。珪質頁岩B11である。

接合資料5は集中域f内に収束する。小型石核に剥片が2点接合している。石核は短軸方向に打面と作業面を入れ替えながら剥離を進行させている。安山岩A3である。

接合資料6は剥片5点の接合資料である。90°打面転位して、作業面と打面を入れ替えている。安山岩A1である。

接合資料7は集中域f内に収束する。剥片4点の接合資料である。自然面の同一打面から38・39・41が剥離され、打面転位して打面側の剥離が行われた後、再び同一方向から剥離面を打面として40が剥離された。安山岩B1である。

接合資料8は集中域f内に収束する。剥片を素材として表裏に打面を入れ替えながら小型剥片を剥離している。安山岩A2である。

石 材 硅質頁岩B17点(97.85g)、安山岩A17点(67.27g)、安山岩B7点(20.78g)、硅質頁岩3点(53.26g)、メノウ3点(25.23g)を主体として、黒曜石・チャート・凝灰岩が伴う。

硅質頁岩Bは青灰色を呈する、嶺岡産のものに特徴的なものである。台形様石器を含み、小型の剥片が比較的まとまって出土している。分布は一か所に集中すると言うよりは環状を呈する各集中域に薄く分布する傾向が指摘できる。一方、安山岩A・安山岩Bの方は集中域fにまとまり各接合資料も集中域内で収束する状況である。

第7表 石器集中1 石器組成表

	削器	磨器	台形様石器	使用面のある剥片	調整面のある剥片	剥片	碎片	石核	縁片	合計	組成比
硅質頁岩B				3 7.76	6 24.19	1 32.46	5 22.78		2 10.66	17 97.85	36.91 34.72
珪質頁岩	1 33.21					1 8.11	1 11.54			2 15	3.45 3.45
安山岩A							1 43.92		2 23.3	19 67.22	13.90 23.87
安山岩B						6 20.63	1 0.15			7 32.78	12.73 7.37
黒曜石				1 0.87			2 0.38			3 1.26	5.45 0.44
チャート		1 2.61					1 3.97		1 3.22	3 9.8	5.45 3.48
メノウ							3 25.23			3 25.23	3.45 5.95
凝灰岩							2 5.37			2 5.37	2.26 5.64
合計(重量)	3 33.21	1 2.61	4 8.63	6 24.19	2 40.57	35 135.27	1 0.15	4 33.96	1 3.22	55 281.81	100.00 100.00
組成比(重量)	1.82	1.82	2.27	10.91	3.64	63.64	1.82	7.27	1.82	100.00	
組成比(重量)	11.78	0.93	3.06	8.58	14.40	48.00	0.05	12.05	1.14	100.00	

+ 00D75

+ 00D76

集中域 f

+ 00D77



+ 00D85

+ 00D86

集中域 g

+ 00D87

+ 01D95

+ 01D96

集中域 h

+ 01D97

+ 01D05

+ 01D06

集中域 i

+ 01D07

+ 01D15

+ 01D16

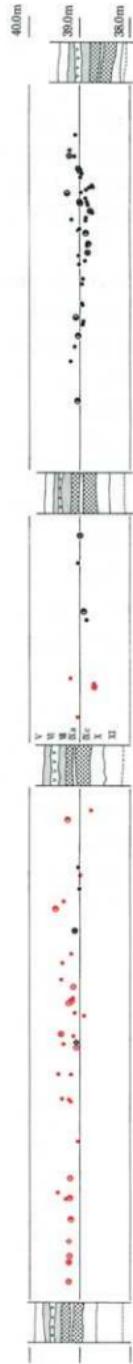
集中域 j

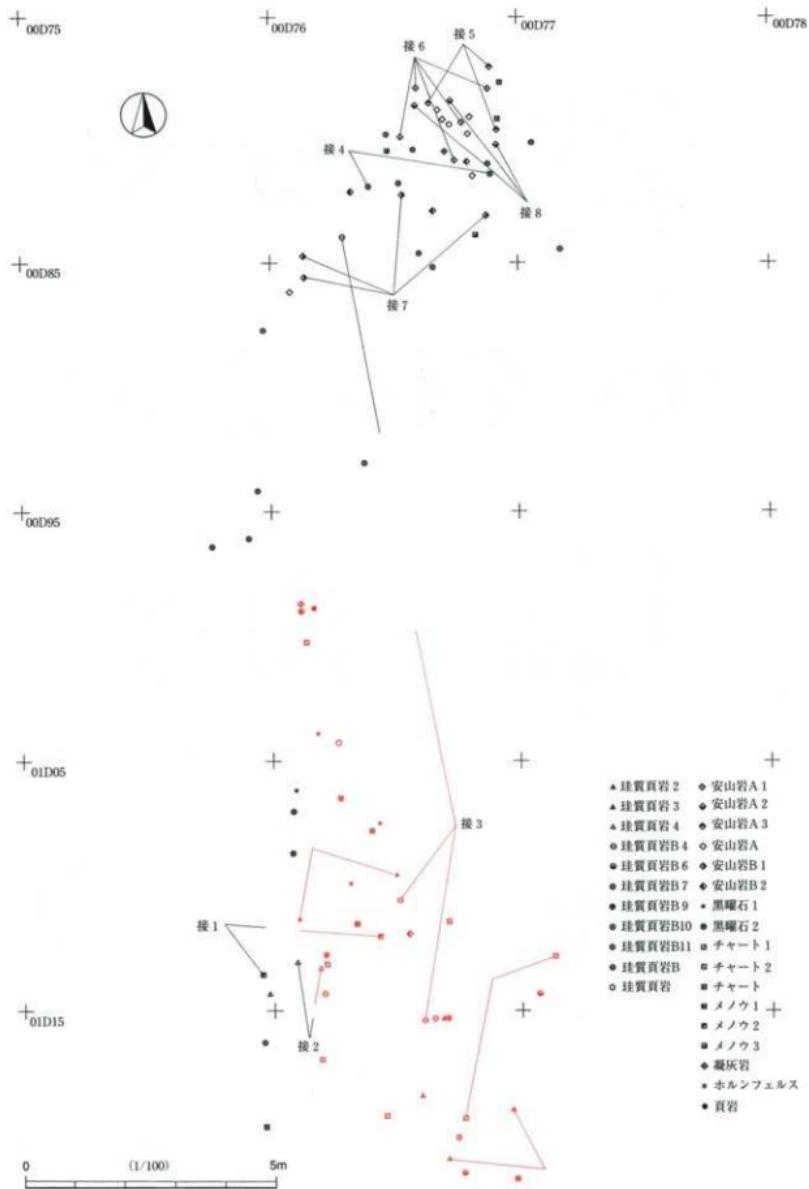
+ 01D17

- ナイフ形石器
 - 台形様石器
 - 楕形石器
 - ◆ 削器
 - ★ 眼器
 - 調整痕のある剥片
 - 使用痕のある剥片
 - 剥片
 - 砕片
 - 石核
 - 離片
- *赤は1次調査の出土石器

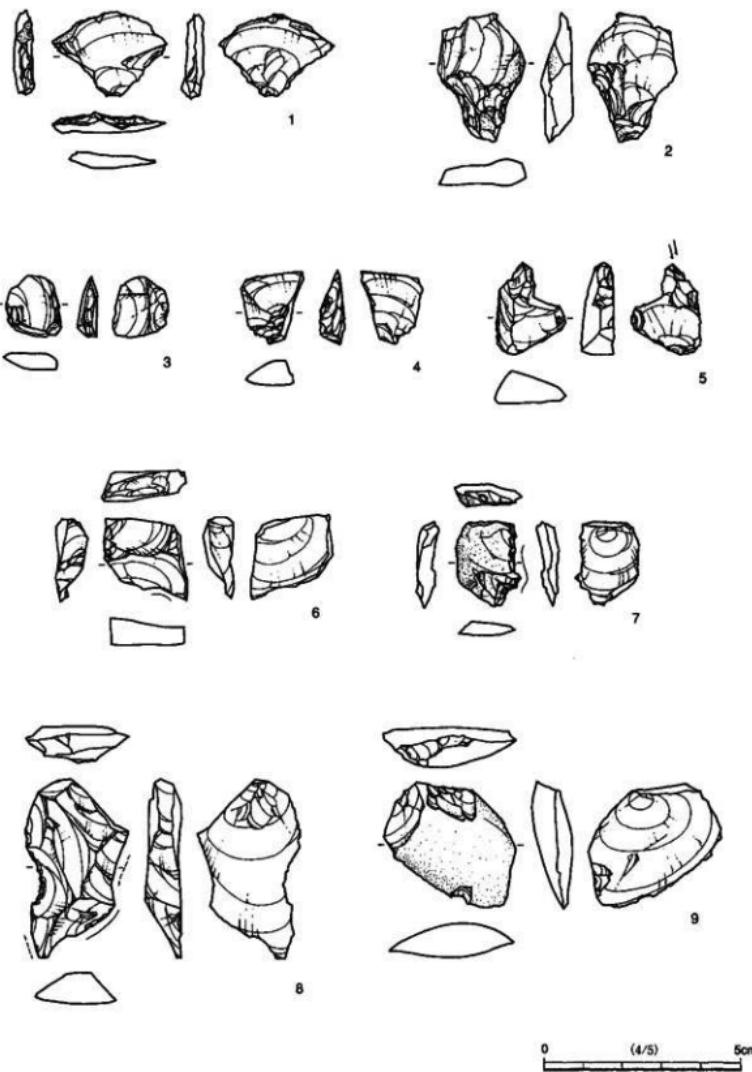
0 (1/100) 5m

第28図 石器集中 1 器種別出土状況

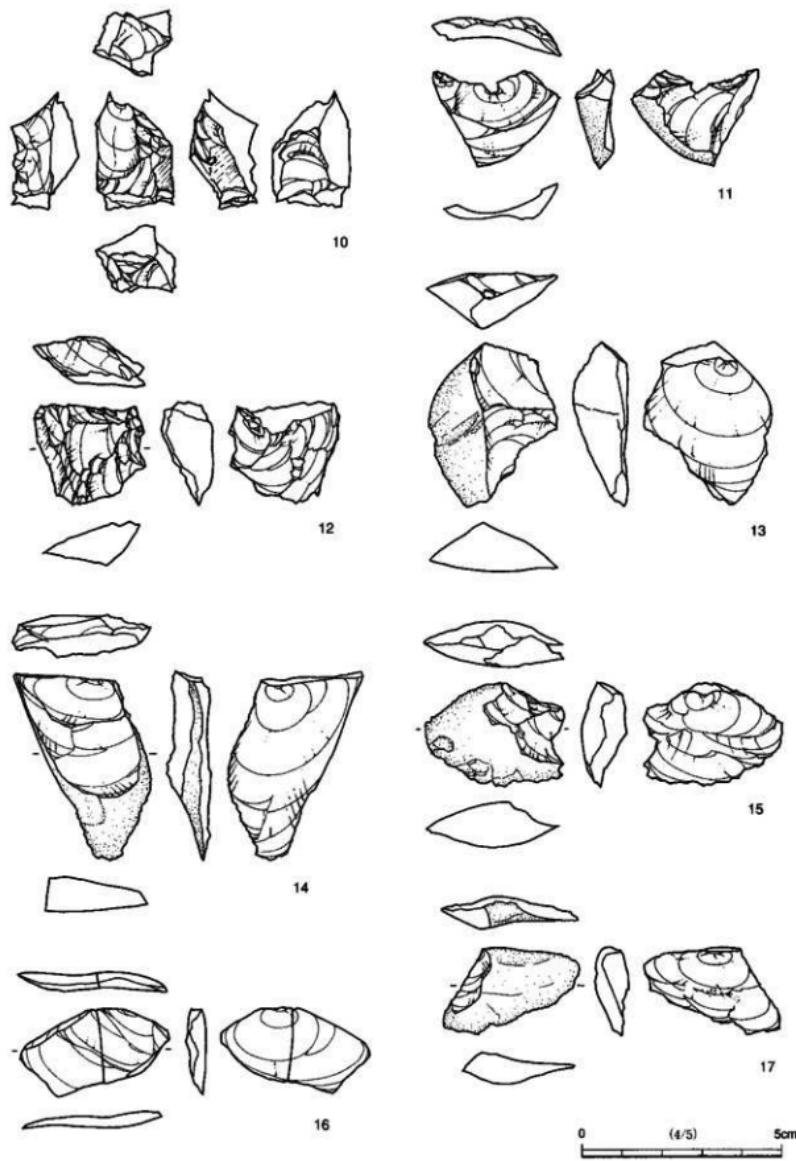




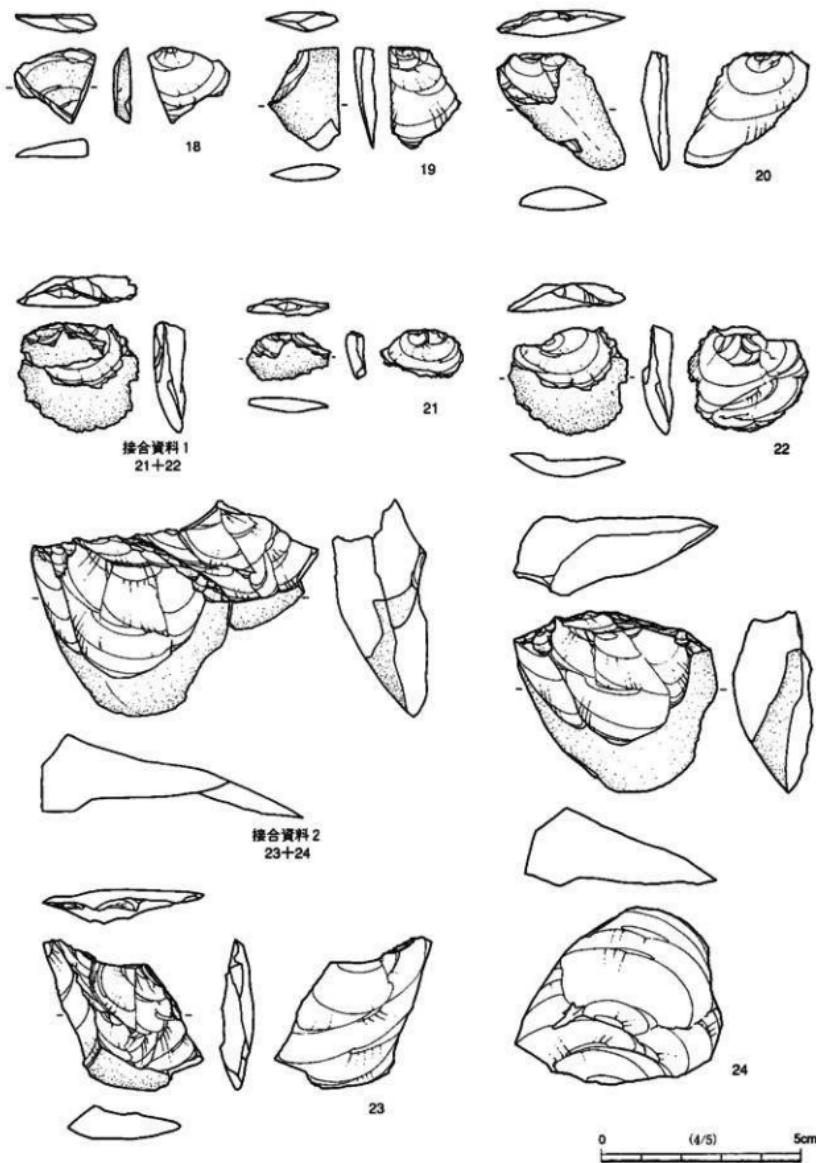
第29図 石器集中1 石材別出土状況



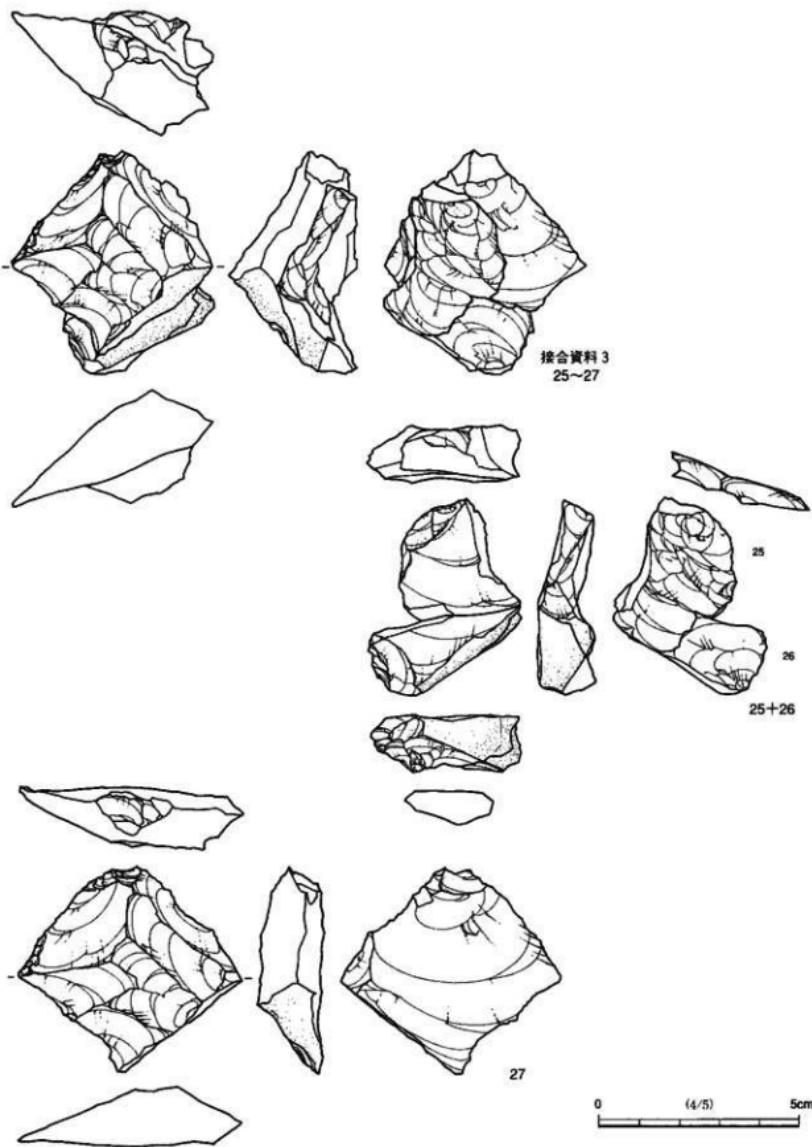
第30図 石器集中1 出土石器（1）



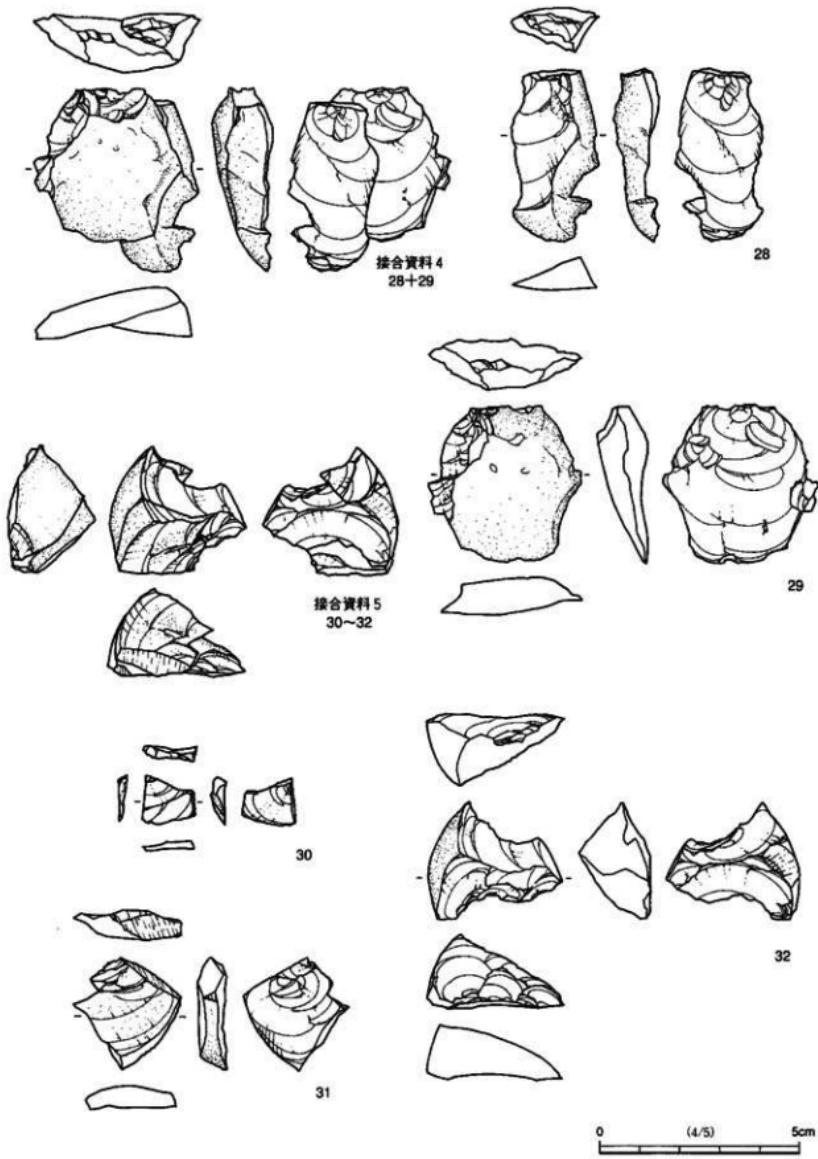
第31図 石器集中1 出土石器（2）



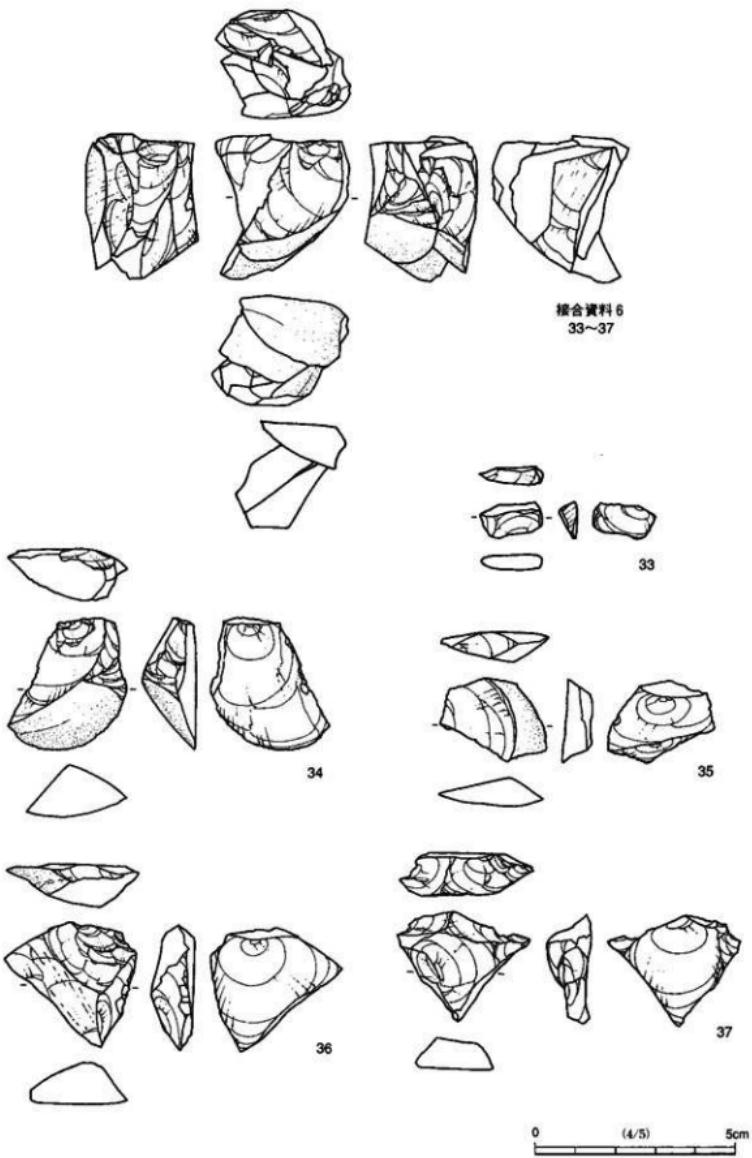
第32図 石器集中1 出土石器（3）



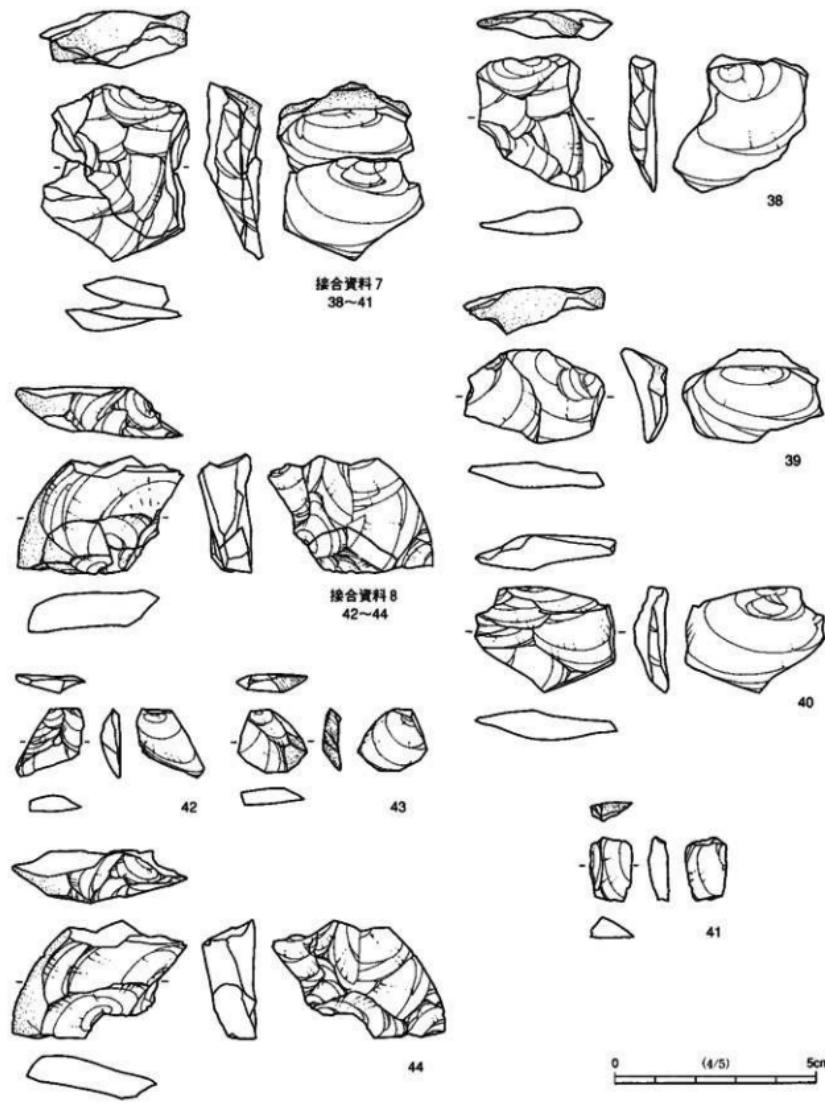
第33図 石器集中1 出土石器（4）



第34図 石器集中1 出土石器（5）



第35図 石器集中1 出土石器（6）



第36図 石器集中1 出土石器（7）

第8表 S.56・H.12年度 石器集中1 石器組成表

	タイプ形 石器	合形様石器	削器	耜器	楔形石器	使用歴の ある例片	圓錐形の ある例片	剥片	鉢片	石核	敲石	縦片	その他	合計	組成比
珪質頁岩A								1	529					1	0.69
珪質頁岩A 1								2	1					529	0.48
珪質頁岩B	4	1375			4	1	14		61					3	2.07
珪質頁岩B 1					1506	1.21	94			1969				194	0.18
珪質頁岩B 2								4						26	17.24
珪質頁岩B 3		2	1362					46.88						141.12	2.54
珪質頁岩B 4								3						2	2.78
珪質頁岩B 5								15.09						46.38	4.30
珪質頁岩B 6								13.62						3	2.07
珪質頁岩B 7								1.25						15.09	1.38
珪質頁岩B 8								1.25						2	1.38
珪質頁岩B 9	2	6.86						11.5						13.62	1.25
珪質頁岩B 10	1	1356			1	4	1.89							5	3.45
珪質頁岩B 11					1.77		10.53							51.44	4.72
珪質頁岩								4.3						3	2.07
珪質頁岩 1								4.3						114.31	10.48
珪質頁岩 2								1.25						3	2.77
珪質頁岩 3								1.25						13.8	1.27
珪質頁岩 4	1	7.73			1	1	1							3	2.07
安山岩					33.21		11.94							16.13	1.48
安山岩 A								1						1.13	1.05
安山岩 A 1								1						2	1.38
安山岩 A 2								1						6.86	0.63
安山岩 A 3								1						6	4.11
安山岩 B								1						25.18	2.37
安山岩 B 1								1						2	1.38
安山岩 B 2								1						21.91	2.01
安山岩 B 3								1						3	2.07
安山岩 B 4	1	7.73			1	1	1							35.58	3.26
安山岩 C					33.21		11.94							4	2.76
安山岩 D								1						30.81	2.82
安山岩 E								1						2	1.38
安山岩 F								1						25.18	2.31
安山岩 G								1						1	0.93
安山岩 H								1						13.52	1.24
安山岩 I								1						3	2.07
安山岩 J								1						52.88	4.83
安山岩 K								1						1	0.69
安山岩 L								1						19.54	1.79
安山岩 M								1						7	4.83
安山岩 N								1						17.39	1.59
安山岩 O								1						5	3.45
安山岩 P								1						29.81	2.73
安山岩 Q								1						3	2.67
安山岩 R								1						13.11	1.20
安山岩 S								1						3	2.67
安山岩 T								1						17.18	1.57
安山岩 U								1						7	4.83
安山岩 V								1						79.17	7.26
安山岩 W								1						4	2.76
安山岩 X								1						17.63	1.62
安山岩 Y								1						6	4.14
安山岩 Z								1						6.31	0.58
黑曜石 1	1							1						1	0.93
黑曜石 2	0.87							0.61						2.29	0.22
チャート			1		2.61									3	2.67
チャート 1							1		2					9.8	0.90
チャート 2							1		12.07					19.95	1.83
チャート 3							1		3					4	2.76
メノウ 1	1						1		1.62					14.95	1.37
メノウ 2	1						1		12.51					1	0.69
メノウ 3	1						1							12.51	1.15
メノウ 4	1						1							3	2.67
メノウ 5	1						1							8.82	0.81
メノウ 6	1						1							2	1.38
メノウ 7	1						1							5.55	0.51
メノウ 8	1						1							2	1.38
メノウ 9	1						1							20.74	1.90
黒灰岩							3		10.27					4	2.76
ホルンフェルス							1		10.27					12.913	11.01
青岩							1		1					2	1.38
その他							1		1					19.64	1.80
合計(高数)	1	8	5	1	1	11	3	96	2	13	1	1	2	145	100
合計(重量)	7.73	27.18	8.367	2.61	3.12	39.4	41.78	507.69	0.25	244.68	109.86	3.22	19.64	1000.03	100
組成比(高数)	0.69	5.52	3.45	0.69	0.69	7.59	2.07	66.21	1.38	8.97	0.69	0.69	1.38	100.00	
組成比(重量)	0.71	2.49	7.67	0.24	0.29	3.61	3.83	46.54	0.02	22.43	10.07	0.30	1.80	100.00	

第9表 旧石器觀察表 (1)

第10表 旧石器觀察表 (2)

番号	地名	層位	測量	標高(m)	標高(m)	標高(m)	標高(m)	測量結果								測定	測量	測量	測量		
								標高(m)													
1112 01007 0001 田代山	新井	田代山	0.56	11.3	12.3	3.3	15.0	3.2	1	12.9						F	底面以上(3.5m)	22525.217	6955.375	36.096	
1112 02006 0002 田代山	新井	田代山	0.72	18.5	19.5	5.9	19.6	6.3	31.1	9.6						R	H	底面以上(3.5m)	22519.454	6957.772	20.054
1112 02006 0003 田代山	新井	田代山	0.56	25.5	26.5	7.9	22.4	5.4	C	9.6					S	R	底面以上(3.5m)	22503.526	6953.154	26.644	
1112 01006 0001 田代山	新井	田代山	0.66	13.2	17.9	4.8				2	1				H	H	底面以上(3.5m)	22505.719	6957.905	26.895	
1112 01006 0002 田代山	新井	田代山	0.62	13.2	15.0	2.0				1	1				H	F	底面以上(3.5m)	22505.719	6957.905	26.895	
1112 01006 0003 田代山	新井	田代山	0.51	7.6	11.0	2.5				1	1				H	L	底面以上(3.5m)	22505.719	6956.657	26.002	
1112 01006 0007 田代山	新井	田代山	0.56	11.3	22	2.0	12	1	11.2		O	2			I	H	底面以上(3.5m)	22501.030	6956.595	26.020	
1112 01015 0002 チート	新井	チート	3.22	39.7	32.6	11.9				1.1	2				L	H	底面以上(3.5m)	22497.243	6957.811	26.819	
1112 01006 0008 田代山	新井	田代山	5.59	27.7	27.2	9.6	17.2	6.3	1	11.6					T	H	底面以上(3.5m)	22492.556	6950.954	26.812	
1112 01016 0002 チート	新井	チート	5.70	26.6	32.1	7.4	16.0	4.3	1	10.9		O	2		T	H	底面以上(3.5m)	22494.294	6954.917	26.923	
1112 01006 0009 田代山	新井	田代山	2.25	36.1	35.8	5.1				1	1	O	1		I	I	底面以上(3.5m)	22495.056	6955.805	26.777	
1112 01006 0010 田代山	新井	田代山	4.51	26.0	24.8	7.5	11.5	4.5	11.0	11.3	O	1	1	T	F	底面以上(3.5m)	22493.000	6951.040	26.743		
1112 01006 0011 田代山	新井	チート	3.12	16.5	26.3	5.9				1	1	O	1		T	F	底面以上(3.5m)	22493.075	6951.211	26.743	
1112 01006 0012 田代山	新井	田代山	2.28	37.0	37.9	12.5	7.3	1.9	1	10.2	O	O	2		J	T	底面以上(3.5m)	22497.879	6954.549	26.743	
75 SHI 01006 0008 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	1.99	17.1	19.7	4.2	9.5	6.3	3	8.7	O				L	H	底面以上(3.5m)	22497.926	6954.640	26.741	
75 SHI 01006 0009 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	0.91	11.1	26.3	3.8				1	9.6				I	H	底面以上(3.5m)	22491.398	6952.015	26.665	
8 SHI 01006 0010 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	0.98	14.0	21.0	7.3				1	1.1	O	1		H	T	底面以上(3.5m)	22493.231	6953.569	26.571	
10 SHI 01017 0023 チート	伊勢原	チート	1.05	13.9	23.7	3.5				1	4	O	1		P	I	底面以上(3.5m)	22497.894	6954.145	26.461	
11 SHI 00006 0010 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	0.90	25.0	23.5	8.1				O	O	1			P	I	底面以上(3.5m)	22494.548	6954.095	26.344	
12 SHI 01006 0001 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	2.03	8.5	25.5	4.7	7.2	1.9	1	12.1	C	O	2		P	I	底面以上(3.5m)	22497.279	6957.536	26.209	
13 SHI 00006 0006 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	2.20	24.7	24.7	4.8				3	3				H	P	底面以上(3.5m)	22499.842	6959.865	26.219	
14 SHI 01006 0007 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	2.63	24.7	27.2	7.4	13.8	3.9	1	12.2	I	I	1		L	H	底面以上(3.5m)	22501.056	6960.045	26.205	
15 SHI 01006 0013 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	3.05	23.5	33.8	10.1				O	O	2			T	H	底面以上(3.5m)	22493.768	6959.455	26.174	
16 SHI 01006 0008 チート	伊勢原	チート	2.68	32.3	30.8	8.7				C	9.9	O	1		P	I	底面以上(3.5m)	22497.119	6952.296	26.151	
17 SHI 01006 0011 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	6.52	36.0	36.1	11.1	2.1	1.1	12.7	O	O	2		T	H	底面以上(3.5m)	22496.811	6961.913	26.156		
18 SHI 01006 0004 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	19.54	26.5	44.0	12.5	19.1	6.9	2	11.1	O	O	2		H	T	底面以上(3.5m)	22491.141	6959.795	26.096	
19 SHI 01006 0005 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	4.80	19.9	27.9	8.7	14.3	4.7	1	11.1	O	O	2		P	I	底面以上(3.5m)	22491.940	6957.945	26.096	
20 SHI 01006 0006 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	2.20	34.7	34.6	11.2	5.6	1	12.1	O	O	2		J	T	底面以上(3.5m)	22498.542	6959.055	26.075		
21 SHI 01006 0007 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	2.35	22.1	27.2	7.4	13.8	3.9	1	12.2	O	O	2		L	H	底面以上(3.5m)	22502.329	6960.239	26.027	
22 SHI 01006 0014 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	21.64	43.2	41.3	14.8	16.5	12.3	1	11.7	O	O	2		I	H	底面以上(3.5m)	22493.072	6952.744	26.016	
23 SHI 01006 0015 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	6.65	26.5	26.5	10.6	16.5	6.7	1	12.2	O	O	2		T	H	底面以上(3.5m)	22492.524	6954.296	26.016	
24 SHI 01006 0001 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	12.51	41.0	29.5	12.5	23.2	5.2	2	11.1	O	O	2		T	H	底面以上(3.5m)	22495.019	6951.223	26.015	
25 SHI 01006 0002 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	12.69	36.2	43.8	12.6	12.4	8.9	2	11.1	O	O	2		I	H	底面以上(3.5m)	22497.040	6957.040	26.005	
26 SHI 01006 0003 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	5.21	34.6	33.6	12.2	5.7	5.6	1	12.1	O	O	2		P	I	底面以上(3.5m)	22498.057	6958.055	26.005	
27 SHI 01006 0004 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	5.75	29.0	26.1	9.8	21.1	4.1	1	12.6	O	O	2		T	H	底面以上(3.5m)	22497.247	6953.723	26.011	
28 SHI 00006 0002 チート	伊勢原	チート	12.05	26.5	31.1	17.4	25.1	15.5	1	12.5	O	I	1		O	H	底面以上(3.5m)	22497.628	6953.258	26.005	
29 SHI 01007 0017 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	18.80	6.1	31.1	16.5	27.7	17.5	2	11.9	O	I	1		T	H	底面以上(3.5m)	22498.793	6954.459	26.000	
30 SHI 01009 0008 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	27.67	6.5	34.8	16.5	26.0	12.1	1	12.9	O	I	1		T	H	底面以上(3.5m)	22495.861	6955.571	25.999	
31 SHI 01009 0009 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	9.27	21.1	24.4	11.0	11.0	1.2	11.0	T	I	1		O	H	底面以上(3.5m)	22497.697	6957.699	25.910		
32 SHI 01016 0010 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	9.85	26.2	35.1	9.5	17.1	2.5	1	11.0	S	I	5		T	F	底面以上(3.5m)	22498.799	6956.725	25.912	
33 SHI 01016 0011 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	7.41	21.8	42.1	9.6	26.0	1.6	1	12.6	O	I	4		T	H	底面以上(3.5m)	22492.342	6951.413	25.911	
34 SHI 01017 0012 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	9.27	26.0	34.1	11.3	27.0	6.5	1	12.5	O	I	2		I	H	底面以上(3.5m)	22497.676	6956.095	25.907	
35 SHI 01017 0013 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	24.44	29.6	35.1	16.7	19.7	5	12.9	O	I	1		T	H	底面以上(3.5m)	22495.043	6954.938	25.913		
36 SHI 01017 0014 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	12.07	23.2	27.7	16.1	27.6	15.1	1	11.9	O	I	1		T	H	底面以上(3.5m)	22495.720	6953.027	25.910	
37 SHI 01016 0015 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	9.50	31.0	36.9	16.9	22.1	11.0	11.0	2.0	O	I	5		T	F	底面以上(3.5m)	22498.367	6954.066	25.908	
38 SHI 01017 0016 0015 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	8.86	14.7	32.2	25.4	18.6	1.6	1	12.6	O	I	4		T	H	底面以上(3.5m)	22498.047	6954.117	25.908	
39 SHI 01018 0016 0016 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	30.5	34.1	35.4	15.6	28.0	1.6	1	12.6	O	I	4		T	H	底面以上(3.5m)	22498.072	6954.147	25.908	
40 SHI 01017 0017 0016 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	7.44	30.1	34.6	4.1	30.4	4.9	1	12.2	O	I	2		I	H	底面以上(3.5m)	22497.857	6954.237	26.005	
41 SHI 01017 0018 0016 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	4.56	44.0	54.6	17.1	30.7	4.9	1	12.2	O	I	2		I	H	底面以上(3.5m)	22498.186	6954.465	26.005	
42 SHI 01018 0019 0017 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	22.24	45.9	54.7	20.1	36.7	2.5	1	11.9	O	I	1		T	F	底面以上(3.5m)	22497.857	6954.386	26.005	
43 SHI 01018 0020 0018 伊勢原宮	伊勢原	伊勢原宮	5.29	27.6	31.4	11.9					O	I			T	F	底面以上(3.5m)	22497.421	6954.245	26.005	

第11表 旧石器觀察表 (3)

本譜は序文、著者文書中に記されたものである。第一次譜文と題された最初については、右藤義山のものを複数種類ある。

第3節 繩文時代

1 遺構

繩文時代の遺構は陥穴8基、炉穴3基である。これは上層本調査3,300m²に対しての検出遺構数で、中央部の大きな擾乱地点や、本調査にならなかった南側地点にも、いくつかの陥穴・土坑が存在していた可能性を指摘しておく。なお、繩文土器包含層を2地点で検出した。西側地点を「OA集中区」、東側地点を「OD集中区」とする（第39図）。

21号陥穴（001）（第37図、図版15）

0A77・78グリッドに位置する。上層確認調査時にソフトローム面の上部で検出した。平面形は楕円形を呈する。上端の大きさは長軸2.24m×短軸1.13mで、底面で2.03m×0.12mの葉巻形の平面形態を呈し、上部は皿状に開く。深さは最大1.88mと深い。長軸方向はN-57°-Eである。短軸方向の土層断面観察によると、底面直上に約10cmの有機質の黒色土が堆積し、その直上に人為的に埋め戻したと考えられる約30cmのハードロームブロックを主体とする暗灰褐色土が堆積している。更にその上には有機質の黒色土が存在する。2面の黒色有機質土の存在から、この陥穴が2期以上機能していた可能性がある。覆土中から遺物は検出されていない。

22号陥穴（005）（第37図、図版15）

OC99グリッドに位置する。下層確認調査時にソフトローム面を掘り下げている段階で検出した。平面形は非常に細長い楕円形を呈する。長軸方向の南西壁が袋状にオーバーハングしており、その結果、上端の大きさは、長軸3.29m×短軸0.46mで、底面で2.37m×0.15mの葉巻形の平面形態を呈する。深さは、最大1.42mである。長軸方向はN-67°-Eである。短軸方向の土層断面観察によると、底面直上有機質の黒色土が存在し、その直上の層位は締まりがあることから、この陥穴は人為的に埋め戻され、2期以上機能していた可能性がある。覆土中から遺物は検出されていない。

23号陥穴（006）（第37図、図版15）

4B53・63グリッドに位置する。下層確認調査時にVI層まで掘り下げた時点で検出した。24号陥穴に近接し、両遺構は「ハ」の字状の位置関係を成す。平面形は非常に細長い楕円形を呈する。長軸方向の壁両端が袋状に強くオーバーハングしており、その結果、上端の大きさは長軸3.80m×短軸0.67mで、底面で4.13m×0.28mの葉巻型の平面形態を呈する。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは、最大で1.82mである。長軸方向はN-14°-Eである。短軸方向の土層断面観察によると、底面から約35cm上の層は約50cmの厚さで硬く締まったハードロームブロックを主体とする層である。おそらく、この層は人為的に敷かれ、填圧されたのだろう。21号・22号陥穴同様2期以上機能していた可能性がある。覆土中から遺物は検出されていない。

24号陥穴（007）（第37図、図版15）

4B63グリッドに位置する。ソフトローム面の上部で検出した。平面形は細長い楕円形を呈する。北西端が膨らんでいるようになっているが、風倒木の搅乱部のためはっきりしない。おそらく南東端のように細く狭まっていたと思われる。上端の大きさは長軸2.45m×短軸0.50mで、底面で1.98m×0.06mの葉巻形の平面形態を呈し、壁面は上部に向かって緩やかに開く。深さは最大1.20mである。長軸方向はN-23°-Wである。短軸方向の土層断面観察によると底面直上に非常に硬く締まった約50cmの厚さのハードローム

ブロックを主体とする黄褐色土が堆積している。覆土中から遺物は検出されていない。

25号陥穴（008）（第37図、図版15）

OC89グリッドに位置する。交差する2号溝のプラン確認時に検出した。明らかに25号陥穴の方が古い。平面形は非常に細長い梢円形を呈する。長軸方向の壁のオーバーハングは余りない。上端の大きさは、長軸2.72m×短軸0.38mで、底面で2.74m×0.19mの葉巻形の平面形態を呈する。深さは、最大0.97mである。長軸方向はN-75°-Eである。底面は比較的平坦で、短軸方向の土層断面観察によると、底面直上に軟質で、有機質の黒色土が堆積している。覆土中から遺物は検出されていない。

26号陥穴（009）（第37図、図版15）

OC34・35グリッドに位置する。平面形は非常に細長い梢円形を呈する。長軸方向の東端が袋状に強くオーバーハングしており、その結果、上端の大きさは長軸2.88m×短軸0.48mで、底面で3.02m×0.19mの葉巻型の平面形態を呈する。底面は緩やかに弧を描くが、壁はほぼ垂直に近く立ち上がる。深さは、最大で0.82mである。長軸方向はN-71°-Eである。短軸方向の土層断面観察によると、底面直上に軟質の有機質黒色土があり、その上に約50cmの厚さで硬く締まったハードロームブロックを主体とする層が存在する。覆土中から遺物は検出されていない。

27号陥穴（010）（第38図、図版15）

OC58グリッドに位置する。平面形は細長い梢円形を呈する。長軸方向両端で若干の壁のオーバーハングが見られる。その結果、上端の大きさは長軸3.60m×0.62mで、底面で3.90m×0.32mの葉巻形の平面形態を呈し、壁上部は緩やかに直線的に開く。深さは最大1.59mと深い。長軸方向はN-32°-Wである。短軸方向の土層断面観察によると底面直上に約10cmの有機質の黒色土が堆積し、その直上に約65cmのハードロームブロックを主体とする黄褐色土が堆積している。覆土中から遺物は検出されていない。

28号陥穴（012）（第38図、図版15）

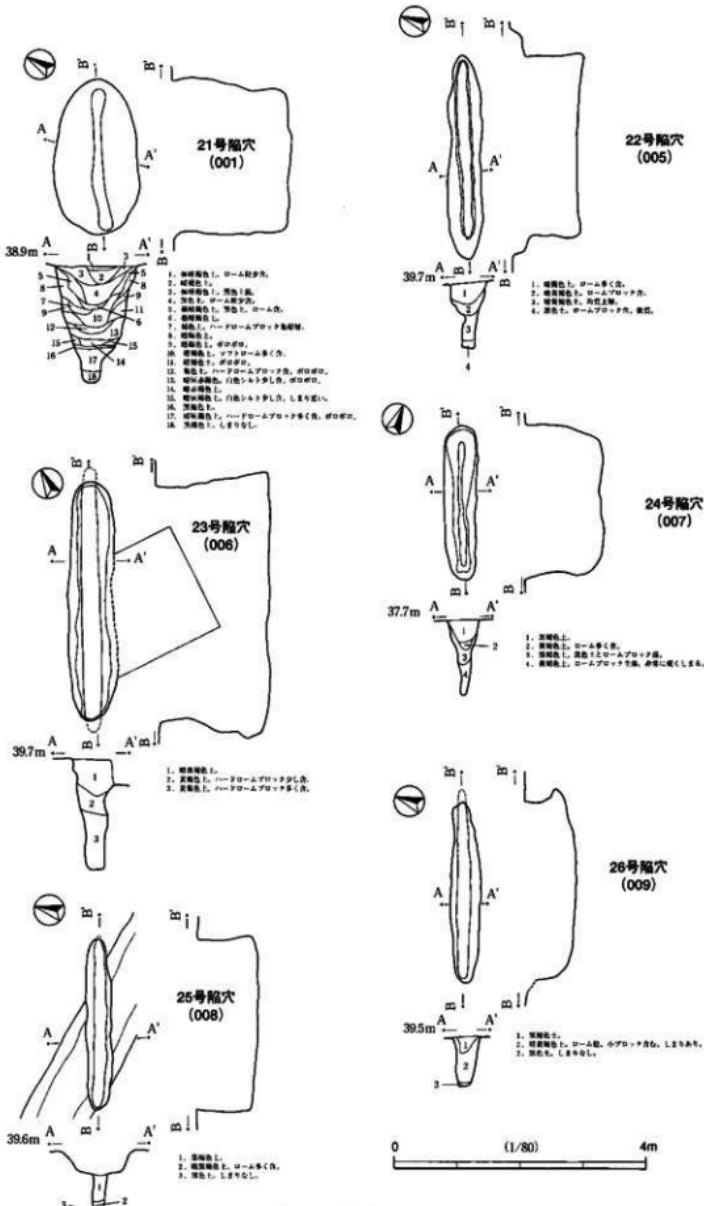
OA16グリッドに位置する。平面形は非常に細長い梢円形を呈する。長軸方向のオーバーハングは見られない。上端の大きさは、長軸2.80m×短軸0.74mで、底面で2.65m×0.18mの葉巻形の平面形態を呈する。深さは最大1.05mである。長軸方向はN-75°-Wである。短軸方向の土層断面観察によると、底面直上に20cmの厚さで有機質の黒色土が存在し、その直上には12cmの厚さの硬化面があることから、この陥穴は人為的に埋め戻された可能性がある。覆土中から遺物は検出されていない。

11号炉穴（004）（第38図、図版18）

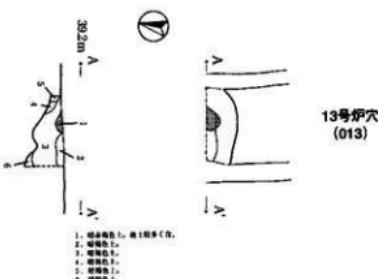
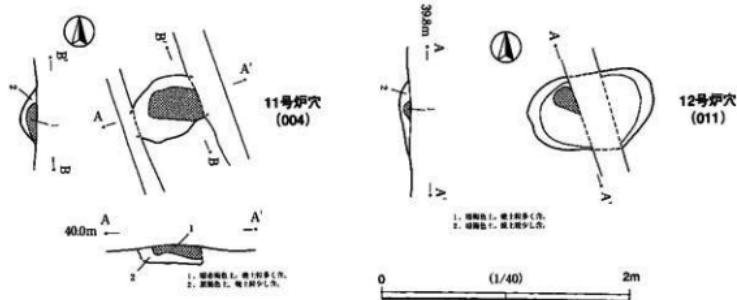
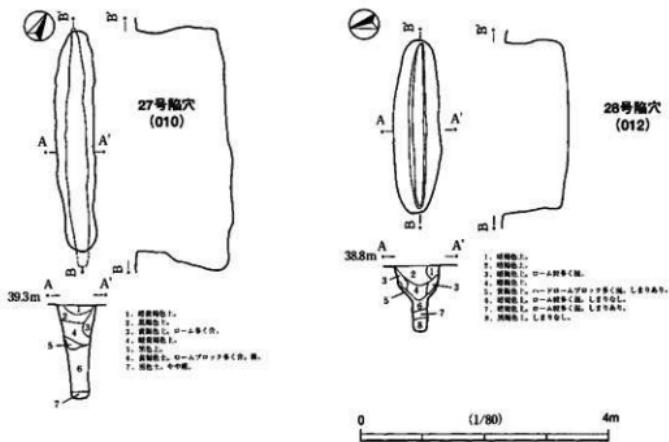
1A08グリッドに位置する。平面形態は東西方向にやや細長い梢円形を呈する。東西両端で耕作による搅乱を受けている。残存している範囲では、上端で長軸0.50m×短軸0.50m、下端で長軸0.50m×短軸0.35m、深さ0.13m、底面は緩やかに弧を描く。遺構中央には0.25m×0.40m、厚さ0.08mの焼土を多量に含む層があり、その周りを取り囲むように、焼土を少量含む面がある。

12号炉穴（011）（第38図、図版18）

0A46グリッドに位置する。IIc層に掘り込まれている。平面形は東西方向にやや長く延びる梢円形を呈する。上端で長軸1.02m×短軸0.60m、下端で長軸0.80m×短軸0.50m、深さ10cm、底面は緩やかに弧を描く。遺構中央を耕作による搅乱を受けていて、断面観察はこの搅乱に沿って行った。遺構中央には0.18m×0.25m、厚さ0.06mの焼土があり、その周りを取り囲むように5cm程の被熱面がある。



第37図 陷穴



第38図 脇穴・炉穴

13号炉穴（013）（第38図、図版18）

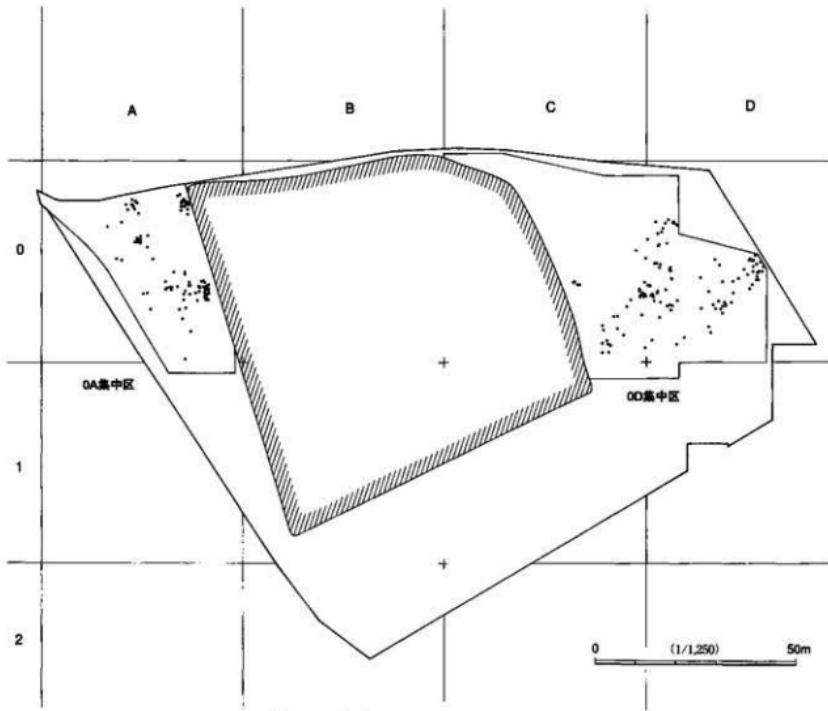
0A32・33グリッドに位置する。3方向で搅乱を受けているため、全体の規模は不明。残存している範囲では、上端で長軸0.60m×短軸0.28m、底面は緩やかに弧を描く。遺構中央には0.10m×0.18m、厚さ0.05mの焼土を多量に含む層があり、その周りを取り囲むように、焼土を少量含む面がある。

0A集中区（第39・40図、図版17）

0 A区を中心として検出された遺物集中地点で、南北約30m・東西約25mの範囲に4つの集中域を形成している。前期と後期に属する土器群が主体で、個体毎に集中域を形成している。集中域は2m～4mの範囲にまとまっている。一部、早期沈線文系・条痕文系土器がみられる。出土層位は、明瞭には分離できないが調査時の所見で、後期土器がII a層、早期土器がII c層を中心に分布する傾向が指摘された。

0D集中区（第39・41図、図版16・17）

0 C区と0 D区の境界を中心として検出された遺物集中地点で、南北約30m・東西約50mの範囲に明瞭な集中域を形成せずに散漫に分布している。早期沈線文系～条痕文系を中心とした時期の土器片がみられ、0C69・0D60グリッド周辺には早期沈線文系、その周辺に条痕文系土器群が分布している状況である。出土層位は、II c層を主体としている。



第39図 横文土器包含層 遺物集中区

0A12

0A15

0A19

0A52

0A55

0A59

- 繩文早期
- △ 繩文前期
- ★ 繩文後期
- 未分類土器片
- 石器

0

(1/200)

10m

□ 7

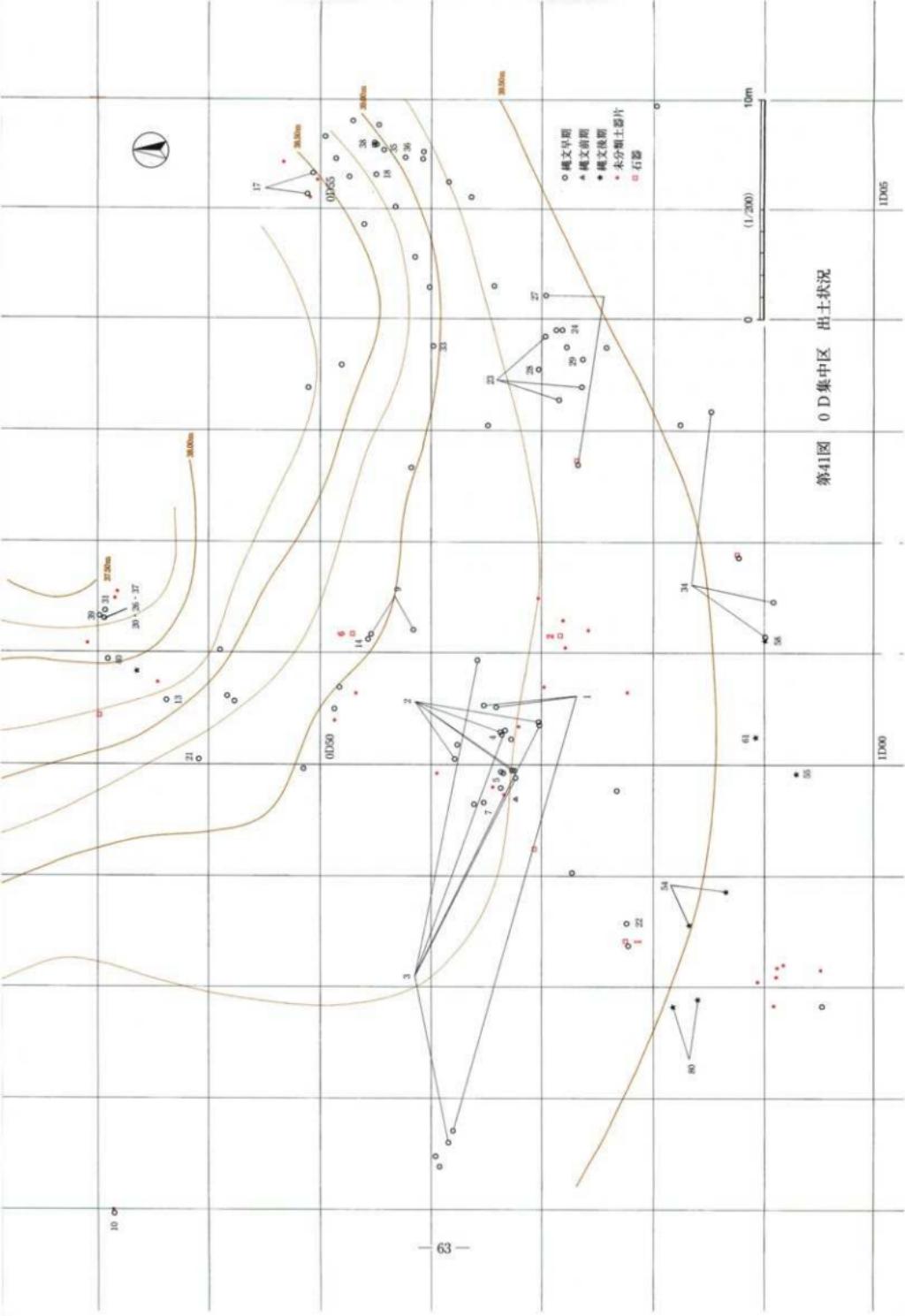
1A02

1A05

1A09

第40図 0 A集中区 出土状況

第41图 0 D集中区 出土状况



2 出土遺物

以下の遺物は、OA集中城・OD集中城から出土したものを中心とする。各遺物の番号は分布図の番号と一致し、グリッド番号を付した。

(1) 土 器

1) 第I群土器（第42図、図版23）

早期の沈線文系土器を一括した。

1～4は浅い太沈線が連続的に横走し、条線状を呈している。すべて同一個体である。1は口縁部破片で、口唇はやや荒れており平坦であるが、極僅かに内削ぎといえる。横走沈線を施文後に口唇部が整えられている。裏面の一部には継位に削り痕が残っている。胎土には石英片が多量に混じり、全体的な焼成は不良である。三戸式～田戸下層式の古手に位置づけられる。

5～7は口縁上端に継位短沈線が連続施文され、胴部には斜位に沈線が施されている。口縁部片のみの出土であり胴部の文様についてはよくわからない。6・7は同一個体である。口唇部は内削ぎ状に緩やかにカーブするが、端部は切られたように平坦となる。三戸式あるいは田戸下層式に位置づけられよう。

8～12は田戸下層式に位置づけられる。8は横位細沈線による条線に挟まれて、継位の刻文列が施されている。裏面は平滑となり、胎土には砂が混じっている。土器片の上端には太沈線が施されている。9は横位細沈線による条線の上位に、貝殻腹縁文が横位に充填されている。10～12は横位に細沈線と太沈線が施されたものである。8と同様に胎土には砂が混じり、裏面は平滑となっている。

13～16は沈線文期に属すると思われる、条痕が施された資料である。条痕は外面のみで、内面は平滑となるか、継位の擦痕がみられる程度である。13は2条の沈線が施文された胴部片で、地紋に浅い条痕が施されている。裏面は平滑となっている。胎土には少量の纖維が含まれる。

2) 第II群土器（第43図、図版24）

早期の条痕文系土器を一括した。

17・18は内削ぎの口縁の端部に、角棒状の工具で横位に斜めから連続的に刺突された口唇をもつ。分厚い個体で、胴部には内外面に横位の浅い条痕が施されている。胎土に纖維が混入するが、相対的に少ない。

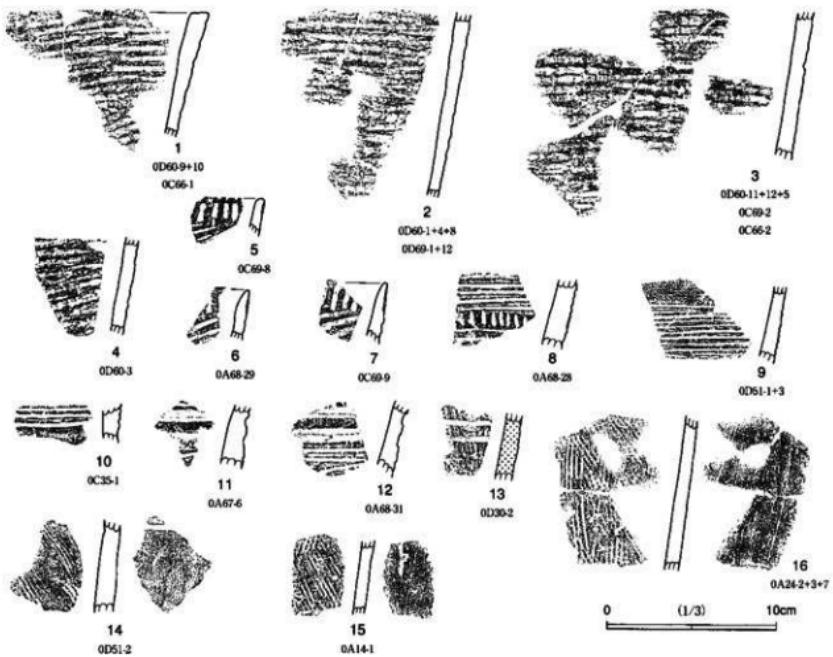
19は有文土器で横位の条痕を地文として、張り付けによる隆起線で文様を描いている。上下の区画線を設け、上位のスペースに斜めに隆起線を配し文様を描いているが、破片であるため文様構成は不明である。内面にも横位に条痕が施されている。胎土は纖維・石英片が混入する。野島式土器に比定される。

20・21も有文土器で、いずれも有文部と無文部を区画する「くびれ」部分である。「くびれ」より上部には角棒状工具による押引文によって文様を描いている。22は波状を呈する口縁部付近のものと思われるが、口唇部は残っていない。頂部から延びる隆帯上には刺突が施されている。隆帯より下部には、横位の浅い条痕が施されている。内面は条痕調整後荒くナデられている。20～22は茅山下層式に比定される。

23～25は平縁で口唇に刻みをもつ薄手の土器で、内外面ともに条痕が施文されている。外面は横位のみでなく、継位・斜位に3～6条単位の条痕が施されている。すべて同一個体である。

27～34は、内外面に深いはっきりした条痕が施された資料で、比較的薄手の資料である。

35～41は、やや浅めの条痕が内外面に施された資料で、器壁が分厚い特徴を示す。



第42図 縄文土器（1）

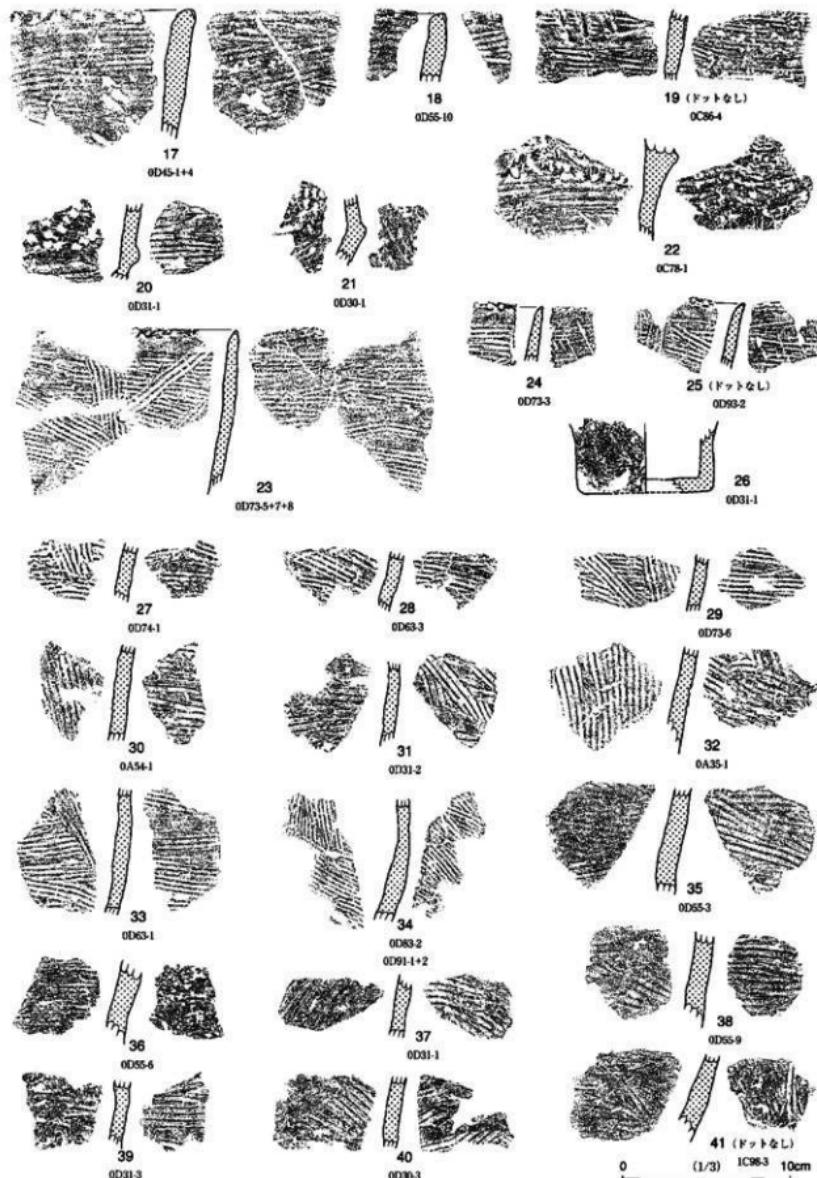
3) 第Ⅲ群土器（第44図、図版23）

前期浮島式土器を一括した。

42~46はすべて同一個体で、上半が半截竹管の2本組沈線で文様を描き、下半部が貝殻腹縁文を用いて、直線的な文様を垂下させている。口縁部は突起をもつ平縁と思われる。くびれ部を挟んで上下に2本一组で二組の細沈線が施文され、その直下に同じ工具を用いて波状文を横位に描いている。波状文の下にはさらに横位区画のための沈線が施文され、以下、貝殻腹縁文を斜めに垂下させている。口唇部とその付近の内面には、削りが施され、丁寧に磨かれているため、光沢をもつ。

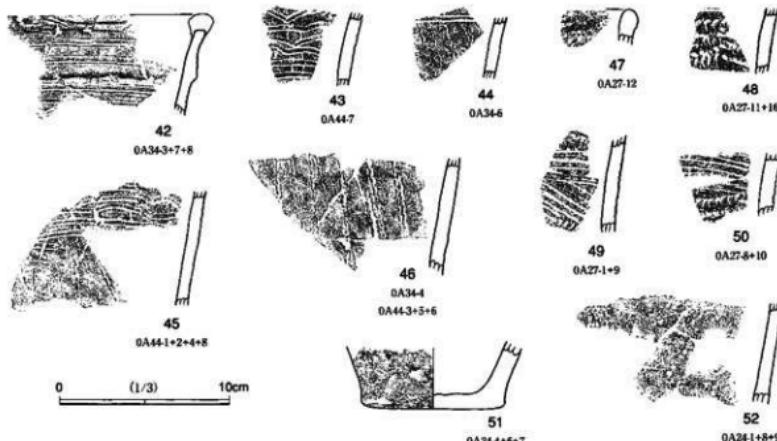
47~50は変形爪形文と沈線文が施文されたものである。47は口縁部片で文様はないが、48~50と酷似した胎土であることから同一個体と思われる。文様構成は、49をみると、変形爪形文によって上下が区画され、その内部に沈線で菱形を描くものである可能性が高い。42~46と比較して胎土に砂の混入量が多い。

52は無文の胴部破片で、51の平底の底部と同一個体である。両者ともに、同一グリッド（OA24）から出土している。



第43図 繩文土器（2）

※（ドットなし）は20A・OD集中区に属さないもの、
残していても出土位置が不明のものを示している



第44図 縄文土器（3）

4) 第IV群土器（第45図、図版25）

後期の土器を一括した。

53~61は縄文のみが施文されたものである。時期的にすべてのものを後期と断定するのは困難である。

62~70はすべて同一個体である。胴部中央や下部でふくらみ、口縁に向かって軽く外反する器形で、この時期に典型的なものである。口唇直下の内面には太沈線が一条、廻っている。外面は粗い縄文が全面に施文されている。内面は丁寧にナデられ、平滑となっている。加曾利B式に比定される。

71~75は粒が大きく粗い縄文を地紋として、カーブを描きながら垂下する太沈線の条線が施文されている。縄文・沈線の一部は磨り消されている。加曾利B式に比定される。

76・77は若干ではあるが、外面に縄文が施文されている。同一個体である。78~81は無文の胴部破片である。78・81は継位の削り痕が明瞭で、外反している。同一個体である。

82・83は平底の底部片である。83は薄手のもので時期的に新しくなる可能性がある。

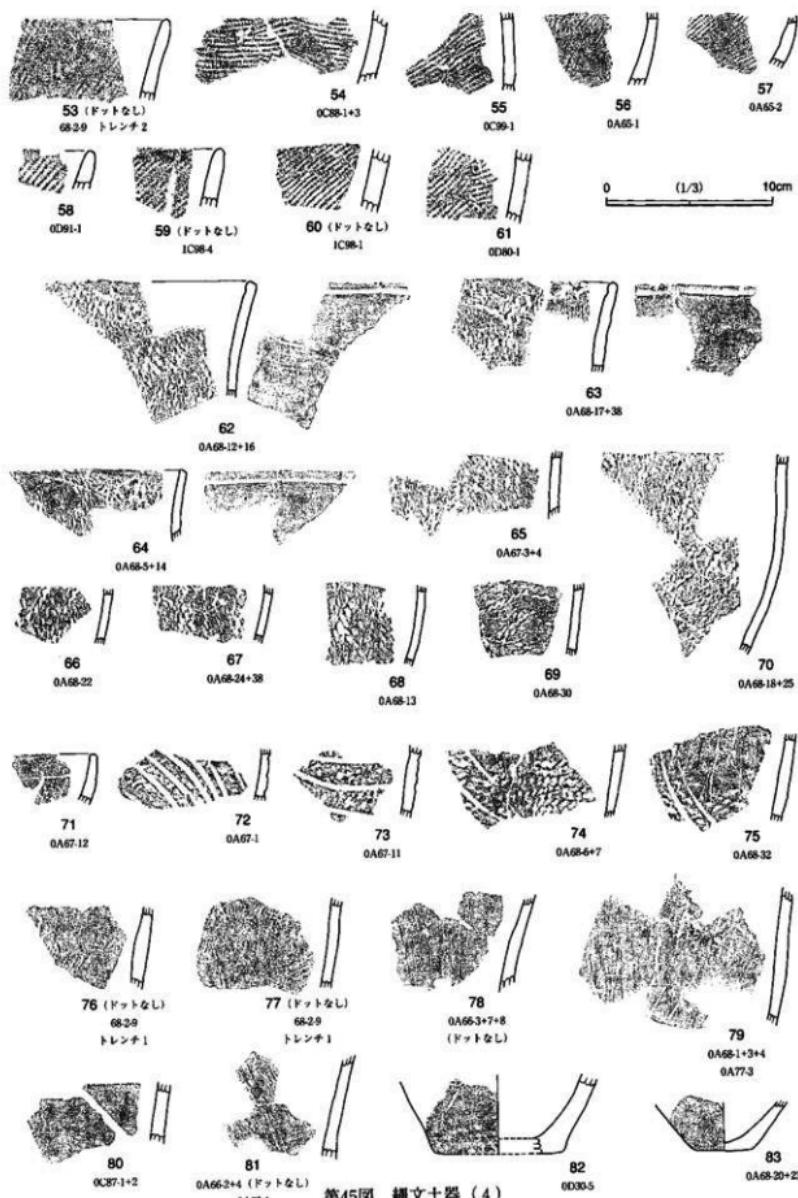
(2) 石 器（第46図、第12表、図版27）

1・2・6・7はOD集中区、3~5はOA集中区から検出された。

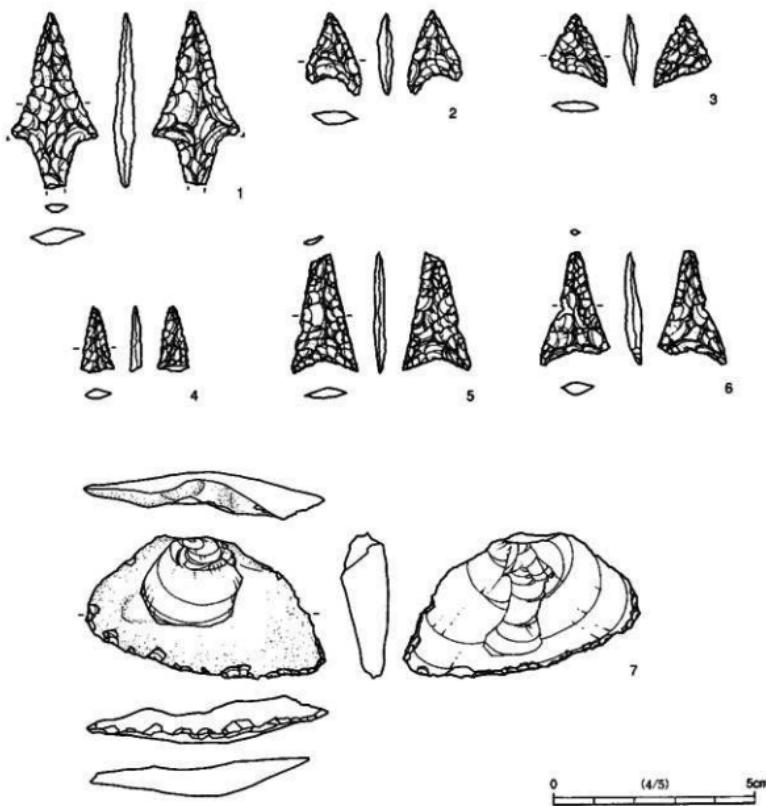
1は安山岩製の有舌尖頭器である。身部中央付近でやや内湾し、かえしの部分には明瞭な抉入部がみられる。縄文時代草創期に位置づけられる。

2~6は周辺から検出された土器型式から、縄文時代早期から前期を中心に、後期にまで下る可能性がある石器である。正三角形状を呈したもの（2・3）と二等辺三角形状を呈したもの（5・6）があるが、いずれも基部の抉りは比較的明瞭である。5の調整は非常に丁寧で、縁辺も直線的に薄く仕上げられているのが特徴的である。4は先端部のみであるが、6のように基部に向かって広がるものと思われる。

7は幅広剥片を素材としたもので、縁辺には微細剥離痕がランダムに表裏両面にみられる。



第45図 楩文土器(4)



第46図 繩文石器

第12表 繩文石器観察表

件番	グリッド	遺物	器種	石材	最大長 [mm]	最大幅 [mm]	最大厚 [mm]	重量 [g]	備考
1	0C82	2	有舌尖頭器	安山岩	44.3	22.1	5.4	109	
2	0D72	1	石鑿	安山岩	20.3	14.4	3.3	0.78	
3	0A26	7	石鑿	黒曜石	18.2	13.8	3.2	0.54	
4	0A36	1	石鑿	チャート	15.9	8.1	2.6	0.29	
5	0A76	1	石鑿	チャート	29.0	16.3	3.0	1.11	
6	0D51	4	石鑿	チャート	28.0	16.5	3.3	1.00	
7	0A97	1	圓錐漏斗形のある遺物	頁岩	34.9	60.7	9.4	15.63	

第4節 中・近世

1 遺構

中・近世の遺構は溝状遺構2条、馬埋葬土坑（13号土坑）1基である。

2号溝（003）（第47図、図版18・19）

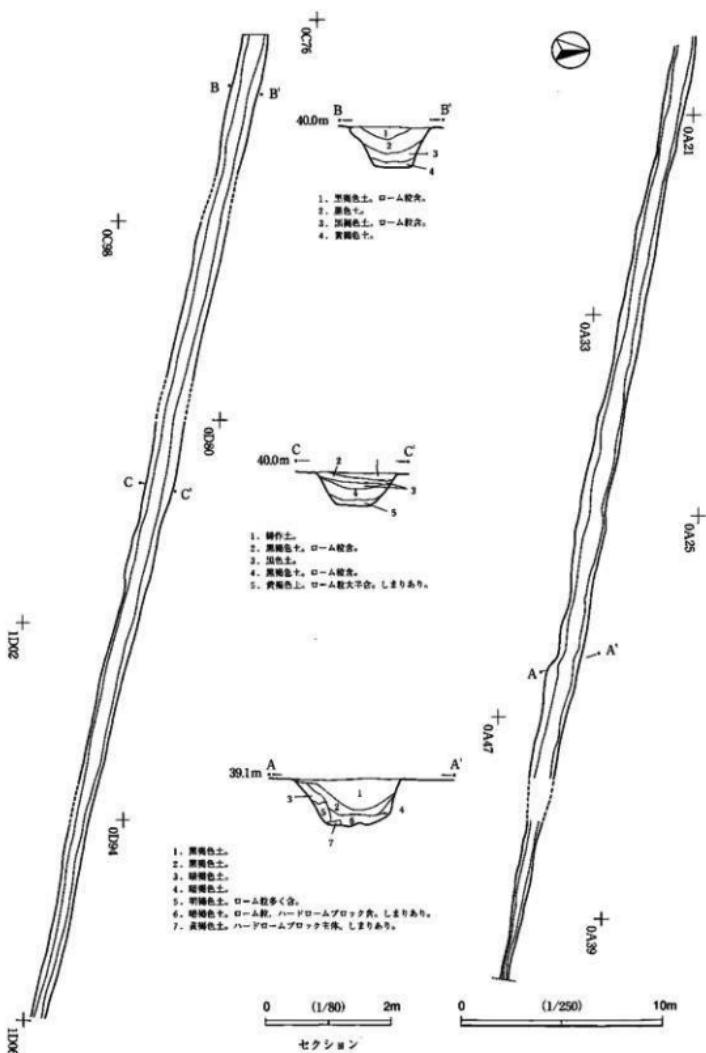
調査区内を東西方向に直線的に延びる溝状遺構である。その方向はN-76°-Wを指している。第1次調査時点で検出されていた遺構で、今回のものはその西側に連続している。遺跡中央で大きな擾乱によって消失しているが、その西側で37.2m、東側で49.5mの長さで残存する。断面形態はどの地点でも同じで、逆台形を呈する。すなわち、底面が幅広く平坦で、立ち上がりが明瞭、壁は左右両側とも直線的に延びる。上面の削平具合で、遺構の上端幅に違いが生じているが、最も残りの良い地点では上端幅1.30m、下端幅0.60m、深さ0.60mを測る。覆土は締まりがある自然堆積層で、特に硬化している面はない。

4号溝（002）（第48図、図版19）

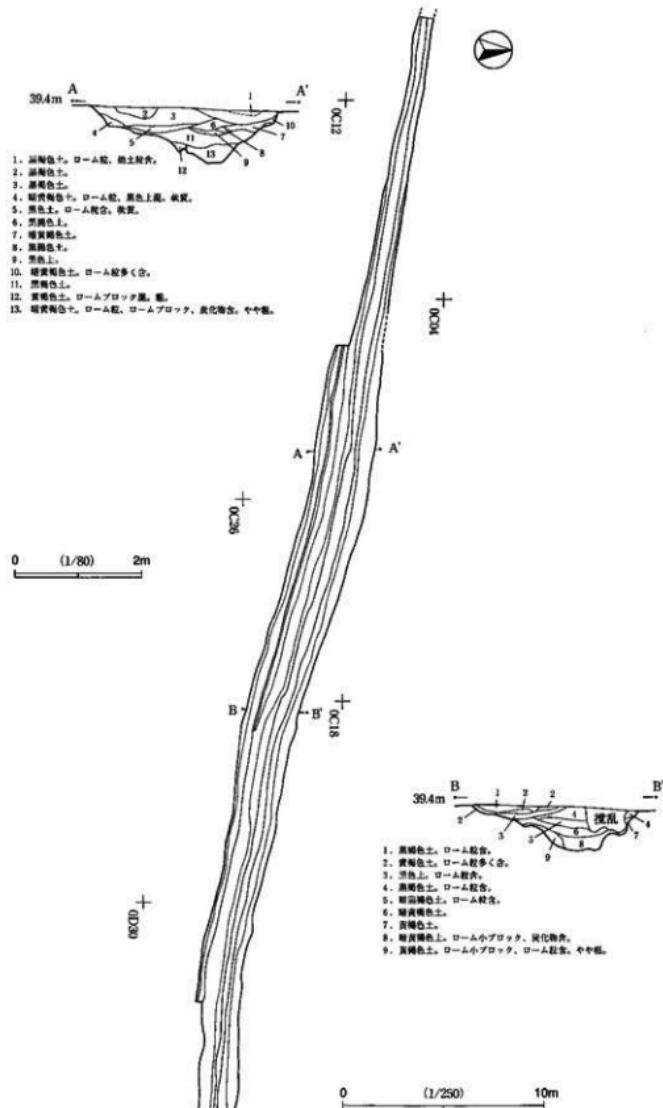
緩やかな弧を描くように空港建設直前まで使われていた旧道路が、この遺跡の調査区北端の境界となっているが、南側で道路に沿うように概ね東西方向に延びる遺構である。遺跡中央の大きな擾乱によって西端が消滅してしまっている。総延長54.5mを測る。遺跡は現況では全くの平坦地に造成されているが、本来北東端は東側から浅い谷津があり込んでいる地形で、この遺構は谷津に向かって徐々に傾斜を強めている。断面形態は壁の立ち上がりが本来緩やかな逆台形であったものが、埋没とその南側に浅く平坦な溝を築く工程が繰り返され、検出時のような形態になった過程が読みとれる。その結果、平面形態は南側で上端・下端線が階段状に連続する複雑なものとなっている。断面A-A'では最も新しい土層に硬化面が見られることから、一時的に道路として機能していたものと考えられる。覆土は自然堆積であるが、締まりの具合から見て、2号溝よりも新しいものと思われる。形態的に見ると、北側に土手を伴う野馬土手であった可能性が高い。

13号土坑（014）（第49図、図版18）

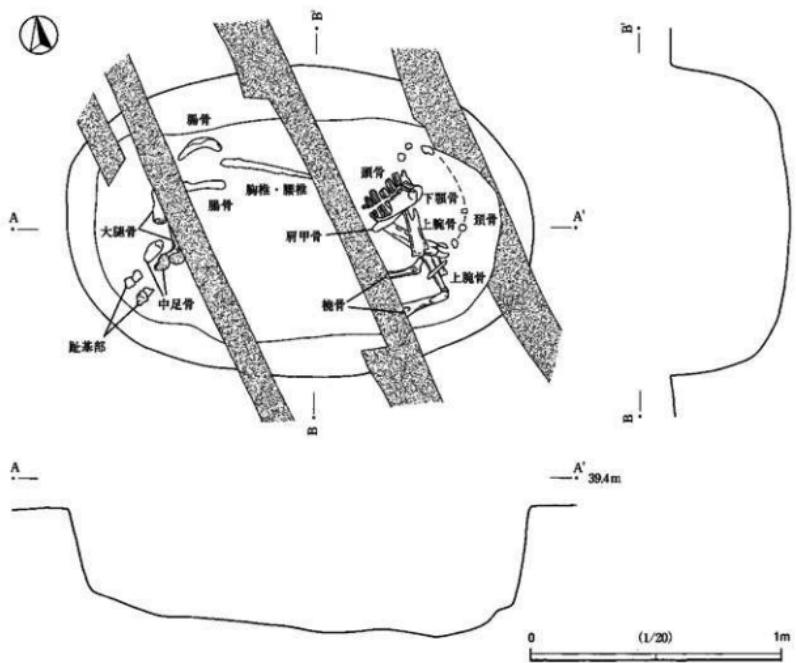
「防音林建設に伴う調査」において唯一検出した遺構である。1Z19グリッドに位置する。平面形態は東西方向に長い楕円形で、長軸1.84m、短軸1.25m、底面は平坦で、深さは最も深いところで確認面から0.47mを測る。土坑内には頭部を東側、腰部を西側に向けて一体の馬が埋葬されていた。この土坑には4条のゴボウ耕作による縞状の擾乱が見られ、その擾乱によって馬骨も分断されている。頭骨は下顎と上下両歯のみ残存していたが、前歯は南北方向を向き、頸基部は北東方向を向いている。頸骨は弧を描くように土坑北東隅に幾つか痕跡が見られる。上腕骨・肩甲骨・橈骨は比較的の残りがよい。胸椎・腰椎は粉状に痕跡として残っている。腸骨は一对見られ、大腿骨は上半分が擾乱によって失われている。後足は、中足骨・趾部が多少残存している。以上の骨格の残存状況から判断すると以下のようになる。馬は馬体の前面を東に、腰を西にして、背中を北側に向かって横たわっている。また頸部は北側から大きく湾曲させて、体に折り重ねるようにしている。前足は土坑の大きさに合わせるように折りたためられていたようであるが、中手骨以下は残っていない（土中で溶解したか、元々なかったか不明）。後足は、土坑上面にはみ出すような格好で、余り曲げられることもなく比較的真っ直ぐである。以上が馬の埋葬状態である。



第47図 2号溝



第48図 4号溝



第49図 13号土坑

第4章 まとめ

第1節 香山新田新山遺跡（空港No10遺跡）

昭和54年度の調査結果を踏え、以下にまとめることとする。なお、この昭和54年度の調査を第1次調査とし、今回の調査を第2次調査と呼ぶ。また、第1次調査の報告書を第1次報文と呼ぶ。

1 旧石器時代

石器集中地点5か所と炉跡1基を検出した。

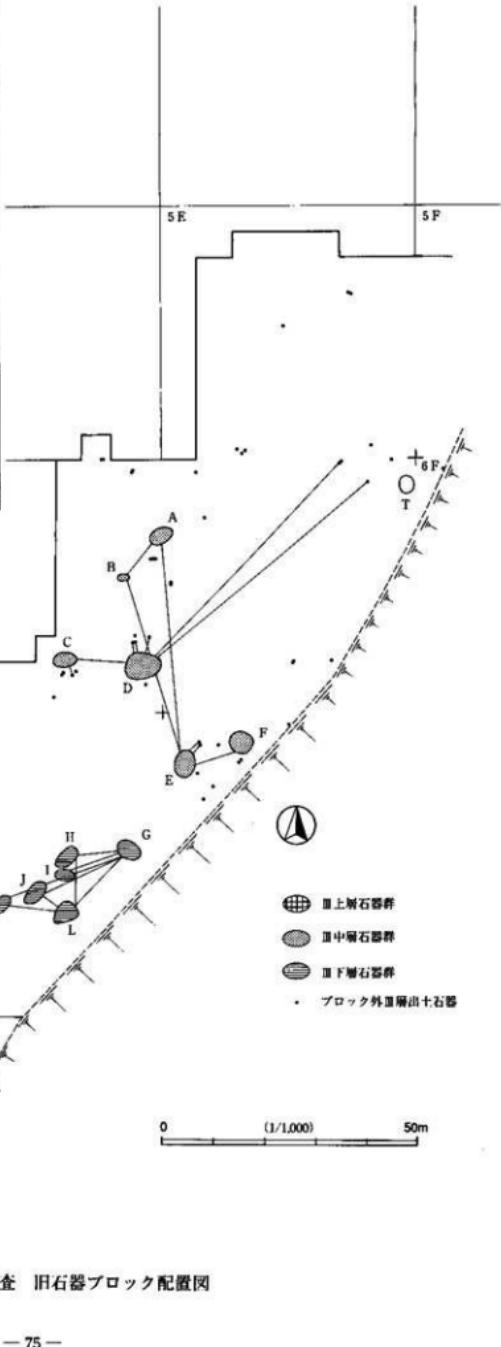
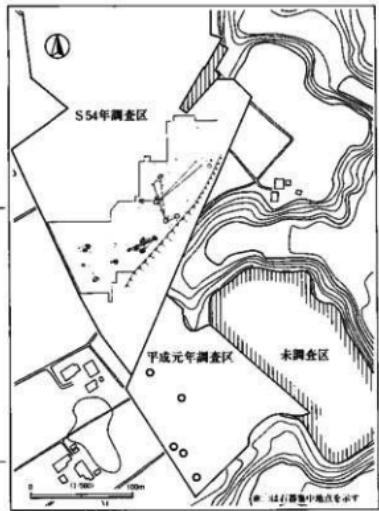
炉跡は第2黒色帶下半部（IX層）を中心に、炭化粒・焼土粒が密集した状況を呈していた。この遺構に伴う遺物は検出されなかった。第1次調査でも5か所の炭化物集中地点が検出されているが、「炭化物片の大きさは共通して皆細かいもの」と報告され、焼土については記載がないことから、炭化材・焼土粒がまとまって検出された、今回の遺構とは異なる性格のものであると推定される。

石器集中1・2はATより下位の石器群であるが、出土遺物が各石器群とも10点未満の零細なものである。石器集中4・5については単独検出に近い零細なものなので、ここでは触れないこととする。

石器集中3は、ソフトローム（Ⅲ層）上部を中心として検出されたブロックで、南北に隣接する2か所の密集域から形成される。出土石器の総点数は738点を数える。そのうち698点が砾・砾片であるので、砾群の中に剥片石器が混在している分布状況である。出土石器はナイフ形石器2点、小型の彫刻刀形石器6点、同削片5点、搔器3点、楔形石器1点、微細剥離痕のある剥片2点、剥片・碎片16点、石核5点を含む合計40点の剥片石器が出土した。ナイフ形石器は小型の剥片を素材としたもので、片側面を中心に急角度調整が施されている。彫刻刀形石器が安定して組成する点は注目され、本石器集中地点の一つの特徴くなっている。いずれも小型剥片を素材とし、周縁調整が施されたものや、急角度調整が施されるものなどバラエティーが豊富である。石材は嶺岡産のものと思われる珪質頁岩Bが主体的に用いられるなど、全体的に、南房総産の石材利用の色調が濃厚である。

出土層位・出土石器の内容等から本石器群がナイフ形石器の終末期に相当すると思われる。空港予定地内では天神峰最上遺跡等いくつかの遺跡で、同段階に相当すると思われる石器群が検出されている。天神峰最上遺跡ではやはりナイフ形石器に伴って彫刻刀形石器が組成し、同様の傾向を示すが、石材は北関東産と推定されるメノウ・玉髓が主体であり、本遺跡のものとは大きく異なる。また、多量の小砾で構成される砾群と少數の剥片石器が混在する出土状況は、削片剥離が顕著な有刃尖頭器石器群にも見られ、本遺跡における彫刻刀形石器の削片剥離との関係からも、直接的ではないにしろ何らかの関連性をもつものとして注目したい。

第1次報文によると、第1次調査で検出された旧石器時代の石器群はⅢ層石器群・VI層石器群・Ⅷ層石器群（第2黒色帶）の3つの文化層に大きく分離された。VI・VII層石器群はそれぞれ一か所の石器集中地点が検出されたが、ナイフ形石器等の主要な利器は伴っていない。一方、Ⅲ層石器群は、ソフトローム層中から検出されたものを一括したものであるが、考察では層位学的・型式学的検討を経て7期の変遷を想定している。7期のなかにはその様相がはっきりしない小規模ブロックがあつたり、石器集中地点を形成



第50図 第1次調査 旧石器ブロック配置図

しないものも含めているため今回は大きく3つの時期にわけて解説する¹⁾。

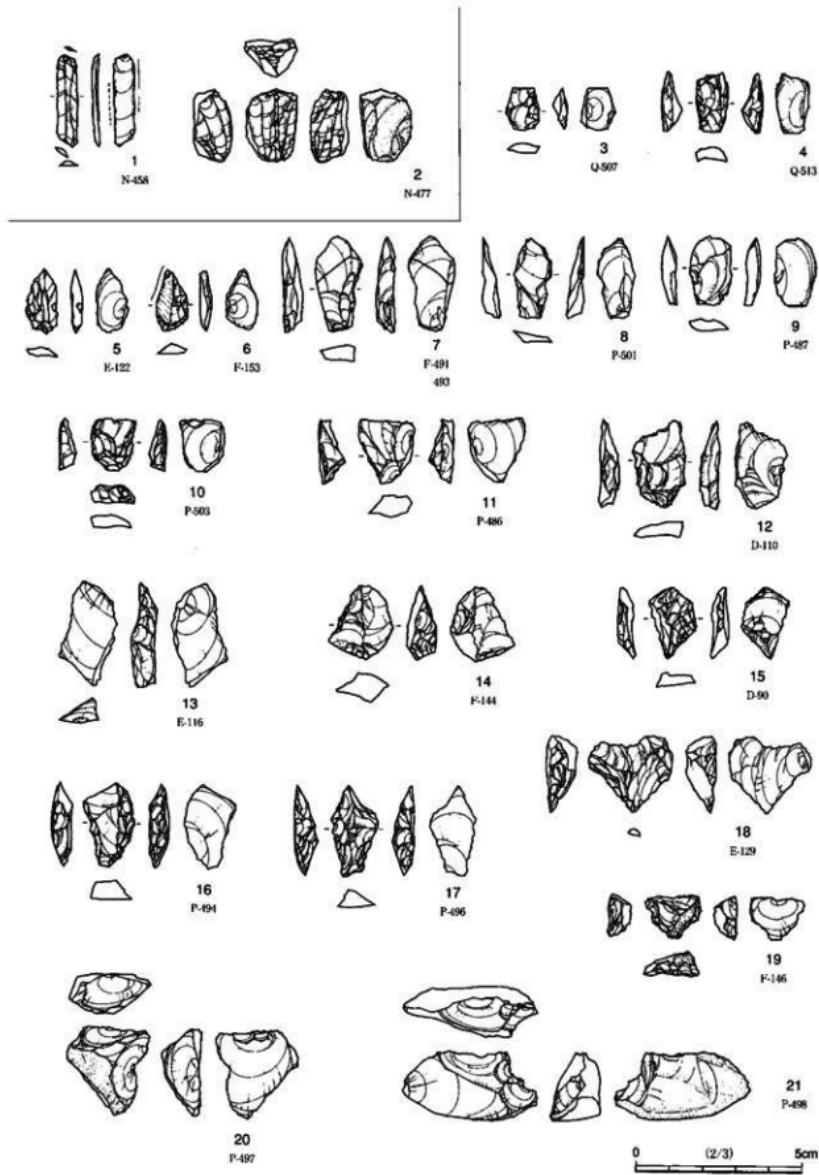
Ⅲ上層石器群はⅢ層上部を中心とした細石刃石器群を特徴とするブロックで、N・Oブロックが所属する〔Ⅲ6期〕。良質な黒曜石を用いた細石刃石核・細石刃が出土した（第51図1・2）。細石刃石核はいわゆる「野辺山型」で、作業面は正面から左側面に及んでいる。裏面・右側面はトロトロに風化した剥離面様の自然面である。打面は作業面側からの調整が施され、細石刃剥離の進行により幅狭なものとなっている。Oブロックでは他に、黒曜石製の楔形石器が出土している。

Ⅲ中層石器群はⅢ層中部～下部を中心としたもので、A～F・P・Qブロックの8か所の石器集中地点が所属する〔Ⅲ2期・Ⅲ4期〕。A～Fブロックには砾群が検出され、砾群間の接合関係が顕著である。ナイフ形石器は切出形・台形・逆三角形等、「幾何形」を呈した小型のものが主体で、素材剥片を横位に設定したものが主体を占める（第51図3～19）。いわゆるナイフ形石器「終末期」に位置づけられる。石材構成はA～FブロックとP・Qブロックとでは異なり、前者はチャート・ホルンフェルス・砂岩・安山岩・珪質頁岩・黒曜石が主に用いられ、後者は嶺岡産の珪質頁岩を多用し、黒曜石・トロトロ石が若干伴う。

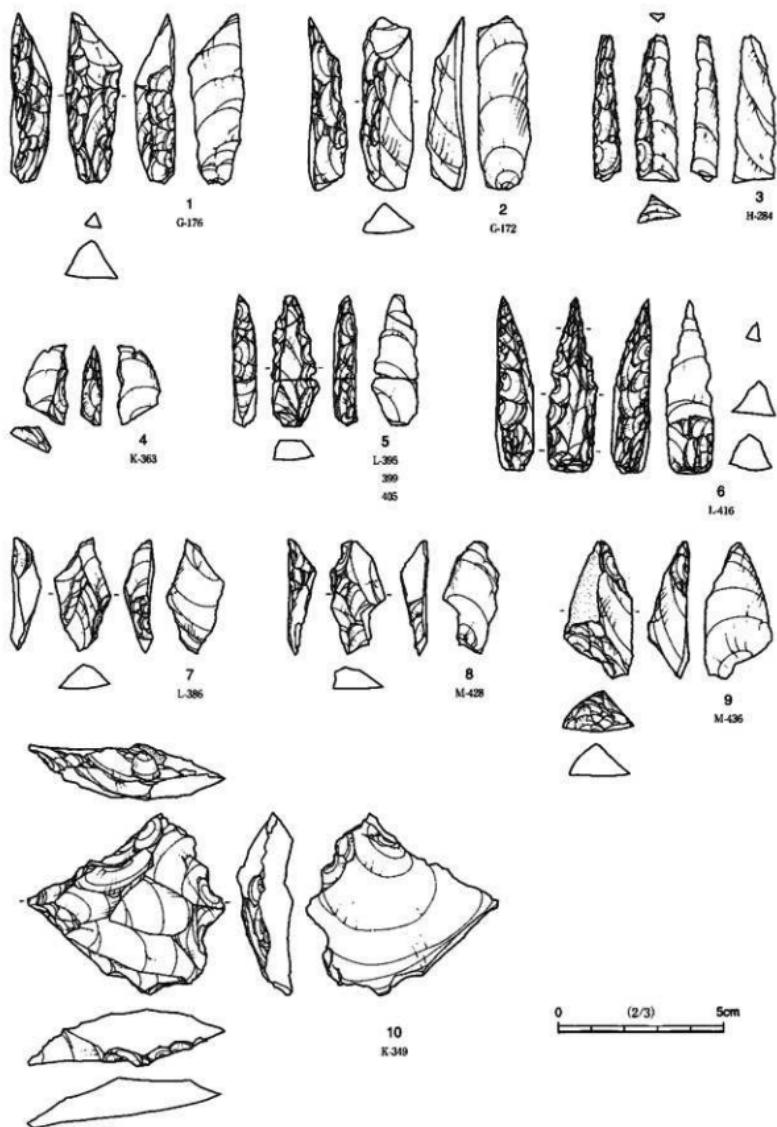
第51図20・21に石核を掲載した。石核に残った自然面の状況から、原石自体の大きさが小さいと推測されるが、比較的厚めの剥片を素材として主要剥離面を打面とするものと（20）、主要剥離面を作業面とするもの（21）がみられる。小型剥片は「幾何形」のナイフ形石器の素材剥片として用いられたのであろう。

Ⅲ下層石器群はⅢ層下部を中心に検出され、切出形のナイフ形石器や角錐状石器等が伴っている〔Ⅲ1期〕。G～Mブロックの7か所の石器集中地点が所属し（第50図）、大枠では、いわゆる武藏野編年でいうところの「IV下～V層段階」の石器群と位置づけられる。第1次報文で掲載された石器実測図は主なトゥールのみであったため、詳しい状況が分からなかった。そこで、今回は主要なトゥールに加え、石核と剥片剥離状況が分かる接合資料を中心に、追加・再実測を行った（第52図～58図）。本石器群には、縦長剥片生産と横長剥片生産がみられ、接合資料などをみると、比較的安定した縦長剥片が剥離されていたようである。縦長剥片剥離には、横位からの作業面調整（稜調整）や打面再生など、「石刃技法」と呼んでも遜色ない石核調整技術がみられ（24・25・31）、切出形ナイフ形石器・角錐状石器との共存関係は注目される。他に縦長指向の剥片剥離を目的としたと考えられる石核もいくつか検出されている（11～14）。横長剥片生産には主に、小砾を素材とした打面転位を繰り返したブロック状の石核が用いられていたと考えられる（16・17・19・21・26・28・29・32）。また分厚い剥片素材の石核もあり、主要剥離面を打面として幅広な剥片を剥離していた（18）。接合資料は比較的豊富で、特にGブロックを中心に接合線が広がり、各ブロックの同時期性を物語っているとも言えよう。ただし、MブロックはG～Lブロックとは若干分布が離れ接合関係も見られず、構成石材も安山岩のみであることから、他のブロックとは独立した状況を呈していることも事実である。一方、G～Lブロックの石材は、安山岩・メノウ・トロトロ石・ホルンフェルス・珪質頁岩・チャート・流紋岩など多種類で構成されるが、その由来は「古鬼怒川」を経由した「北関東系」のものと推定される。なお、角錐状石器とした第52図5・6は単独母岩を用いたものであり、他のナイフ形石器のほとんどが安山岩で占められることは注意が必要だろう。

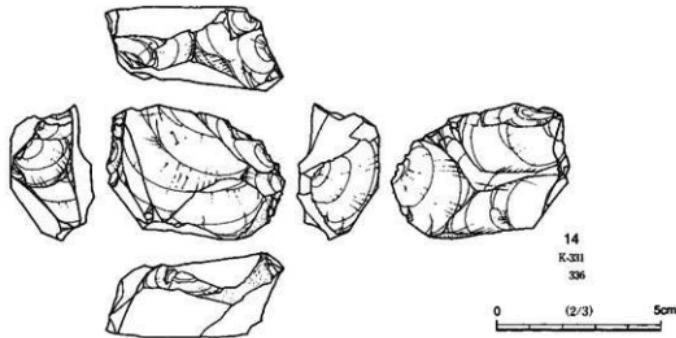
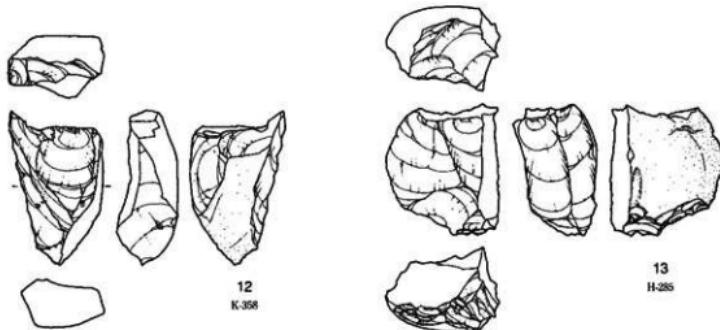
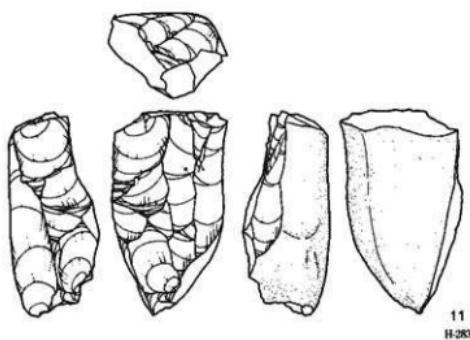
第2次調査で検出された石器集中1は1次調査のⅢ中層石器群にその様相が近いが、砾群の構成砾の特徴やナイフ形石器の形態・利用石材に違いがみられることから、直接的には対比できない。出土層位も、第2次調査のものはⅢ層上部であり、Ⅲ中層石器群よりさらに新しく位置づけられる可能性が高い。



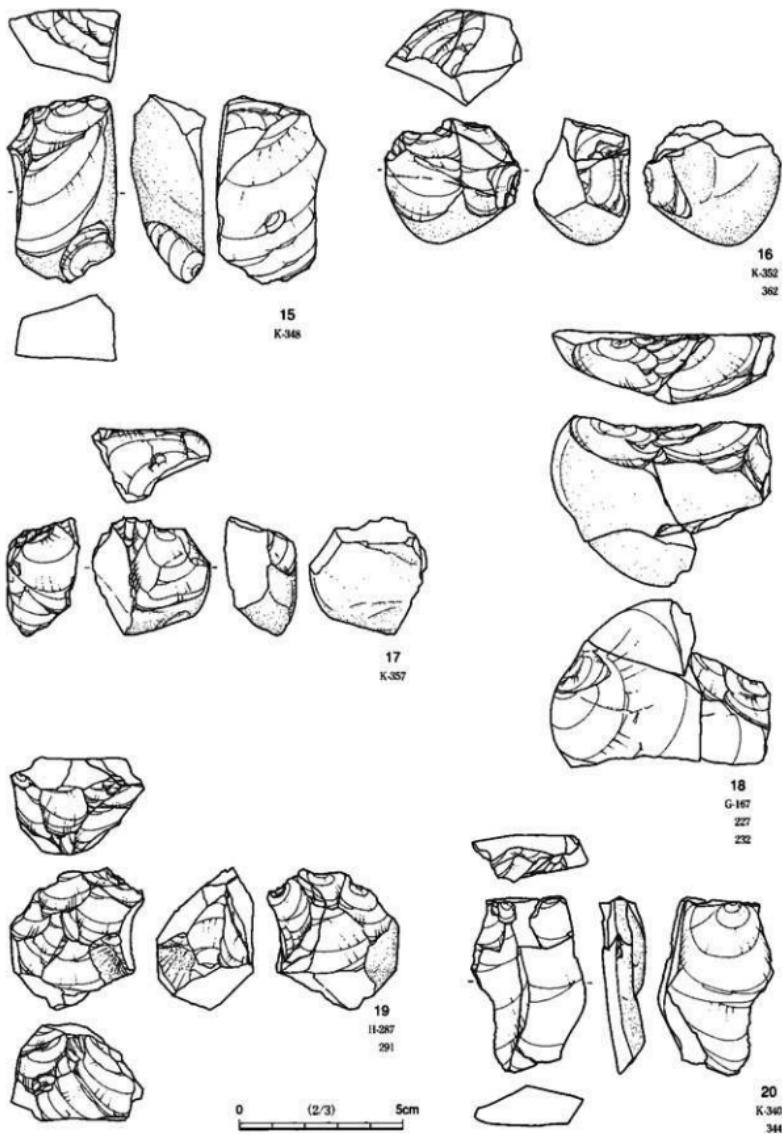
第51図 第1次調査 III上層・中層石器群



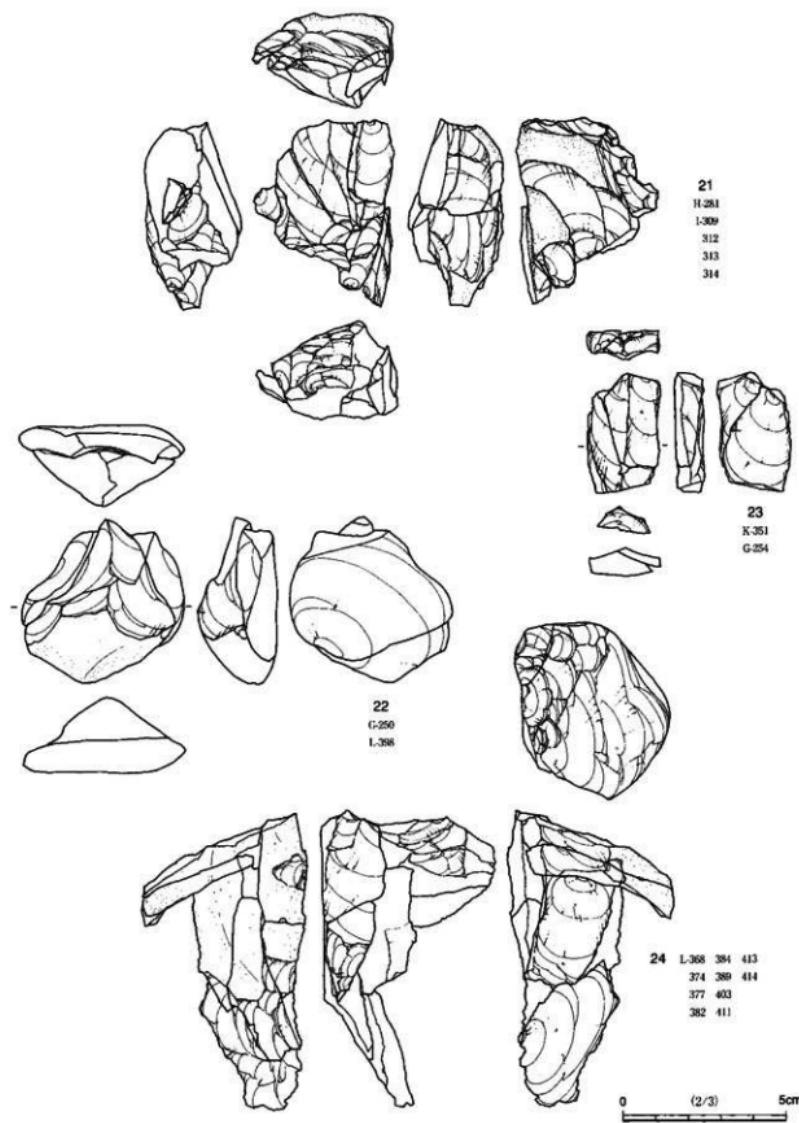
第52図 第1次調査 III下層石器群（1）



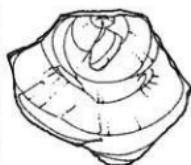
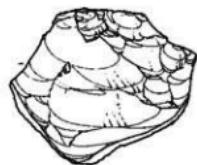
第53図 第1次調査 Ⅲ下層石器群（2）



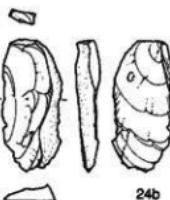
第54図 第1次調査 III下層石器群（3）



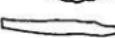
第55図 第1次調査 Ⅲ下層石器群（4）



24a
L-413



24b
L-382



24c
L-368
377



24d
L-414



411



24e
L-374
411



411



24f
L-403

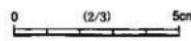


411

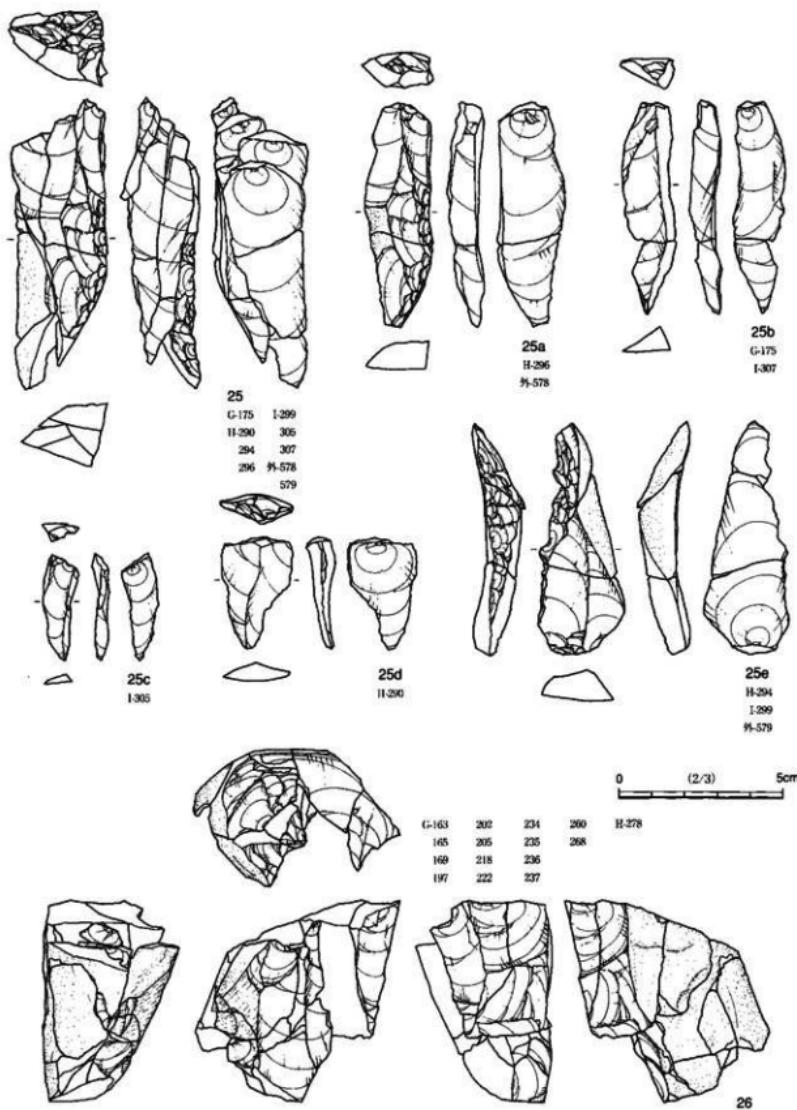
24g
L-389



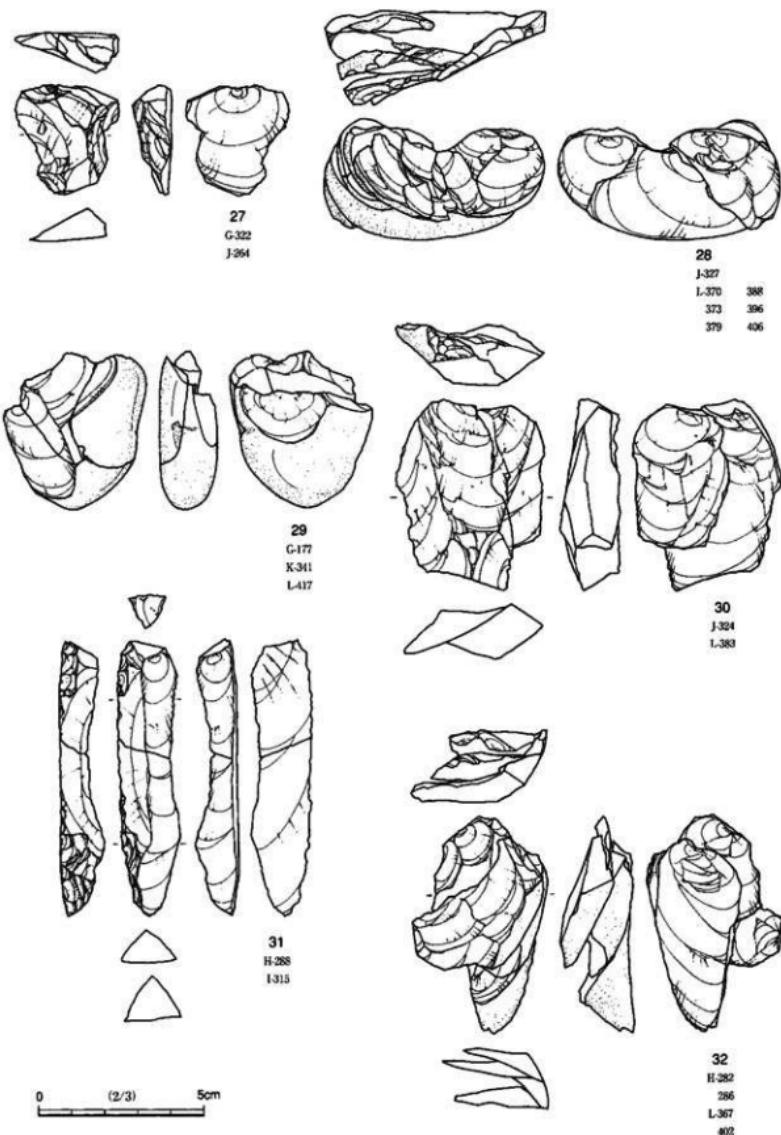
24h
L-384



第56図 第1次調査 III下層石器群（5）



第57図 第1次調査 Ⅲ下層石器群（6）



第58図 第1次調査 Ⅲ下層石器群（7）

2 縄文時代

遺構 縄文時代の遺構では第1次・第2次調査を通して、陥穴が多数検出された。第1次調査では対象面積65,000m²の中から、66基の陥穴が検出された（第60図）。単純計算で約1,000m²に1基となり、非常に陥穴の密度が濃い地域といえる。第2次調査は部分的に拡張した380m²の範囲内の調査であり、結果としては15,000m²で3基のみの検出となってしまったが、全面本調査であれば、第1次調査と同様な密度で陥穴が検出された可能性がある。

陥穴の分布は全範囲にそれほど特徴的に集中することはない。第1次報文では、「遺跡南部の標高42mの高所を囲むようにやや環状に分布しているように見える。また、北部の窪地の辺もやや環状に近い分布をしているように見える。」と記されているが、それほど明確だとは思われない。また、長軸の方向はランダムで、谷津の傾斜方向に左右されることもないよう見受けられる。

形態の特徴については第1次報文で、細かな分類をしているので、まず分類基準を以下に紹介する。

形態分類

A類：口部が長楕円で細長い形態のもの。口部長軸と短軸の長幅比は平均2.9である。

A 1類：底部の幅が狭く棒状で短軸断面が漏斗状を呈するもの。底部の幅はほとんどが20cm以下で、深さは約1.6m。底部にピットを伴うものがある。

A 2類：口部と底部の幅に余り差がなく短軸断面が寸胴で浅いもの。深さは約1m。底部にピットを伴うものがある。

A 3類：底部の幅がやや広く浅いもの。底部の幅は約40cm～50cm、深さは約1m。

B類：口部が楕円形のもの。口部長軸と短軸の長幅比は平均1.5である。

B 1類：底部の幅が狭く棒状のもの。

B 1 a類：大型で縦断面がほとんどオーバーハングしないもの。口部長軸約3.0m。

B 1 b類：大型で縦断面の下半が大きくオーバーハングするもの。口部長軸約2.8m。

B 1 c類：中～小型で縦断面は上部が少しきびれて、底部へ行く程徐々にオーバーハングするもの。

口部長軸約2.0m。

B 2類：底部の幅がやや広いもの。

B 2 a類：縦断面が寸胴のもの。深さ約2.6m。

B 2 b類：縦断面の中程がオーバーハングして深いもの。深さ約2.8m。

B 2 c類：縦断面の底部がオーバーハングして深いもの。深さ約2.7m。

B 2 d類：縦断面がオーバーハングしないで浅いもの。深さ約1.5m。

B 2 e類：縦断面の底部がオーバーハングして浅いもの。深さ約1.2m。

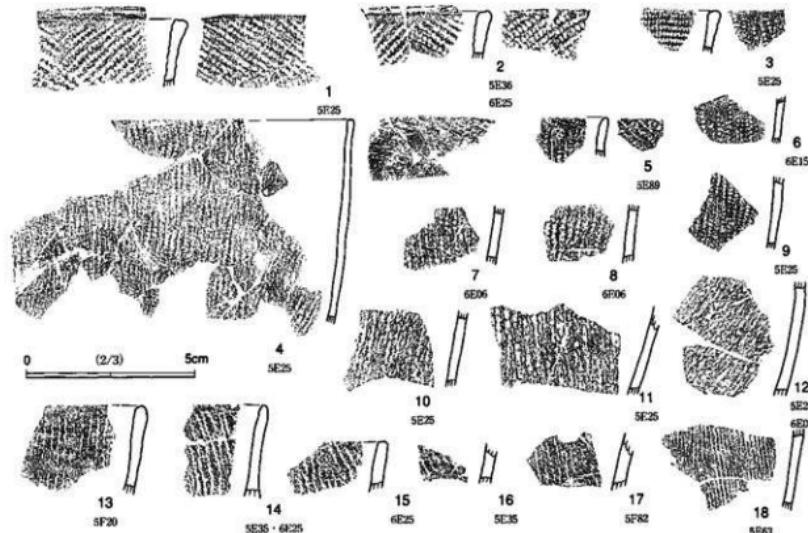
この分類に従うと第2次調査で検出された67号陥穴・68号陥穴・69号陥穴はいずれもA 1類に該当する。第1次調査でも最も多く検出された陥穴の形態である。形態別の分布状況は、東から延びる谷津にどちらかというと近く、標高が相対的に低い位置にA類、その周縁の若干標高の高い位置にB類が分布する傾向にあるようだ。遺構の長軸方向と等高線の関係は、等高線に対して長軸方向が垂直になるのはA類、平行になるものにB類が多い傾向が指摘できようか。ただし、等高線も現在のものであり厳密なことは言えないのが現状である。

包含層 第2次調査では、10F区からまとめて縄文時代の遺物集中地点が検出された。第1次調査では

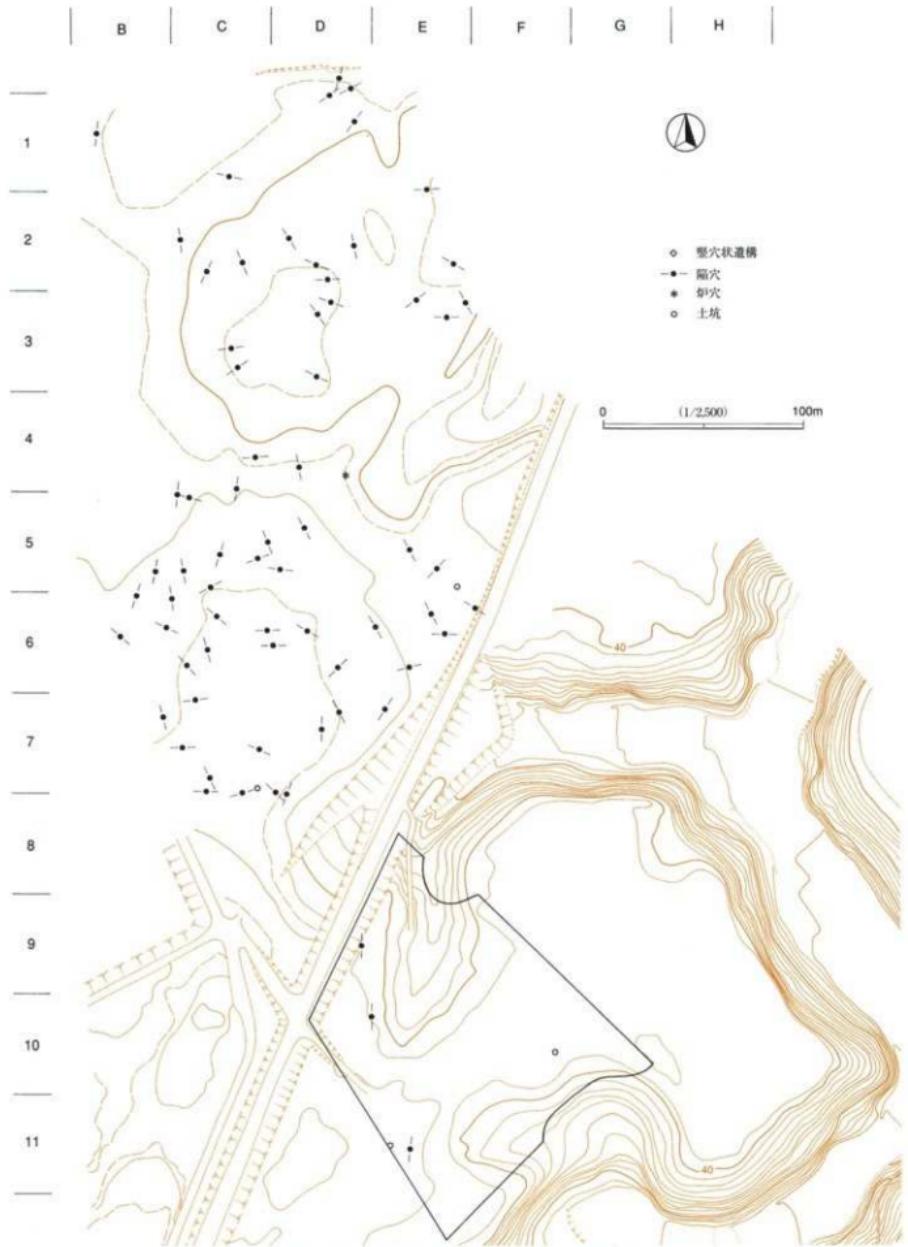
直線距離にして約450m離れた1E区を中心として広範囲に遺物が分布していた。時期は早期～後期にわたるが、周辺遺跡と比較して早期撚糸文・沈線文系土器の割合が明らかに低いことが特徴としてあげられる。ただし、今回整理中に第1次調査の出土遺物を点検したところ、報告書で取り上げられなかった縄文土器が多量に存在することが判明したことから、遺物分布についても今後再検討の必要があろう。未報告資料の中には、縄文時代草創期の多縄文系土器のなかの表裏縄文土器が複数個体あり（第59図1～5）、撚糸文系土器群（同図13～18）との関係・変遷・系統を追う上で重要な資料と思われる。

3 中・近世

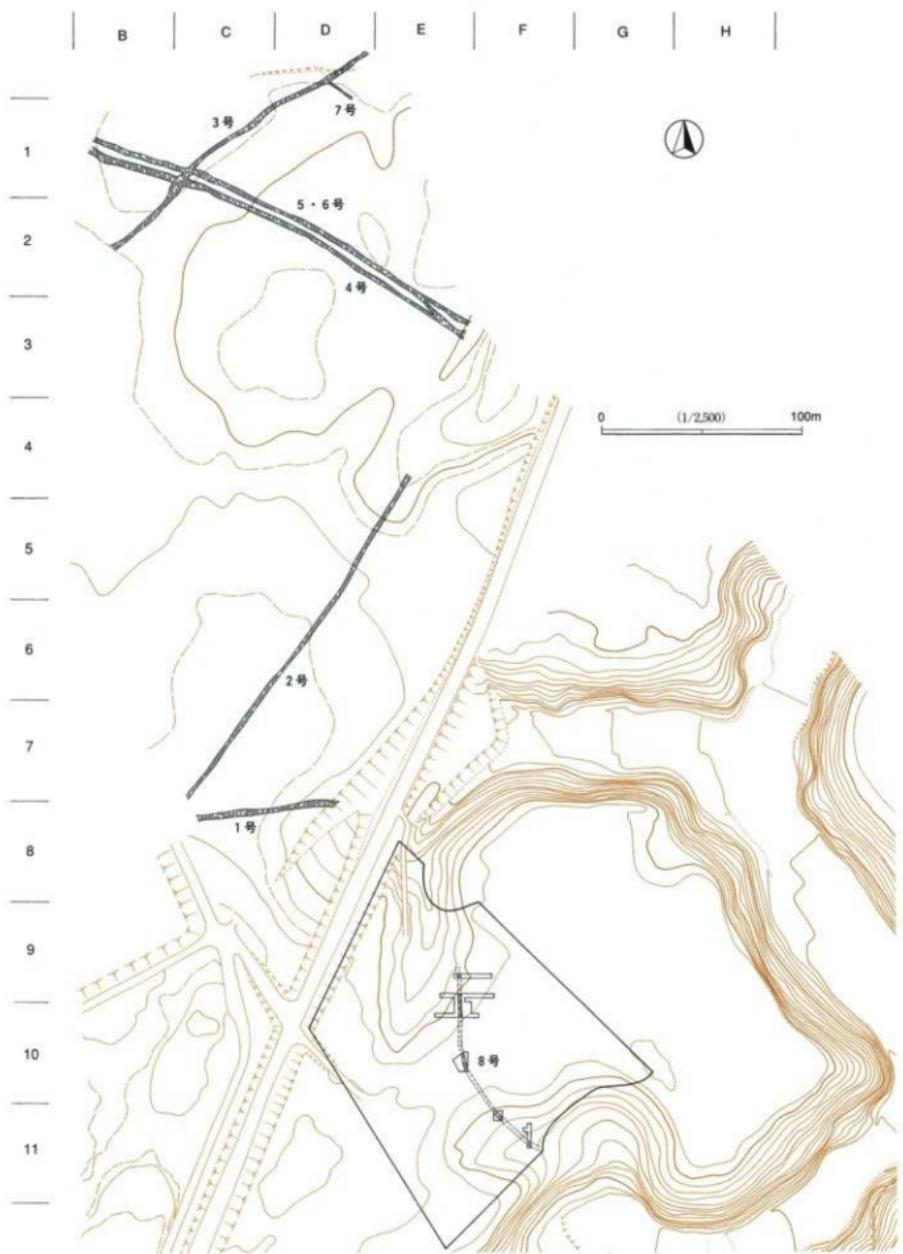
中・近世の遺構は1条の溝状遺構である。すでに第2章で述べたようにこの溝は調査区の中央を縱断するように北側の谷津から南の台地上に直線的に南下し、中央の深い谷津を過ぎたあたりで徐々に東方向に弧を描くように方向を変えていく。第1次調査での1号溝がこの谷津方向に傾斜していること、平面的な位置関係からすると1号溝に連続するようにも見受けられる（第61図）。ただ、1号溝の幅が上端で2.5m～3.5mと8号溝に比べ1mも幅広く、断面形態が底部が左右どちらかへ片寄った皿状であることを考慮すると、直接連続するとは考えにくい。2号溝と4号溝以外の5条の溝は1号溝と断面形態の特徴がほぼ同じなので、同様の目的でつくられたものと判断できる。さて、この左右どちらかに片寄った断面形態の溝は、多くの場合覆土が何回か掘り返された痕跡を残している。また、同時に幅広くなった方向に広く浅く掘り返されていることが多い。覆土に硬く結まった層が確認できないので、道路として使用されていた可能性は低い。馬土手とするには遺構としては規模も小さいので、おそらく、左右どちらかの側に溝に平行して低い小規模な土壙を巡らした、地墳的な溝・土壙ではなかっただろうか。



第59図 香山新田新山遺跡 第1次調査出土 多縄文・撚糸文系土器



第60図 香山新田新山遺跡の縄文時代 遺構配置



第61図 香山新田新山遺跡の溝状遺構

第2節 十余三稻荷峰西遺跡（空港No68遺跡）

1 旧石器時代

立川ロームⅨ層上部～中部にかけて検出された石器集中地点が、1か所検出された〔石器集中1〕。遺物分布は南北に帯状に広がり、昭和56年度に調査された既報告の「石器集中1」に連続するものであることが判明した。環状ブロックの一部を形成するものであるが、2次にわたる調査の結果、北東部がすでに工事用道路によって削平されてしまつており、全体の3分の2のみが検討の対象となる。

遺物分布は、径約25mのほぼ正円形を形成する、いわゆる「環状ブロック」を呈している。中心部には遺物が分布せず空白地帯となっている。昭和56年度に検出された「石器集中1」の出土層位はⅩ層下部～X層と報告したが、基本層序等の検討を行った結果、立川ローム層の細分が現在の標準土層と異なることが判明したため、ここで今回の出土層位を優先して報告することとした。

1・2次調査合わせて、ナイフ形石器1点、台形様石器8点、削器5点、彫刻刀形石器1点、楔形石器1点、使用痕のある剥片11点、調整痕のある剥片3点、剥片・碎片98点、石核13点、敲石1点、礫片1点を含む合計143点が出土した（第62図、第8表）。新たに、「ベン先」形の台形様石器（第62図1）や彫刻刀形石器（同図15）が検出されたが、基本的には前回調査時の出土石器を大きく変更させるような遺物はない。この時期に特徴的な、局部磨製石斧は組成せず、石斧調整剥片などの痕跡もほとんどみられなかった。

石材構成は、前回報告では1点しか出土していないかった安山岩Aが今回の調査で17点検出され、石材構成に大きな変化をもたらした（第8表）。珪質頁岩Bについては安定して出土していて、石器集中地点が環状に配される現象は、この珪質頁岩Bを無くしては考えられないということが判明した。

なお、同遺跡からは環状ブロックが、もう一か所から検出されている〔石器集中2〕。石器集中1と比較して若干上位から検出されているようである。今後は、石器集中1と石器集中2の2か所の環状ブロックの関係をはじめ、周辺地域にその目を広げ検討していく必要があろう。

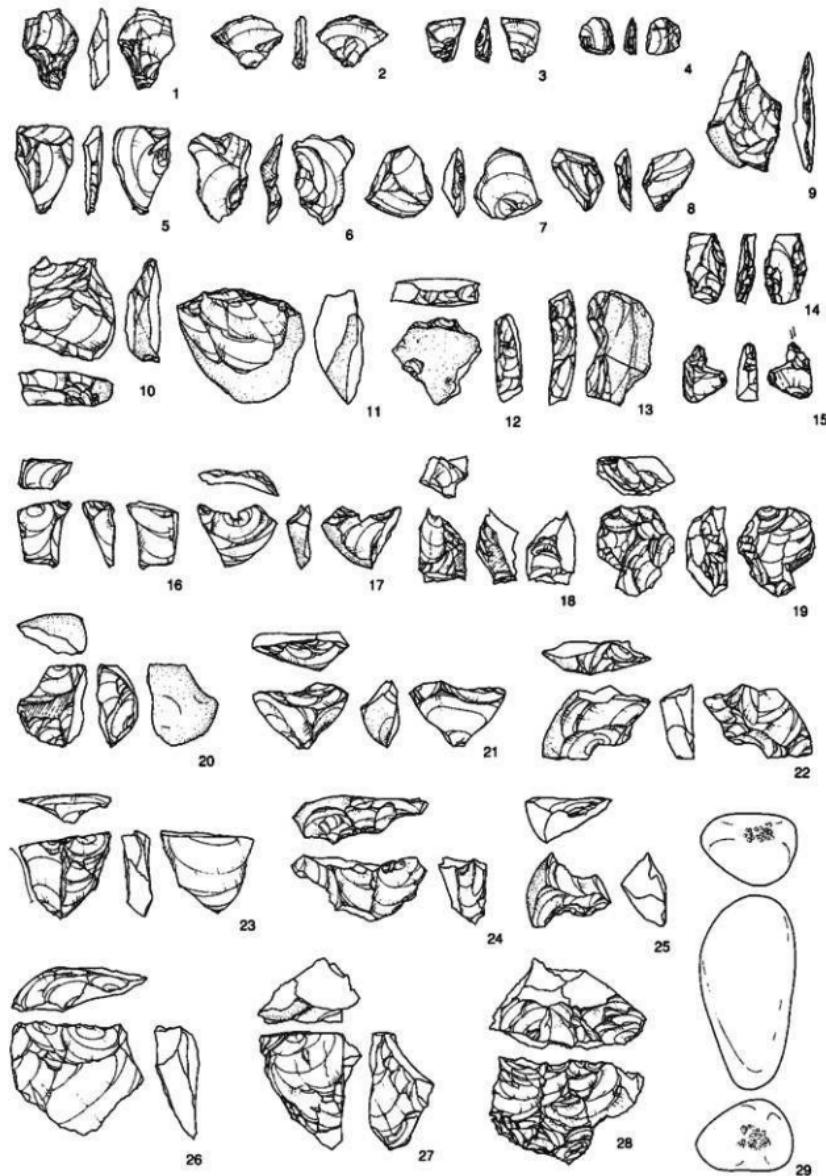
2 縄文時代

縄文時代の遺構は陥穴8基、炉穴3基が出土された。南側に接する第1次調査の調査範囲からは、竪穴状遺構2基、土坑12基、炉穴10基、陥穴20基が検出されている（第65図）。遺構数、分布密度とともに第1次調査と比較して第2次調査は見劣りする。縄文土器の包含層についても同様のことが指摘でき、第1次調査の調査範囲である、南東側に谷を望む台地縁辺部からは、縄文時代早期を中心とする土器・石器包含層が濃密に広がっていたが、第2次調査の土器包含層における分布状況は貧弱であるといわざるを得ない。第1次調査では調査区全体が本調査となり全面で遺構の確認ができたが、第2次調査では本調査範囲が一部にとどまり、さらに調査区の中央に削平された擾乱部分が存在していたことが要因の一つであろう。つまり、削平された部分を含め本調査とならなかった地域には、捉えることができなかつた遺構が分布していた可能性がある。

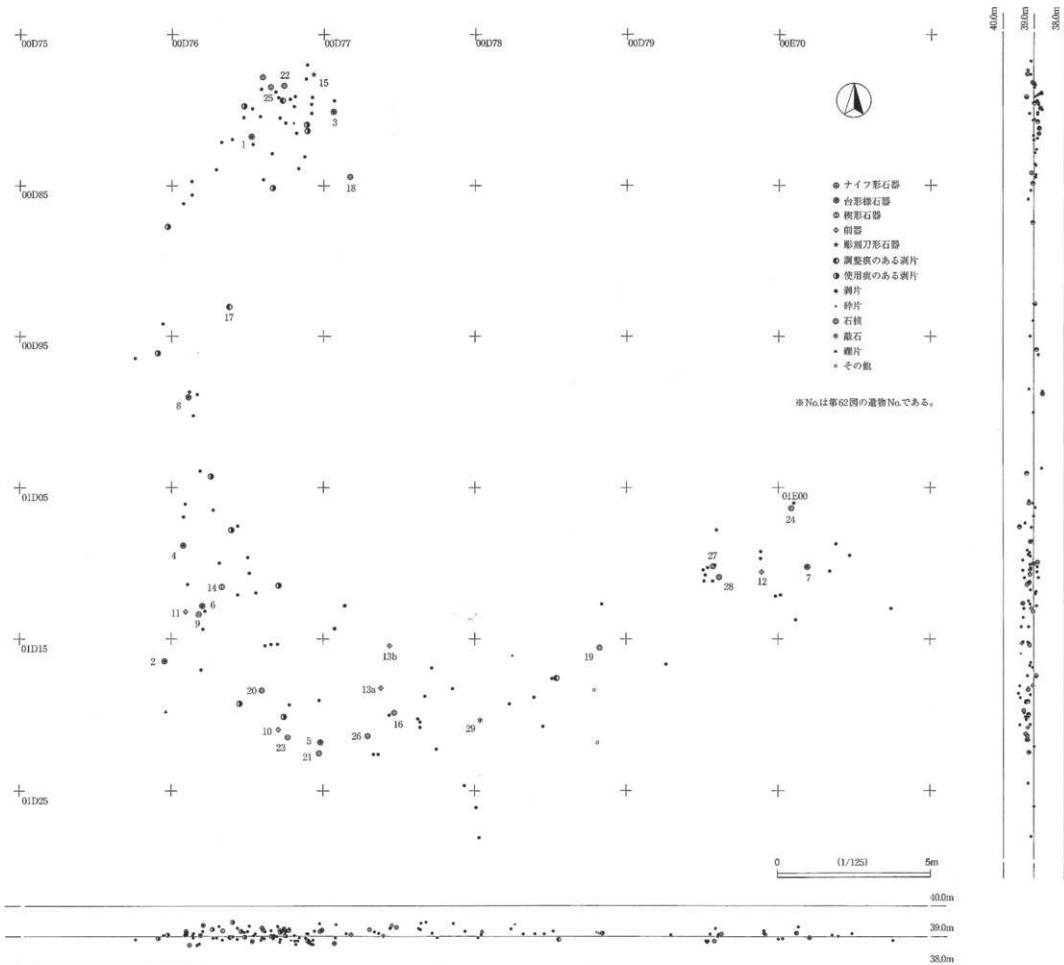
出土した土器は、縄文時代早期～後期にわたっている。0D集中域には早期沈線文系～条痕文系の土器片がまとめて出土している。0A集中区は前期・後期の土器が個体毎にいくつかのブロックを形成している。第2次調査での縄文土器の時期構成は、谷側に沿って分布する第1次調査時のものとほぼ同様である。しかも、本遺跡の東側の谷を挟んだ地域に広がる十余三稻荷峰遺跡（空港No67遺跡）では、各時期で大集落が展開していることが明らかとなっている。現在整理中であり、詳細は触れられないが、整理の進展に伴つて本遺跡の位置づけが、より明確なものとなるであろう。

注1

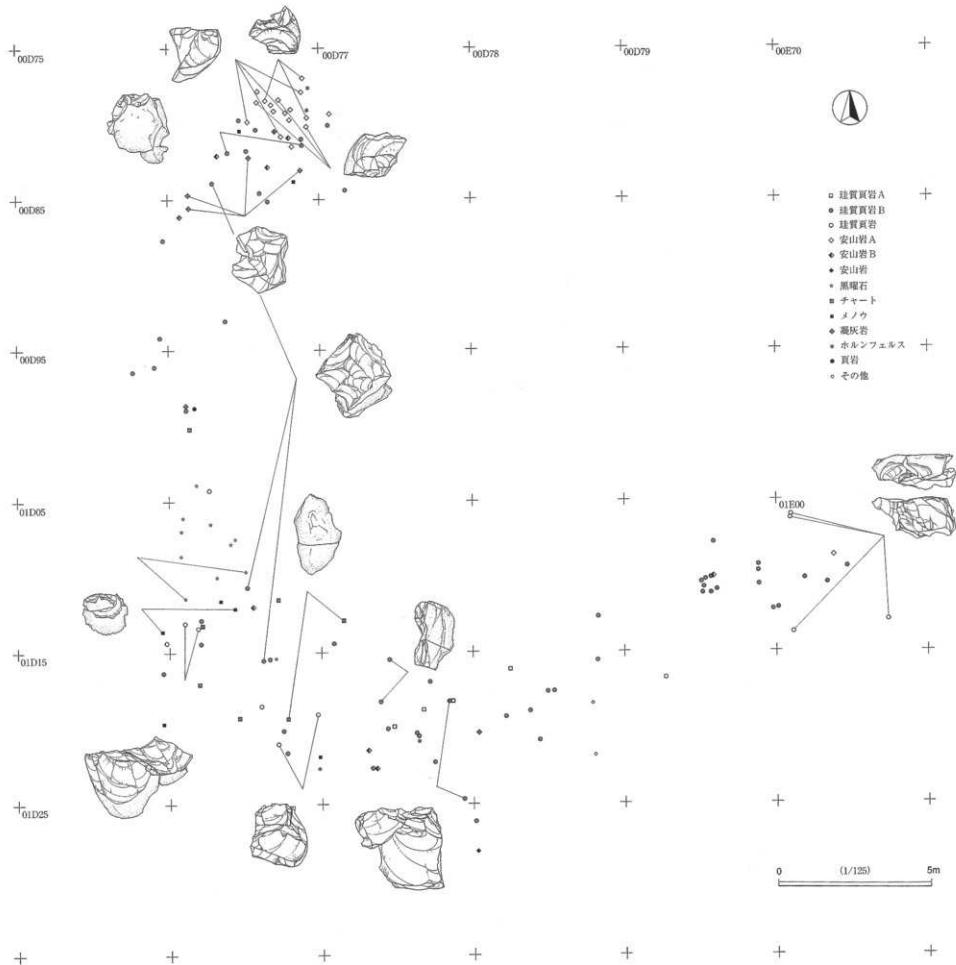
新田浩三 1995 「第二編 原始古代 第一章 旧石器時代」「芝山町史 通史編上」芝山町教育委員会



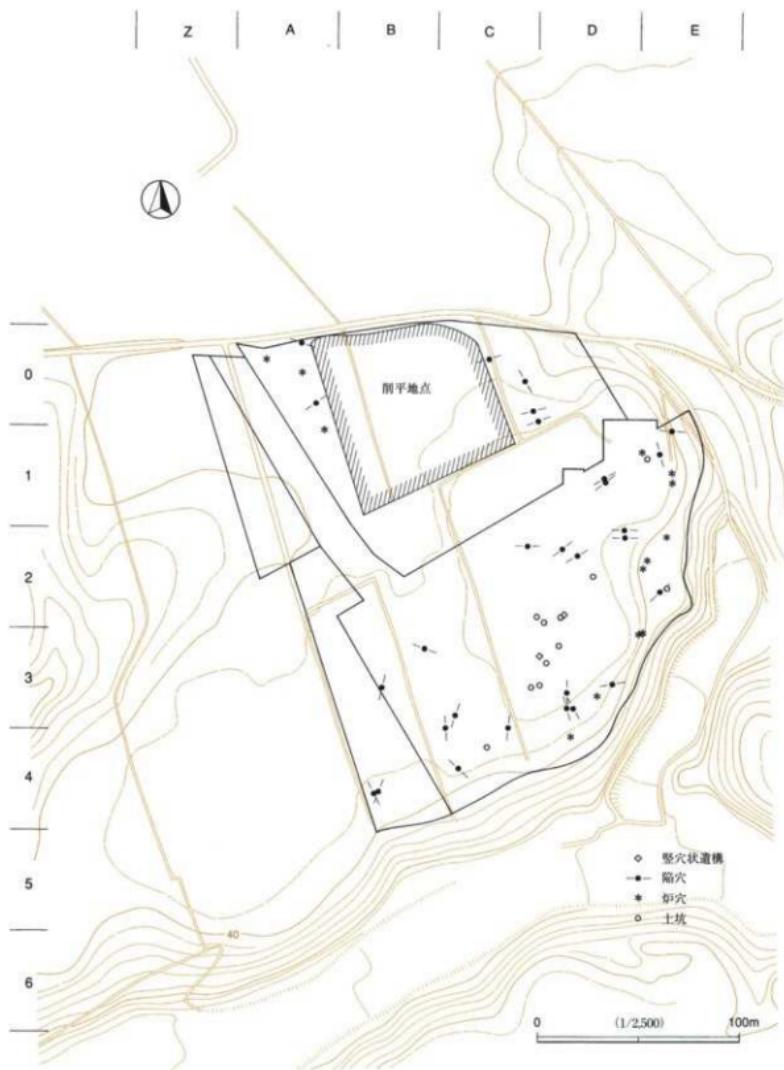
第62図 十余三稻荷峰西遺跡の石器集中1 出土石器集成



第63図 十余三稲荷峰西遺跡の石器集中1 出土状況（器種別）



第64図 十余三稻荷峰西遺跡の石器集中1 出土状況 (石材別)



第65図 十余三稻荷峰西遺跡の縄文時代 遺構配置

写 真 図 版

- 1 香山新田新山道路
(空港No.10道路)
- 8 一鍬田甚兵衛山道路
- 9 一鍬田甚兵衛山北道路
(空港No.11道路)
- 10 一鍬田甚兵衛山南道路
(空港No.12道路)
- 11 一鍬田甚兵衛山西道路
(空港No.16道路)
- 12 取香和田川道路
(空港No.60道路)
- 13 東峰御幸畑西道路
(空港No.61道路)
- 14 東峰御幸畑東道路
(空港No.62道路)
- 15 古込道路
(空港No.14・55・56道路)
- 16 香山新田安戸台道路
(空港No.9道路)
- 17 香山新田念仏面道路
(空港No.8道路)
- 18 香山新田中横瀬道路
(空港No.7道路)
- 28 金沢台道路
(No.は第3図に準ずる)



航空写真 平成13年撮影

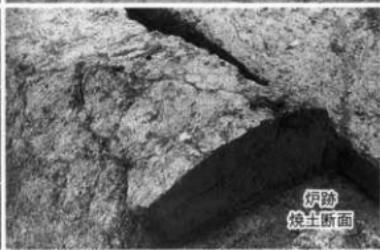
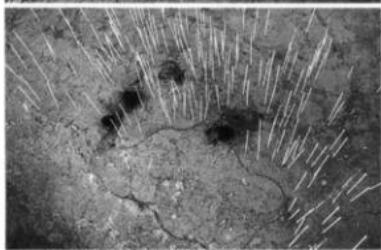


図版 2

香山新田

新山遺跡





伊跡
焼土断面

図版 4

香山新田
新山遺跡



石器集中1
(西より)



石器集中1
(南より)



石器集中1
12E06・07北壁
(南より)



石器集中2
(南より)



石器集中2
11E44・54西壁
(東より)



石器集中2・3
(南南西より)

図版 6

香山新田
新山遺跡



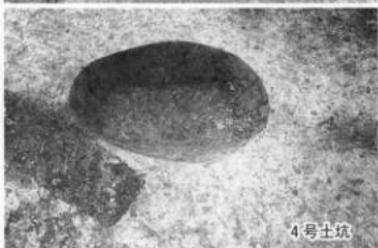
石器集中3
(東より)



石器集中3
(南より)



石器集中4
(南より)



図版 8

香山新田
新山遺跡





石器集中 1



石器集中 2



石器集中 4

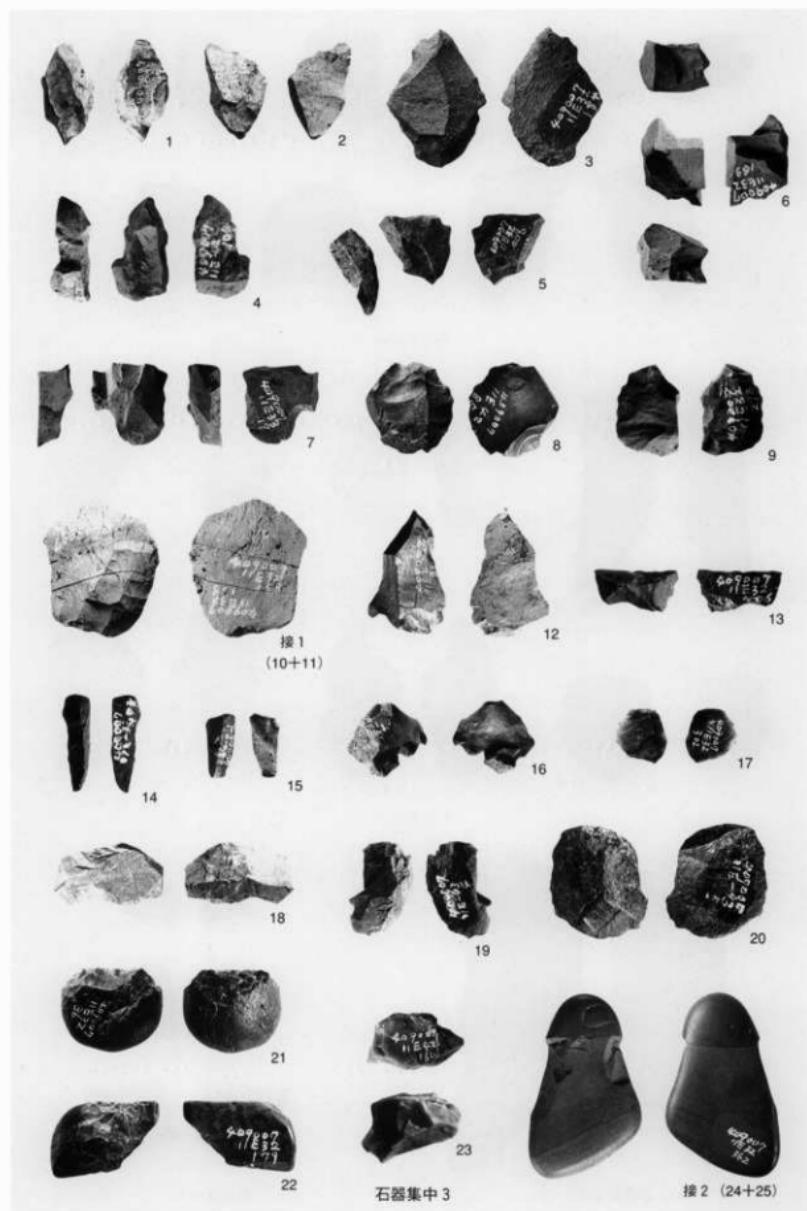
1+2

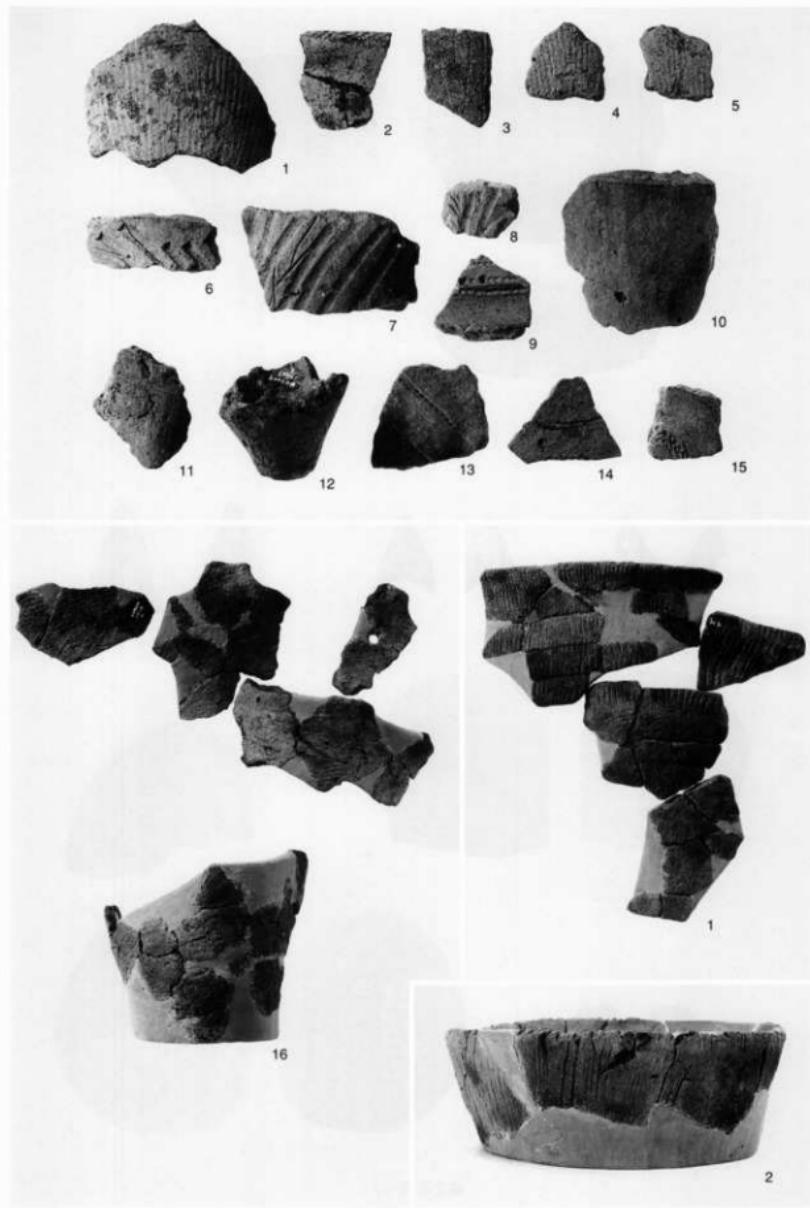


石器集中 5

図版10

香山新田
新山遺跡



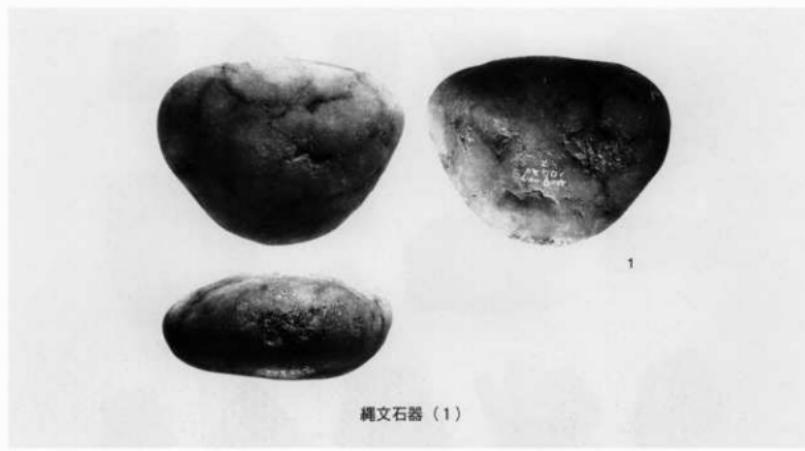


縄文土器

図版12

香山新田

新山遺跡



縄文石器（1）



縄文石器（2）



図版14

十余三福荷
峰西遺跡





21号陷穴



22号陷穴



23号陷穴



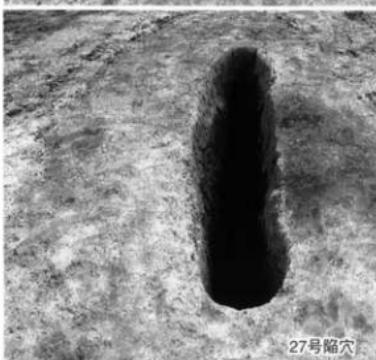
24号陷穴



25号陷穴



26号陷穴



27号陷穴



28号陷穴

図版16

十余三稲荷
峰西遺跡



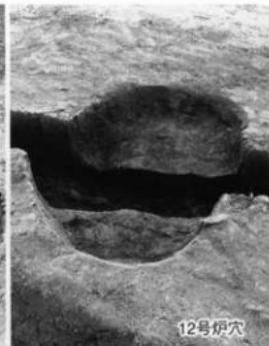


図版18

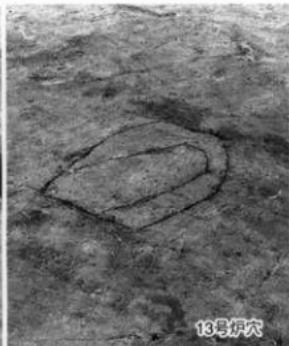
十余三稲荷
峰西遺跡



11号炉穴



12号炉穴



13号炉穴



13号土坑
(南より)



13号土坑
(西より)

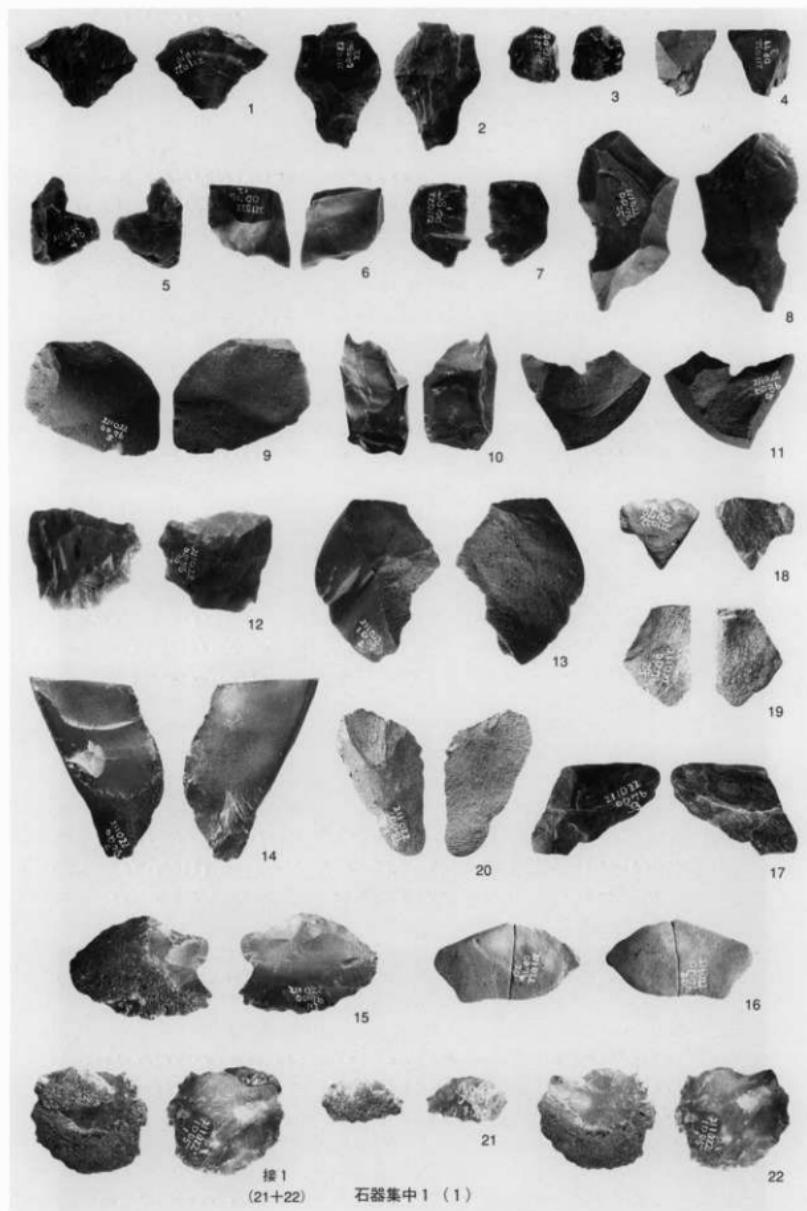


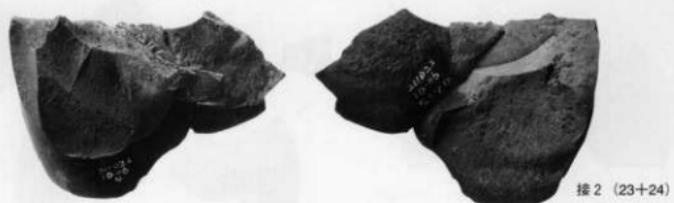
2号溝
OA区内
(西より)



图版20

十余三稻荷
峰西遺跡



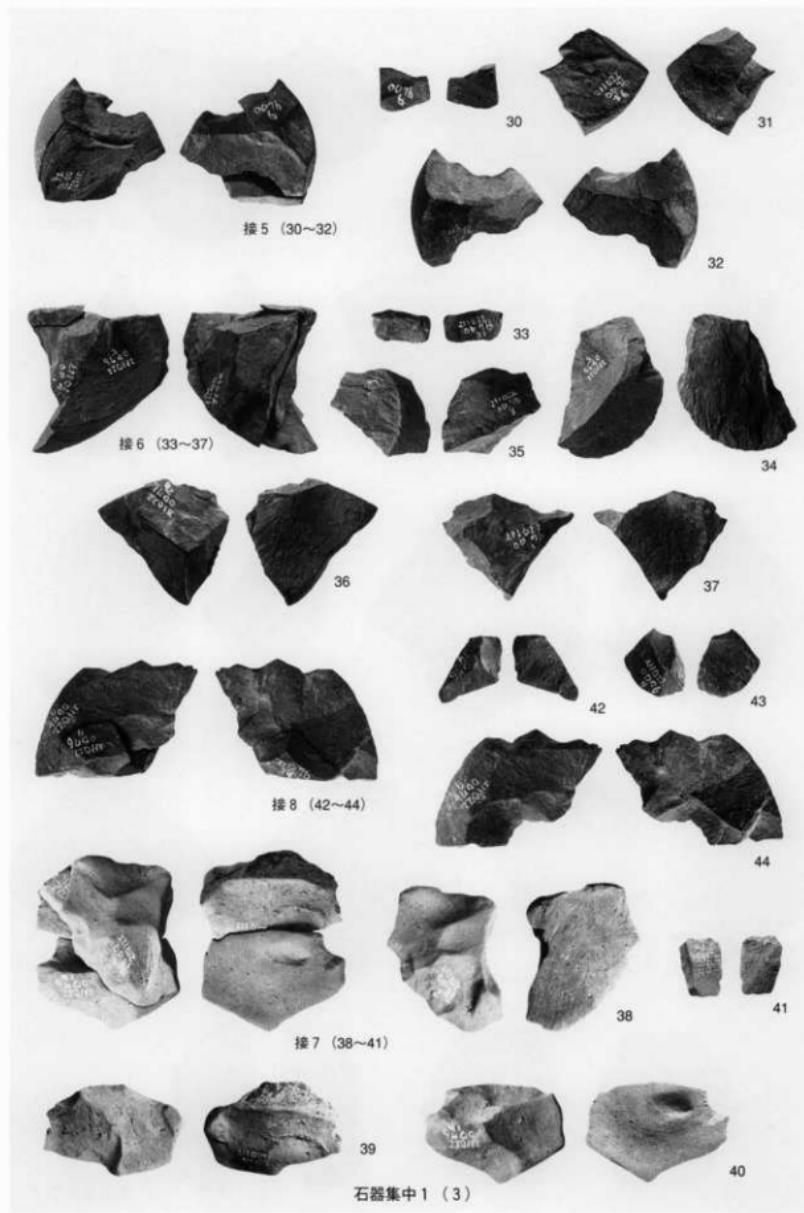


接4 (28+29)



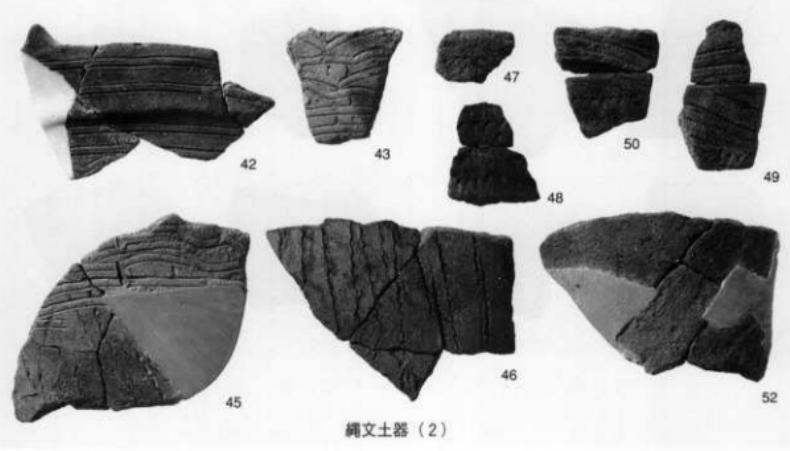
図版22

十余三稜芮
峰西遺跡





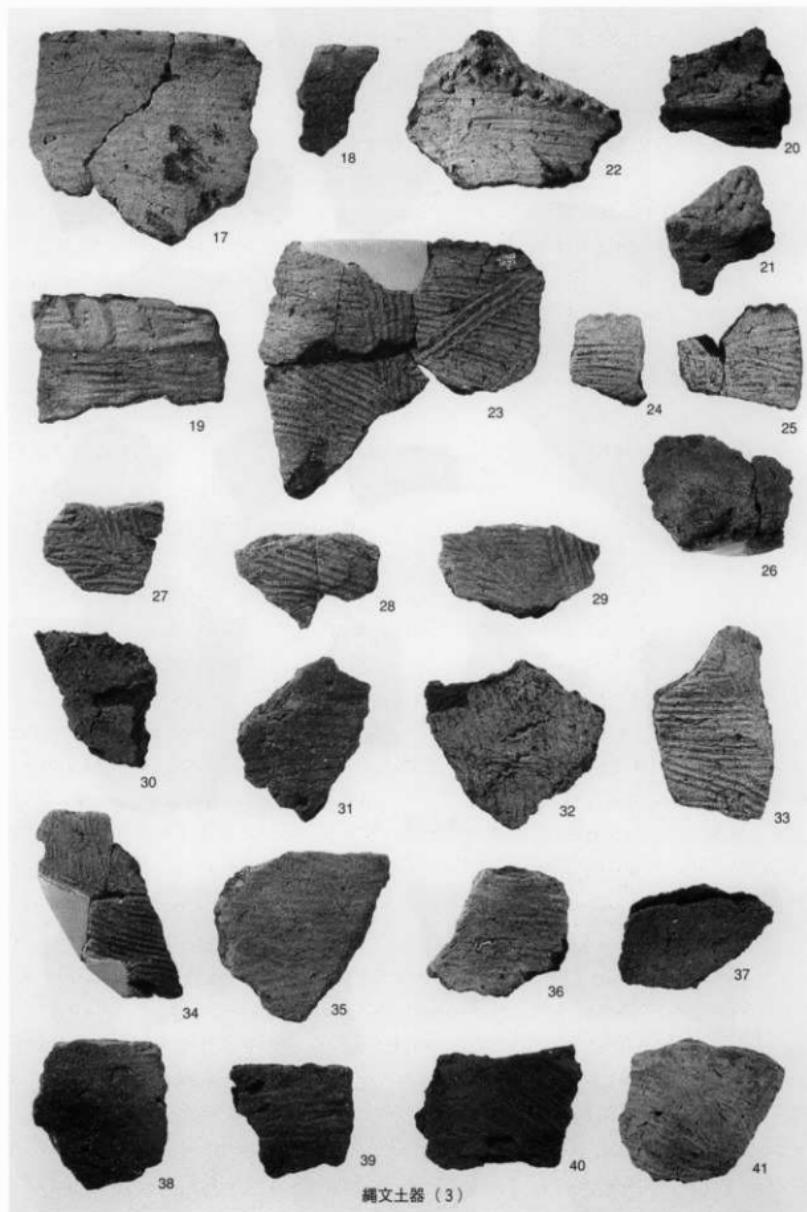
縄文土器（1）

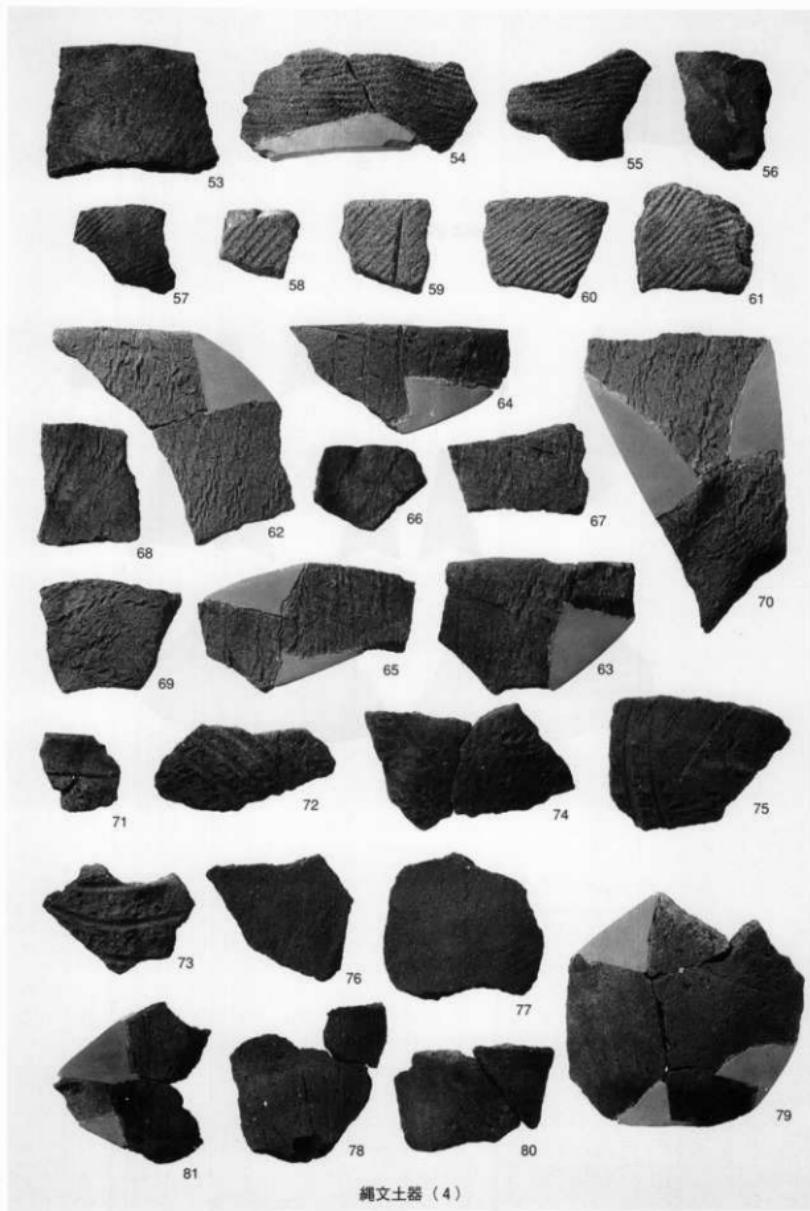


縄文土器（2）

图版24

十余三稜荷
峰西遺跡





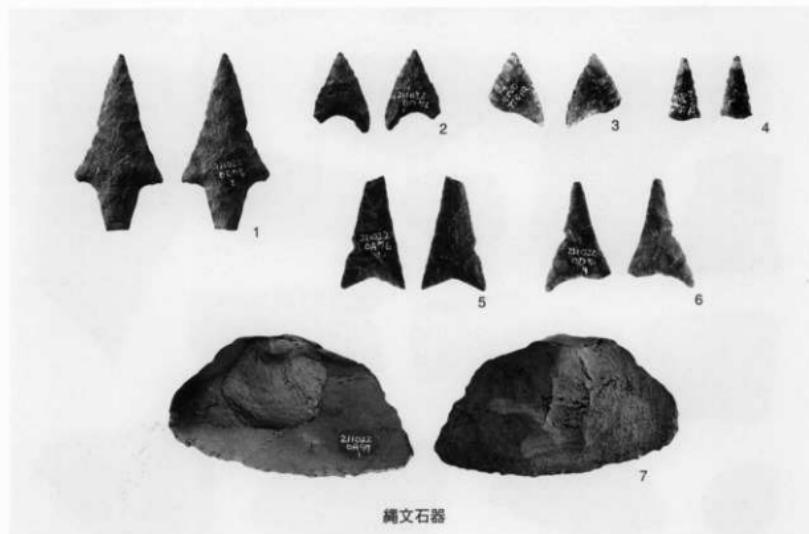
绳文土器（4）

图版26

十余三稻荷
峰西遺跡



縄文土器（5）底部



縄文石器

報告書抄録

ふりがな	しんとうきょうこくさいくうこうまいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしよ							
書名	新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名	香山新田新山遺跡（空港No10遺跡）・十余三稻荷峰西遺跡（空港No68遺跡）							
卷次	XⅣ							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第447集							
編著者名	石倉亮治・鳴田浩司・永塚俊司							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番2 TEL043-422-8811							
発行年月日	西暦 2003年3月25日							
所収遺跡名	所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度 分 秒	東經 度 分 秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
香山新田新山遺跡 (空港No10遺跡)	山武郡芝山町香山新田字下堀尻台117-2他	12409	007 35度 46分 09秒	140度 24分 22秒	19890401 ～0630	15,000m ²	新東京国際空港建設に伴う事前調査	
十余三稻荷峰西遺跡 (空港No68遺跡)	成田市十余三字稻荷峰151-69他	12211	022 35度 47分 46秒	140度 22分 56秒	20000508 ～0831 20001010 ～1031	20,700m ² 2,000m ²	防音林建設に伴う事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
香山新田新山遺跡 (空港No10遺跡)	包蔵地	旧石器	炉跡 石器集中地点	1基 5地点	ナイフ形石器・彫刻刀形石器・楔形石器・搔器・石核等			
		縄文	遺物包含層 陥穴 土坑	1地点 3基 2基	撚糸文・田戸下層式・田戸上層式・茅山下層式・浮島式・興津式等 石鐵・敲石等			
			中・近世	溝状遺構	1条			
十余三稻荷峰西遺跡 (空港No68遺跡)	包蔵地	旧石器	石器集中地点	1地点	台形様石器・彫刻刀形石器・削器・石核等		獣骨の訴訟	
		縄文	遺物包含層 陥穴 炉穴	2地点 8基 3基	田戸下層式・野島式・浮島式・加曾利B式 他 有舌尖頭器・石鐵 他			
			中・近世	土坑 溝状遺構	1基 2条			

※緯度・経度は日本（旧）測地系によるものである。

千葉県文化財センター調査報告第447集

新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書 XVII

香山新田新山遺跡（空港No10遺跡）・十余三稻荷峰西遺跡（空港No68遺跡）

平成15年3月25日発行

編 集 財團法人 千葉県文化財センター
発 行 新東京国際空港公団

新東京国際空港内

（成田市木の根字神台24）

財團法人 千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809-2

印 刷 株式会社 弘 文 社
市川市市川南2丁目7番2号
